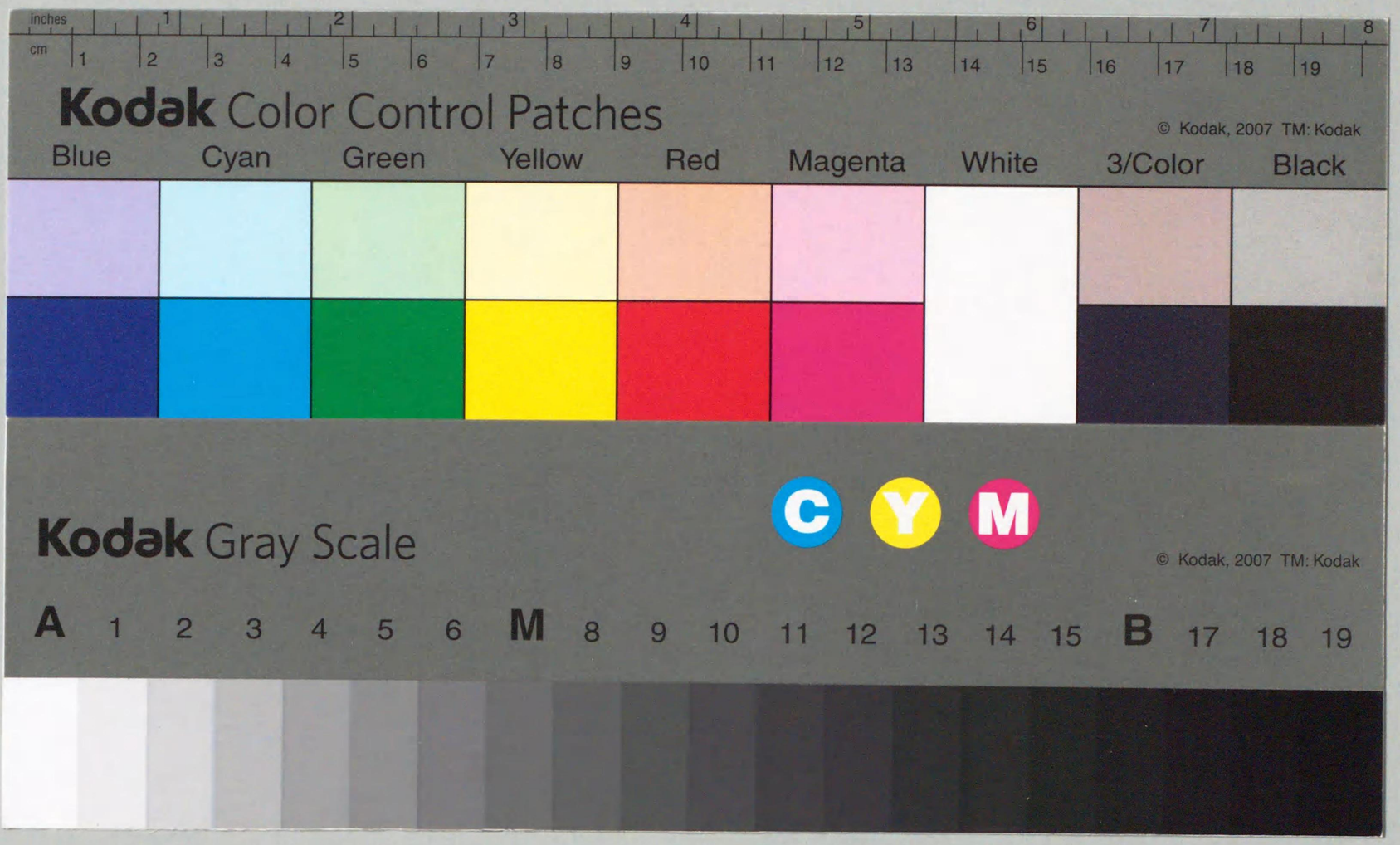
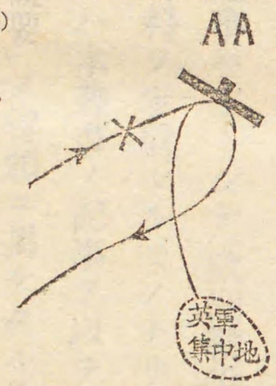


GA79
20
85W35821

歐洲戰爭叢書特第二十四號

大戰間に於ける英佛露聯合作戰

聯合作戰叢書特第二十四號正誤表

頁	行	誤	正
二	十一	「イーブン」會戰	「イープル」會戰
二四	九	「ロフノ」	「ローウノ」
二五	挿圖第一	「サルマイ」	「サルヌイ」
三四	七	「セダン」(9.25)	「セダン」(6.25)
四〇	四	「ヂナン」(7.26)	「ヂナン」(7.25)
五五	挿圖第二	「ラ・フエツル」	「ラ・フエール」
六五	四	「ラニー」(4.22)	「ラニー」(3.21)
六五	四	「モー」(3.22)	「モー」(4.22)
六七	五	九月三日付	九月三日附
七一	一〇	九月一日付	九月一日附
七七	一三	「マルシリー」(4.21)	「マルシリー」(4.22)
九八	九	參謀長	參謀次長
九三	一〇	「リール」	「リーユ」
一二一	九	五月一日	五月二日
一二六	一一	送附	送付
一三一	九	海軍軍司令部	海軍軍令部
一五八	八	作軍師團數	作戰軍師團數
一六〇	一一	以上	これ以上
一七五	上欄	「シヤンチー」	「シヤンチイー」
一七六	二	附かん	防かん
一九五	五	突氣	空氣
二〇五	八	九日	九月
二〇五	一一	[illegible]	佛軍
二一一	九	「ハリツンユ」	「バリツシユ」
二三八	二	稜線占領(地名不名)を確保し	稜線(地名不明)を占領確保し
二三八	五	今戰	會戰
二三八	一一	(挿圖第八圖參照)	(附圖第八參照)
二四八	九	言く	曰く
二五七	挿圖第七	「チンメル」	「ケンメル」
二六一	上欄	(挿圖第七參照)	(挿圖第八參照)
二七〇	九	(附圖第九十參照)	(附圖第九、十參照)
二七二	六	概	慨
二九五	一	能はして	能はずして
三〇四	二	「フオツスユ」	「フオツシユ」
三〇八	一	佛戰課參謀	作戰課參謀
三〇八	一三	戰略	政戰略
附圖第一			
附圖第九		(4.22)「ウアシツト」 「ナンジー」 「アブリクール」 「リユネビール」	(4.22)「ウアレツト」 「ナンシー」 「アヴリクール」 「リユネヴイル」

85W35821
209.71

緒言

一、本叢書ハ當部職員中歐洲戰爭ヲ研究セル者ノ作業ヲ編纂シ我軍事界ノ參考ニ供スルヲ目的トナス之カ爲メ叙事ト評論トヲ問ハス苟モ研究ノ資トナスヘキモノハ得ルニ隨テ之ヲ錄ス而シテ其叙事ハ現時材料ノ關係上確實ヲ期シ難キモノアリ又其評論ハ作業者ノ私見ニ過キサルヲ以テ正鵠ヲ失スルモノナキヲ保セス

二、本叢書ノ記事ハ主トシテ「歐洲戰爭概要」(偕行社刊行)ヲ基礎トナシ之ニ最近ニ得タル材料ヲ參取セルモノナリ故ニ「歐洲戰爭概要」ノ記事ト一致セサル點アルトキハ本叢書ノ記事ヲ以テ比較的正確ニ近キモノトナスヘシ

三、「歐洲戰爭概要」ノ冒頭ニ掲ケタル凡例ハ本叢書ニモ亦之ヲ適用ス

參謀本部

GA70
20
國會圖書館藏書
60. 9. 18
85W35821

歐洲戰爭叢書特號總目次

特第一號　千九百十四年八月「リエージ」及「ナムール」要塞ノ攻略
特第二號　英國埃及遠征軍ノ作戰
特第三號　千九百十四年「フランドル」會戰
特第四號　千九百十四年十一、十二月「ロッヅ」附近ノ會戰
特第五號　大局ヨリ見タル世界戰史（千九百十四年）
特第六號　同　（千九百十五年）
特第七號　同　（千九百十六年）
特第八號　同　（千九百十七年）
特第九號　同　（千九百十八年）
特第十號　千九百十七年西方戰場ニ於ケル統帥ノ眞相
特第十一號　殲滅戰
特第十二號　開戰前ニ於ケル佛軍ノ作戰計畫及「マルヌ」會戰ニ至ル研究　（其一）
特第十三號　同　（其二）
特第十四號　同　（其三）
特第十五號　同　（其四）
特第十六號　千九百十四年八月、九月露塊第一會戰ニ於ケル塊軍總司令部及第四軍ノ行動
特第十七號　千九百二十一年、二十二年希土戰爭經過ノ概要
特第十八號　熱キ地ニ戰スルノ概念
特第十九號　世界大戰ノ戰術的觀察　（第一卷）
特第二十號　同　（第二卷）
特第二十一號　同　（第三卷）
特第二十二號　同　（第四卷）
特第二十三號　同　（第五卷）

大戰間に於ける英佛露聯合作戰

目次

緒言……一頁
第一章　概說……四
第二章　大戰前に於ける英、佛、露の外交……八
千九百十二年に於ける英佛軍事協約—千八百九十二年露佛軍事協約—露佛參謀總長會議
第一期　割據時代
第三章　英佛聯合作戰……二七
自開戰至「マルヌ」會戰　英國軍事會議—開戰當時英政府の「フレンチ」元帥に與へたる訓令—「フレンチ」將軍の佛國政府及總司令部の訪問—「フレンチ」元帥の佛第五軍司令部訪問—八月十七、八日頃佛軍總司令官の企圖—國境會

戰に於ける佛第五軍と英軍との協同—佛第五軍及英軍の退却—「サンカンタン」に於ける「ジョッフル」、「ランルザック」、「フレンチ」三將軍の會見—「ジョッフル」將軍の英軍に對する努力—「サンカンタン」附近會戰に於ける英佛軍の協同—「ジョッフル」將軍敗退せる英軍に對する再度の努力—英佛軍の第二次退却—巴里總督「ガリエニー」と「フレンチ」との協同—「マルヌ」會戰—「ランルザック」將軍の罷免—「ジョッフル」將軍の赤誠「フレンチ」將軍を動かす—九月六日以後巴里東方に於ける英佛軍の攻勢及爾後の追擊　英軍の情況—觀察

第四章　自開戰至「マルヌ」會戰　英、佛、白軍協同作戰の概況……八二

第五章　自「エーヌ」會戰至「イープル」會戰　英佛白聯合作戰……八四

延翼競爭—「イープン」會戰

第六章　自開戰至千九百十四年末　露對英佛軍聯合作戰……九七

開戰當時に於ける露軍作戰計畫及集中—千九百十四年に於ける露對英佛軍の連繫

第七章　千九百十五年に於ける露對英佛軍聯合作戰……一一一

千九百十五年に於ける獨軍の作戰方針—露軍と聯合軍との武器補充問題—「カルパーテン」方面の戰鬪—千九百十五年「マヅール」冬季作戰—佛軍の「シャンパーニュ」附近の攻勢—英、佛連絡將校の露國到著—英軍の「アラー」附近の攻擊—露、佛、塞國軍の連絡—獨墺軍の「ゴルリッツ」突破間に於ける露對英佛軍の交涉—佛軍の「アラー」附近の攻勢—「ゴルリッツ」突破以後八月に至る間東方獨軍の攻勢

第八章　「ダーダネルス」作戰に關する英佛露軍の交涉……一三〇

「ダーダネルス」作戰問題と英國の主張—「ガリポリ」作戰に關する露國の主張—「ガリポリ」半島英佛軍作戰

第九章　千九百十五年に於ける英佛軍聯合作戰……一三八

千九百十五年初に於ける英佛軍作戰方針—英佛軍兵器の充實—英佛軍の東方露軍に協力する爲の攻勢—千九百十五年「シャンパーニュ」秋季戰と英佛軍の交涉

第二期　合議時代

第十章　千九百十五年末に於ける聯合軍指揮統一問題……一四五
千九百十五年十二月「シャンチイー」聯合軍軍事會議—「サロニカ」戰線に對する意見衝突—聯合軍指揮統一機關設置に關する英、佛、露の意見

第十一章　自千九百十五年末至「ヴェルダン」戰　英佛露聯合作戰……一五三
千九百十六年に於ける聯合軍の攻勢準備と佛「ジョッフル」將軍の努力—「ヴェルダン」戰に對する聯合軍の對策—千九百十六年三月十二日「シャンチイー」聯合軍軍事會議

第十二章　自千九百十六年七月至同年十二月　聯合軍總會戰指導……一六二
千九百十六年戰に關する觀察

第十三章　佛軍司令部に於ける聯合作戰指導機關……一七〇
新聞課—外國戰場課

第十四章　千九百十七年に於ける英佛露聯合作戰……一七五
千九百十六年十一月十六日「シャンチイー」軍事會議—「ジョッフル」將軍の千九百十七年の爲の攻勢計畫—佛民心の歸趨と內閣の改造—佛軍統帥權の移動—「ジョッフル」將軍と「ニヴェール」將軍との更迭—英國政府の更迭軍事內閣の成立—「ニヴェール」將軍の攻勢計畫—千九百十七年一月「カレー」會議(英、佛)—英佛聯合軍指導問題に對する「ニヴェール」、「ヘーグ」兩將軍の爭鬪—獨軍「ヒンデンブルグ」線に退却當時に於ける英、佛軍の協同—佛國內閣の更迭及政府と統帥部との關係—佛軍攻勢開始の延期—英佛軍の攻勢—五月四日攻擊續行に關する英佛聯合會議—佛軍總司令官「ニヴェール」將軍と「ペタン」將軍との更迭—千九百十七年後半期に於ける東西兩方面の攻勢

第十五章　自千九百十六年至千九百十八年　英佛軍戰線問題……二〇七
「ジョッフル」、「ヘーグ」兩將軍の戰線問題の論爭—「ニヴェール」、「ヘーグ」兩將軍の戰線問題の論爭—「ペタン」、「ヘーグ」兩將軍の戰線問題に對する佛人「アベフエリ」の主張

第十六章　聯合軍最高軍事會議及總豫備隊問題……二一八
「ラッパロ」會議—聯合國最高軍事會議創設に關する三國協約の主文—千九百十八年一月及二月「ヴェルサイユ」聯合軍最高軍事會議

第十七章　千九百十八年獨軍第一次攻勢前に於ける英、佛軍の協同……二二九
千九百十八年に於ける同盟、聯合兩軍の作戰方針—「ペタン」將軍と佛國の輿論—千九百十八年早春獨軍の攻擊企圖に對する「ペタン」、「ヘーグ」兩將軍の協定

第十八章　第三期　統一時代
獨軍第一次攻勢と聯合軍指揮の統一……二三八
獨軍第一次攻勢—自三月二十二日至三月二十五日　獨軍第一次攻勢間「ペタン」將軍の英軍援助—英「ヘーグ」將軍、佛「フオッシュ」將軍を聯合軍最高統帥官に推戴す—三月二十六日英佛首腦部の「ドウラン」會議—「フオッシュ」將軍聯合軍最高司令官に任命せらる—聯合軍最高統帥官の任命と英人「デワー」氏の意見—聯合軍最高統帥官の任命と英「キッチナー」訓令の變更—聯合軍指揮統一問題に關する所見

第十九章　獨軍自第二次至第五次　攻勢間英佛軍の協同……二五五
獨軍第二次攻勢と聯合軍の協同—獨軍第二次攻勢後第三次攻勢開始に至る間英佛軍の協同—獨軍第三次攻勢—獨軍第四次攻勢—獨軍第五次攻勢
千九百十八年獨軍攻勢間英佛聯合作戰に關する觀察……二七〇

第二十章　聯合軍の攻勢……二七五
「ボンボン」會議と「フオッシュ」將軍の作戰方針—「アミアン」附近の攻勢—「サンミエール」附近の攻勢—九月以後の攻勢

第二十一章　大戰間に於ける英、佛兩國政府及統帥部の更迭と聯合統帥……二九五
開戰前に於ける佛國政府と統帥部との關係—開戰前に於ける英國政府と統帥部との關係—「ヴイヴィアニー」內閣と「ジョッフル」統帥部—「アスキス」內閣と「フレンチ」統帥部—千九百十五年十一月英國戰爭會議—「ブリアン」內閣と「ジョッフル」統帥部—「ブリアン」內閣の改造—「ブリアン」內閣と佛軍司令官「ニヴェール」將軍—「リボー」內閣と「ニヴェール」統帥部—「バンルヴェー」內閣—「クレマンソー」內閣と「ペタン」統帥部—「ロイドジョージ」內閣の成立—合議時代に於ける聯合統帥に關する觀察

第二十二章　聯合國間の戰爭指導機關の統一に就て……三〇六

參考書名左の如し

「ヘーグ」元帥の統帥
解　放　戰（佛）

「フレンチ」將軍の戰爭報告

「ロール」少佐著
佛軍第三次大本營第三部

「ネヴィルリットン」著
英　軍　大　本　營
千九百十六年佛軍總司令部
戰史研究委員會著
戰　史　集（露）

「ルーセー」中佐著
千九百十七年四、五月に於ける「エーヌ」會戰

「ウライクト」氏著
聯合最高軍事會議の眞相如何

「メルメイクス」著
「ジョッフル」

「フレンチーノフ」著
千九百十四年乃至千九百十八年に於ける聯合との軍事關係（露）

「アンクガリー」著
千九百十七年に於ける佛軍の攻撃

「ワルムヘーテマン」著
「サンカンタン」附近ノ戰鬪

「アノトウ」著
千九百十四年戰史

佛陸軍大學校教程
千九百十四年
千九百十八年　戰　史

「カリエニー」著
巴里防禦ノ追想

「ヒエルワー」著
佛軍大本營

「メルメクス」著
「ニヴェール」ト「パンルベー」
臨時軍事調査會月報

歐洲戰爭叢書
牧野義智著
最近外交事情

「マンヂャン」將軍著
戰爭ノ終結如何

大戰間に於ける英佛露聯合作戰

緒　言

往昔國家の組織未た完備せす强力者卽ち統治者なりし時代に於ては强力者の野心或は其征服慾により戰爭を開始し征服を以て其勢力領土を擴張せり此時代に於ける兵制は多くは傭兵制度にして主從關係を有する强力者の私兵に過きす戰爭の開始亦其自由意志に基くものにして一般農民は直接戰爭に干與せさりしなり

是等數多の强力者は群雄割據の狀態を呈せしを以て單に其利害關係若くは姻戚關係或は其征服慾により隨意に戰端を開きしか故に强力者の利害關係の變化に伴ひ彼此相聯合し所謂聯合作戰を多發せり

彼の七年戰、奈翁戰に於ける聯合軍の如き其顯著なる戰例なり然るに爾後國家の組織稍〻完備したる近代に於ける戰爭は國家對國家の戰爭にして强力者對

強力者の私闘にあらす

兵制亦多くは徴兵制度を採用し戰爭は直接國民の權利義務に影響する所大なるを以て國民の大部戰爭の回避す可からさるを自覺せさる以上少數者の專斷を以て戰爭を遂行するを得す

一方科學の進歩は戰場に各種の兵器を出現せしめ戰爭は益〻慘虐を極め幾多の人命、財産を損し文化を破滅せしむるを以て戰爭を防遏し平和を維持せんとし縱令某々國家間に戰端を開始するも其慘禍を局部に制限せんとする各種の努力を試むるに至れり

從て國家の組織稍〻完備するに至りたる近代に於ては戰爭を開始するの機會を減少すると同時に各國は戰爭を局部に制限することを努むるを以て聯合作戰の現出するの機會稀なるに至れり卽ち千八百七十年普佛戰爭以後露土、日清、日露戰爭の如きは戰爭を局部に制限せるものなり

然るに輓近文化益〻開け世界の大部を擧けて民主的傾向濃厚となり戰爭も民

意にあらされは開始する能はす戰禍の慘烈、平和維持戰爭防遏手段益〻發達せるも他方文化殊に國際經濟、國際交通の發達は世界を時間的空間的に短縮せしを以て單に某々國家間の經濟關係の衝突は直ちに世界各國の經濟關係に密接不可離の影響を與ふるを以て單に二國間の戰爭も世界全部を擧けて其渦中に投せさる可からさるに至り殊に强國間の衝突は其利害の及ほす所大なるのみならす弱小國を驅つて何れか一方に加擔せさる可からさるに至らしむ

是に於てか將來戰は其戰爭發生の機會を減少すへきも一度戰爭の開始せらるや世界を擧けて所謂世界戰を惹起するに至ること本歐洲大戰の如きことなしと云ふを得さるへし

之を要するに往時の聯合作戰は『强力者の聯合作戰』を多發したるも將來戰に於ては『國民戰爭の聯合作戰』を惹起すへし而して本大戰は國家の總機關を活動し所謂『國民戰爭の聯合作戰』なるを以て往時の聯合作戰と大に其趣を異に

す此意味に於て這次大戰を研究し將來戰に資するは極めて緊要のことにして是れ本書編纂の目的とする所なり

第一章　概　說

一、本書は協商軍中英、佛、露軍の聯合作戰を研究するを主とし他の弱小國軍に就ては右大國軍の聯合作戰に影響せる部分にのみ其研究を止めたり

二、協商各國中英國は國力及海軍に於て最も優越なりと雖佛國は陸軍に於ては英國に比し遙に精銳なる實力を有し露國亦當時大陸軍國たるの面目を失はす卽ち對獨戰爭に關する三國の實力は大差なしと謂ふへし是れ獨國の國力竝軍力か遙に同盟諸邦に優越し自ら他を指導するの實力を備へたると大に趣を異にする所なり從て戰爭の遂行上各國利害の一致せさるものあるや過去の歷史に由來する國家的自負心と政策的見地とにより動もすれは相對立して讓らす作戰の統一を害したること尠からす卽ち同盟側の中心勢力たる獨國の專制的國家にして殊に軍權最も旺なるに對比して研究を要すへき點なり之か爲一戰場に於ける指揮の統一すら屢〻政略の掣肘を受けたり

露軍と英佛軍とか遠く相隔絕して外線に立ち其連絡は獨潛水艦の跳梁恣なる北海を經由するか長途巴爾幹を繞回するを要し相互の連繫協同最も困難なる地理的情況にありしは內線に立ち地理的に連繫緊密なる同盟軍に比し亦研究上の一考慮を要すへき點なりとす之を要するに英、佛、露三國の聯合作戰は

1　各國の實力概ね相等しきこと

2　主力國家の民主的色彩濃厚なること

3　外線に立てること

の三點に於て特に同盟軍の聯合作戰に對比して研究の特色を有するものなり

三、本書は協商軍の聯合作戰を左の三期に分類して研究せり

第一期　割據時代（自千九百十四年八月至千九百十五年十二月）
第二期　合議時代（自千九百十五年十二月至千九百十八年三月）
第三期　統一時代（千九百十八年三月以後）

割據時代とは開戰より千九百十五年十二月「シャンチイー」軍事會議に至る間にして協商各國は戰爭指導を統一するの必要を感したるも其實行は單に表面的協調に止まり各國其國家的利己心と自負心とにより寧ろ割據の實狀を呈せるの時代なり

合議時代とは千九百十五年十二月「シャンチイー」軍事會議以後千九百十八年三月獨軍第一次攻勢に至る間にして協商軍は戰爭の指導を眞面目に統一するにあらされは戰勝を獲得する能はさるを自覺し一の合議機關を設置して戰爭指導の統一に任したるの時代たり

統一時代とは千九百十八年三月二十一日獨軍第一次攻勢により主決戰場たる西方戰場に於ける聯合軍指揮統一の切要なるを痛感し佛「フオッシュ」將

軍を以て聯合軍最高統帥官に任命し一統帥官により作戰を指導せんとせし時代なり

四、抑〻戰史は事實の眞相を精査探究し其教訓を體得し現在及將來に利用する所謂温古知新の資たらさる可からす

一會戰の裏面にも各種の因果關係の存在するを以て單に表面に現はれたる形式を捕へて之に結論を下し批評を試むる如きは大なる價値なきのみならす却て幾多の弊害を伴ふものなり

『戰鬪は錯誤と錯誤の相乘にして其相乘積の少きもの戰勝を得』とは是れ一面の眞理を語るものなり故に戰史を研究するものは最も眞摯なる態度を採らさる可からす

是に於てか本書は事實獨斷の弊を避くる爲各國兵書に現はれたる事項を其儘記載し且讀者をして一の印象を腦裏に刻せしむることに努めたり然るに從來各國に於て公表せられたる兵書を通讀するに多くは自己辯解、自國軍宣

傳を主とし自己に有利なる如く記載する傾向を有し其眞僞に至りては保證し難き所多かるへきもそは讀者に於て公平眞摯なる判斷をなすこと極めて緊要なり

又露軍方面の材料は極めて僅少なる爲該方面の研究頗る粗雜なるは遺憾とする所なり

第二章　大戰前に於ける英、佛、露の外交

聯合作戰を研究せんと欲せは開戰前に於ける各國間の外交を探求し其外交協約か如何に聯合作戰に影響を及はせしやを研めさる可からす

元來英、佛兩國は過去に於て犬猿只ならさる國家なり然るに千八百七十年獨逸の佛國と戰ひ大勝を獲得し中歐の覇者となり國勢頓に隆盛に趨き將に英國を凌駕せんとし殊に獨逸の東漸政策に依り印度の寶庫を脅威せられんとするや英國は千八百九十八年從來の孤立政策を放棄し千九百三年佛國と接近して協

商を遂け特に千九百五年「モロコッ」事件以來益〻親善の度を加へ更に又千九百七年多年來の仇敵たる露國と中亞問題に關して協約を結ひ茲に英、佛、露の所謂三國協商なるものを成立するに至れり

千九百十二年に於ける英佛軍事協約

英、佛兩國に於ては千九百十二年十一月二十二日及二十三日英外務大臣「エドワード・グレー」卿と駐英佛國大使「カンボン」氏との間に二通の書簡を交換せり此書簡中に左の如き事項を記載しあり

一、若し兩國中の一か自ら挑發せすして第三國の攻撃を受けんとする場合又は一般平和を脅かすへき事件を生せる場合には兩國政府は軍事的協同動作の適否を討論することを約束す

二、協同援助計畫は兩國の海陸軍官憲をして相共に之を審議せしむることを但し此海陸軍協同援助の約束は必すしも兩國政府の自由(將來兵力を以て互に援助せさるの自由)を制限せさることをも特記しあり現に英國政府は此制限箇條を楯とし獨逸か白耳義を通過して佛國を攻撃するの意志を實現せさる以上

共同援助を拒まんとせり然れとも千九百十三年佛軍作戰計畫第十號計畫に開戰に際し英軍（步兵六個師團、騎兵一個師團）の使用を規定し英軍は佛諸軍の左方「モーブージュ」と「ルカトー」の中間に集中することを記載しあり又千九百十四年七月歐洲の危機接迫するや開戰前七月二十六日夜半英國全海軍に對し出動準備の姿勢を採らしめ八月二日英國は佛國に向ひ若し獨逸艦隊か佛國沿岸及佛國海運を脅威妨害するの行動に出つるか如き場合には英國海軍は佛國の爲成し得る限りの援助を與ふへしと通告し以て佛海軍をして主として地中海に活動せしめ英海軍は北海方面を擔任するの行動に出てたり是等より考察するに英、佛間に某程度の了解ありたる事を知るへきなり然れとも具體的密約は決定せられあらさりしか如し

千八百九十二年露佛軍事協約

開戰前英、佛兩國間には軍事協約の詳細且具體的なるもの締結せられあらさりしこと前述の如し然るに露、佛兩國間に於ては千八百九十二年以來稍〻具體的なる軍事協約を締結せられ是れ强陸軍國たる獨逸の神速なる侵入に對し陸續きたる露、佛兩國か軍事協約を締結するは大海軍國にして地理的に迅速なる侵入を受けさるへき英國の佛、露に於けるに比し極めて喫緊たるものありしを以てなり

斯の如くにして千八百九十二年兩國政府間に左の如き協約締結せられ翌千八百九十三年批准の交換を了れり

第一條　三國同盟若くは獨逸一國の軍隊か動員せる場合に於ては露、佛兩國は之に關し通報を受くるや否や豫め協議することなく卽刻且同時に其全兵力を動員し之を成るへく國境に近く集中すへきこと

第二條　佛、露兩國か實際に於て三國同盟又は獨逸一國より攻擊を受くる場合に於ては兩國は他戰線に於て不要なる全兵力を擧けて獨逸に對し指向すへきものにして此等の兵力は獨逸をして東西兩戰場に於て同時に戰鬪を行はしめん爲迅速果敢に軍事行動を開始するを要すること

第三條　三國同盟の軍隊か悉く戰爭に參加する場合に於ては佛國は動員第

十四日迄に國境に百三十萬人の兵力を集中し又露國は此場合八十萬人の兵力を出動し其集中の期限は交渉に依り定むへきこと

第四條　佛、露兩國は單獨講話を締結することなく且相互の利益を自己の利益と同等に擁護すへき義務を有すること

第五條　軍事的行動の遂行及準備に關し兩國參謀本部は協同動作を規定し且情報の交換及連絡の手段に關して規定す

第六條　協約の有效期間は三國同盟の存續期限と一致すへきものとす

露佛參謀總長會議

千八百九十二年露佛軍事協約の締結後數年を經千八百九十九年に至り政治的祕密協約締結せられ（詳細不明）兩者の關係愈〻確實となるや兩國は各參謀本部の方針を一致せしむるの必要を痛感するに至り千九百年巴里に於て第一回會議を開催せられ爾後千九百十三年に至る間に於て更に八回の交渉行はれたり

此間千九百四年に於ける日露戰爭、千九百六年の英佛協約、千九百七年の露佛協約、伊國の三國同盟離反等歐洲國際關係の變轉に伴ひ露佛參謀總長會議も其影響を受くるに至れり各會議中主として露、佛兩國軍に關する事項に就き其概況を略述せん

第一回會議（千九百年）

第一回會議は巴里に於て開催せられ露國參謀總長「サハロフ」將軍、佛國參謀總長「デランヌ」將軍之に參加し會議は主として豫想し得へき獨軍の作戰計畫を研究し之に對應すへき露、佛兩軍の作戰に關し概ね左の如く問題を討議せしか如し

1　獨國軍は東方露軍に對し豫備師團を有する約五個軍團を殘置し主力を以て西方佛軍に攻勢を取る公算最も大なりとなし此際佛軍は宣戰布告後第十五乃至第十八日迄に約百三十萬の兵力を以て攻勢動作を採るへく露軍は速に獨軍東方部隊に對し攻勢を取り獨軍を牽制すること

2　獨軍か其主力を以て露軍に對し攻勢を採る場合露軍の集中は緩慢にして第二十八日に漸く之を完了すへき情況にあるを以て此間露軍は頗る危險なり故に佛軍は速に西方に於て獨軍に攻勢を採るへきこと

3　獨軍は露、佛兩方面に攻勢を採る場合ある事をも顧慮し此場合に於ける露、佛兩軍の作戰を協定す

4　其他英國參戰の場合も顧慮す（日露戰爭前にして英、露關係未た親密ならさるを以てなり）

第二回會議（千九百一年二月二十一日）

第二回會議は露都に於て行はれ露國側より「サハロフ」將軍、佛國側より「ペンゼック」將軍參加せり會議の要點次の如し

佛「ペンゼック」將軍の提出事項次の如し

1　開戰第十四日より西方戰場に於て開始せらるへしと豫期し得へき當初の決戰に於て露軍は佛軍に對し十分なる援助を與へんか爲獨軍の一部を東方戰場に牽制すること

2　不幸にして西方戰場の戰鬪佛軍の不利を見る場合に於ては直ちに露國戰場より快報を傳達し以て佛國の輿論及佛軍の志氣を鼓舞すること

右に對し露國は獨軍主力か佛軍に指向せられたる時現在の動員及集中輸送關係に於ては露軍は第十八日より一部を以て國境を通過し攻勢に出て得へきも全集中を完了するは第二十八日なるを以て之を十日間短縮すへきことに就ては露國鐵道網の發達に俟たさる可からす此業務を遂行せんか爲には二年間の作業を要し之か爲財政上の支出を要する旨を答へたり之に對し佛「ペンゼック」將軍は回答を爲して『前記の期日迄に攻勢に轉する目的を以て露軍の戰鬪準備を短縮することは佛國に取り重大なる問題なるを以て佛國外務大臣は戰略的諸鐵道敷設の爲財政上の援助を爲すへき條件に關し露國外相と協同審議すへき用意ある旨』陳述せり

第三回會議（千九百六年二月十九日）

第三回會議は佛國參謀本部の發議に依り巴里に於て開催せり當時恰も日露戰

爭の直後にして該戰役の結果生せし佛、露兩國の軍事情況の變化に應せんとせしか如し露國の疲弊は何時頃に回復するやと云ふ佛國の質問に對し露「パリッツイン」將軍は答辯して曰く

『露軍は日露戰爭の爲物質的損害を受くる事比較的尠きを以て若干の缺陷を有するも其兵數は千九百七年四月迄に其定員を回復し其動員を實施し得るに至るへし』と

而して本會議に於て「パリッツイン」及「ブレン」(佛)兩將軍は獨軍か尠くも兩戰場の一に於て決勝を得さる間は一戰場より他戰場に大規模なる兵力轉用を行ふへきことなかるへしとの意見に一致せり又伊、墺兩軍は獨逸側に立ち參戰するものと判斷して會議を進行せり

第四回會議(千九百七年)

第四回會議は佛「ブレン」將軍及露「パリッツイン」將軍の間に行はれ主として露軍の動員集中を迅速ならしむる事に就き協議せり此時機に至るや伊國は三國同盟より離反するの態度に變化しつつありて露軍の情況は極めて有利となり且開戰に際し伊軍の採るへき軍事的手段に就き熟知すること最も緊要なりとの意見に一致を見るに至れり

第五回會議(千九百八年九月二十四日)

第五回會議に於て討議せし事概要次の如し

1 獨逸か英國に對し開戰する場合獨軍の動員か其全部なると一部なるとを問はす又之か假りに第三國に對し指向せられたるものなりとするも軍事上の見地より見て恐く聯合國に對し大なる危險を呈するを以て軍事協約第二條の完全なる適用を爲すこと

但獨逸より適時保障を得露、佛政府か其善意を確信する場合に於ては例外なり

2 露、佛無線電信の連絡設置に關する問題を審議す

3 佛「ブレン」將軍と露「パリッツイン」將軍との間に於て開戰當時に於ける

集中計畫の內容を開陳して露軍の集中及攻勢を迅速ならしむる件に就き協議す

第六回會議（千九百十年九月）

第六回會議は巴里に於て開催せられ露國側より「ゲロングロス」將軍、佛國側より「ラフォン・デ・ラデブ」將軍之に參加し墺、伊兩國の動員、聯合諸國間の連絡、兩參謀本部間に於ける情報交換に關する意見を交換し兩國參謀總長會議を成るへく毎年開催すへきことを決定す

尙佛「ラフォン・デ・ラデブ」將軍は露國に對し左の諸件を期待する旨開陳せり

外交的手段に依り露軍か開戰第十五乃至第三十日間に波蘭國境に於て大なる攻勢を採り得へき感想を獨逸に與ふる事及戰爭の當初の配備に依り右の感想を確實ならしめ獨軍をして對露軍事行動の爲配當せられたる軍團を佛國に對し使用し得さらしむる事、佛國參謀本部は是等の條件か遂行せらるる場合に於て始めて全力を以て獨軍に對し迅速且決然たる攻勢を保證し得と」

露「ゲロングロス」將軍之に答ふるに露軍の動員及集中計畫は前回の計畫より も著しく佛國參謀本部の希望を實現せる旨を以てせり

露軍の新計畫によるに

1　露軍は獨逸に對しては全軍の三分の二卽ち十九個軍團を、墺匈國に對しては九個軍團を作戰せしむへきこと

2　外交的手段及開戰當初の軍の配置に依り露軍か第十五日乃至第三十日間に獨逸の東方國境に於て眞面目なる攻勢を企圖すへき感想を獨軍に與へ以て獨逸をして東方國境より軍隊を撤去し能はさらしむへきこと

3　東方戰場に集中せられたる獨軍に對し勝利を得るに十分なる兵力を以て第二十日に國境に進入することを明にせり

露國は千九百九年乃至千九百十年に於て其軍隊配置の變更（註「スキムリノフ」の改革）を爲したる結果佛軍に不安の念を惹起せしめたるに鑑み千九百十一年三月に開催せらるる次回の參謀總長會議を待つことなく巴里露國陸軍駐在武

官を通し佛國參謀總長「ラフォン・デ・ラデブ」將軍に對し次意の文書を送呈せり

露軍か開戰當初甚しく前方地域に集中するは各個擊破を受くるの虞れあり故に露軍の作戰計畫は

1　獨軍か露軍に對し比較的少數なる兵力を指向する場合に於ては速に攻勢に轉し得へく

2　獨軍か主攻擊を露軍に指向する場合に於ては一時防勢に立ち得へき待機的姿勢を取ることに歸著す

其他獨、墺、露三國の兵力計算、露軍の攻勢開始の時日、武器、軍需品等に就き協議する所ありたり而して露參謀本部作戰部長「ダニロフ」將軍は千九百十一年四月二十六日露軍東方部隊に對する攻勢は動員第二十三日に豫定しあることを答解し且之を努めて迅速ならしむる處置を講しつつある旨附言せり

第七回會議（千九百十一年八月）

第七回會議は露「ジリンスキー」將軍及佛「ジュバイユ」將軍參加の下に行はれ

主として露、佛兩軍は同時に猛烈なる攻勢動作を行ふことに關し討議せり

軍事協約第三條の審議に際し佛國側は獨逸か佛國に對し主力を指向すへき公算大なることに就て新に確證を擧け且佛參謀本部は最初の會戰は「ロートリンゲン」、「ルクセンブルグ」及白耳義に於て第十五日乃至第十八日に行はるものと判斷し第十二日迄に其集中を終り其左翼に英軍の援助を受け攻勢を開始し得るの姿勢に在るへきを說示すると共に露軍の迅速なる攻勢を希望せり之に對し露「ジリンスキー」將軍は露軍は動員第二十日に獨國境內へ進入する豫定なる旨を答へ佛國側は第十八日に攻勢に出つる樣露軍の動員及集中の手段を改善せんことを希望せり然るに露軍は目下編成改正中にして千九百十六年に之を完結すへく其時機に至らは八十萬より大なる兵力を使用し得る旨を答へ且露軍は開戰に際し墺軍か攻勢に出つへきことあるを以て開戰當初對獨作戰に其主力を指向する能はさるも獨逸國境に於ける軍隊の主力は後方輜重及縱列を除き第十五日に集中を完結すへく第二十日に於て初めて充足すへき部隊

の到著を待つことなく攻勢に轉し東普國境に獨軍五、六軍團を抑留するの手段を講すへく且成るへく佛國側の要求に努力すへきことを約し佛國側は之を以て滿足せり其他無線連絡に就き計畫を作爲せり

第八回會議（千九百十二年六月十三日）

第八回會議には露國側は「ジリンスキー」將軍、佛國側は「ジヨッフル」將軍參加す會議の主要事項は前回と大差なし

「ジヨッフル」將軍は獨逸の西方國境に於ける準備的行動に關し新材料を提供し以て獨逸の計畫は先つ佛國を攻撃したる後露國に向ふへき決心愈〻明瞭となりし事露、佛兩國は同時に努めて速に攻撃を行ひ以て獨逸の作戰計畫に對抗せさる可からさることを力說し且佛國は鐵道の改善に依り近き將來に於て集中を尙一、二日間短縮し得へき見込あるを述へ露國も亦其戰略的鐵道を增補改築すへき旨提議せり尙兩將軍は東普方面に於ける露軍の作戰に就て協議する外兩軍の連絡方法に就て審議せり

第九回會議（千九百十三年八月）

本會議は大戰直前の會議にして前會議同樣の代表者之に參加せり而して露、佛兩國は單に動員に關するのみならす動員に先たち戰略要點を占領する事項に至るまて協議せり

佛「ジヨッフル」將軍は佛軍か軍事協約に對獨兵力百三十萬とありしを更に二十萬人を增加し又國境に於ける佛軍の集中は恐らく十日間に完結し翌第十一日朝より攻勢を開始し得へきを說述せり之に對し「ジリンスキー」は述へて曰く

『露國は尠くとも八十萬の兵力を獨逸に對し使用すへく軍の集中は動員第十五日に完結し其攻勢は第十五日以後に於て直に開始さるへき旨を告け尙集中完結は千九百十四年の終りには約二日間短縮すへし』と

其後獨逸に對し露、佛兩軍を如何に集中配置すへきやの一般的原則に就て討議せられ兩國代表者は攻撃の重點を敵國の中心に向ひ指向するの必要に關し意見の一致を見たり而して「ジヨッフル」將軍曰く

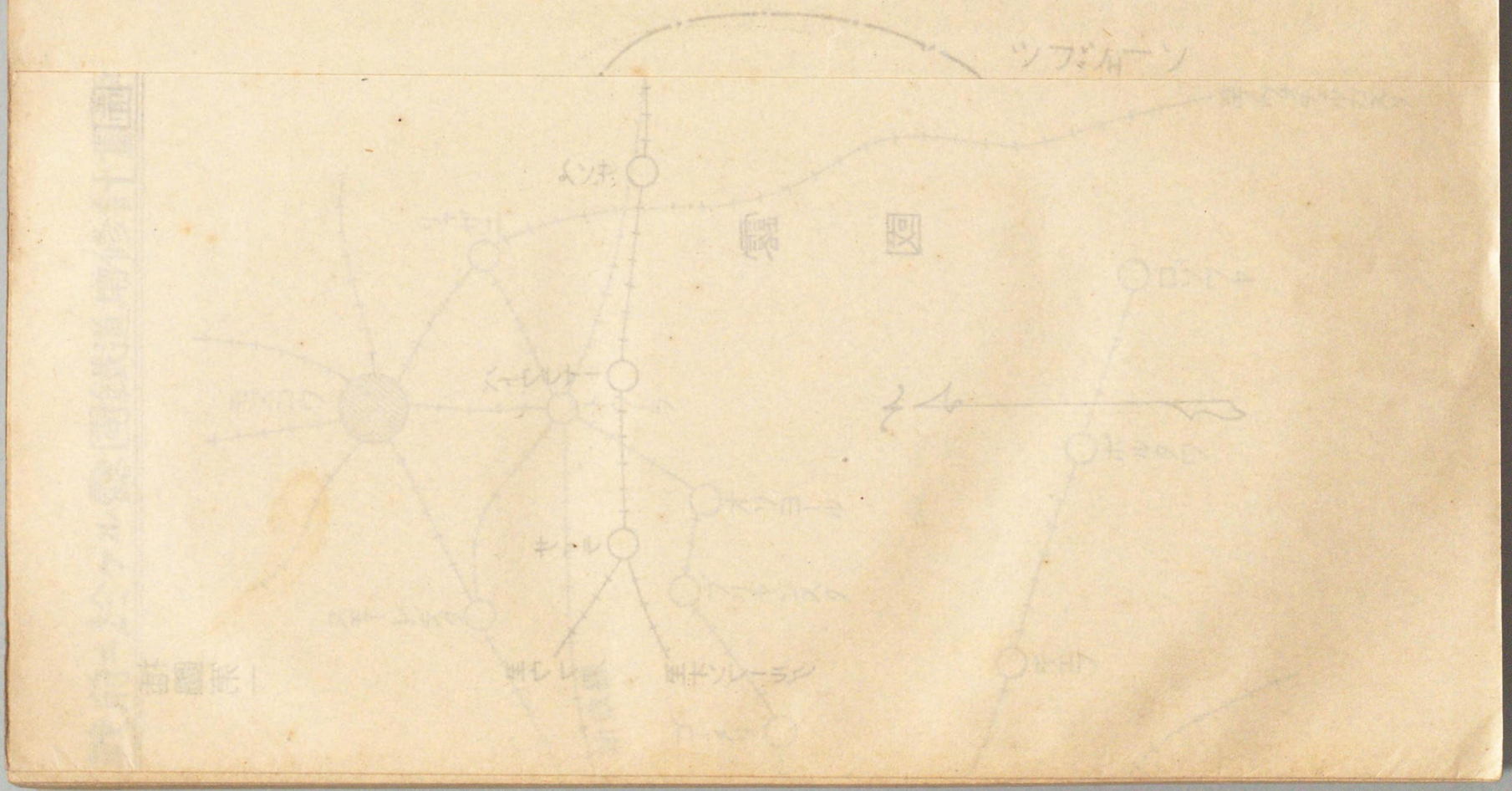
『兩國は萬難を排し開戰當初より獨軍を擊破すへき目的を達成するに努めさる可からす之か爲聯合軍の動員及集中を成るへく迅速ならしむるを要す露國戰場に於ける鐵道の發達に依り此目的を達成し得へし』と是に於て「ジリンスキー」將軍は露國鐵道網に關し左の如く說明せり卽ち(挿圖第一參照)

「オリョール」―「ブリャンスク」―「ゴーメリ」―「ルーニネッツ」―「ジャビンカ」―「ワルシャウ」鐵道は複線となり「ジャビンカ」―「ブレスト」區間は四條線路とせられ「リヤザニ」―「トウーラ」―「ワルシャウ」間に新に複線鐵道を敷設する豫定なり

尙此會議に於て「バトゥラキー」―「ペンザ」―「スモーレンスク」間、「ロフノ」―「バラノウイッチ」間、「ロゾワヤ」―「ポルタワ」―「キエフ」―「サルヌイ」間に複線の敷設を豫定せられたる外露軍攻擊動作の爲「ウイスラ」左岸の諸鐵道を露國普通鐵道軌間に改築する事及「ワルシャウ」附近に於て同河の橋梁を增設すへきことの必要とを認めり

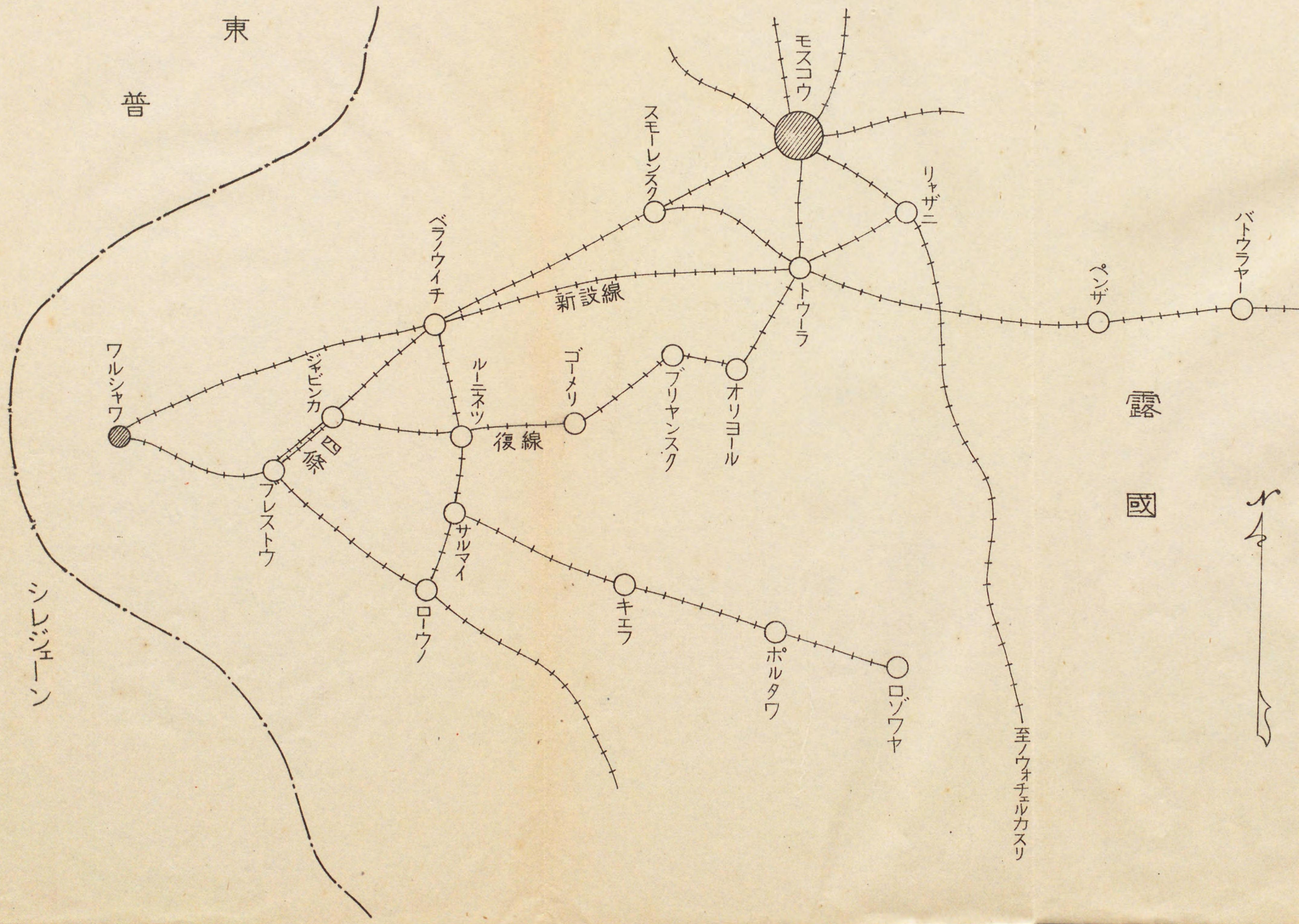
又東方國境に獨軍の兵力を成るへく多く牽制する事は聯合作戰上極めて有利なるの見地より「ジョッフル」將軍は平時「ワルシャウ」軍管區に於ける露軍の配置か旣に獨逸に對する直接の脅威を與ふる所以を說述せるに對し露「ジリンスキー」將軍は之に對し露軍は新編成計畫に基き「ワルシャウ」附近に戰列軍團編成の豫定なる旨言明せり

其他兩國の連絡に就き具體的審議を進め「スウェアボルグ」無線電信所を尙更に擴大せしむることとし英國と最近に協約を締結せられたる情況に鑑み兩國間の連絡は英國を經由し英國海底電線に依り行ふへき旨協定せり



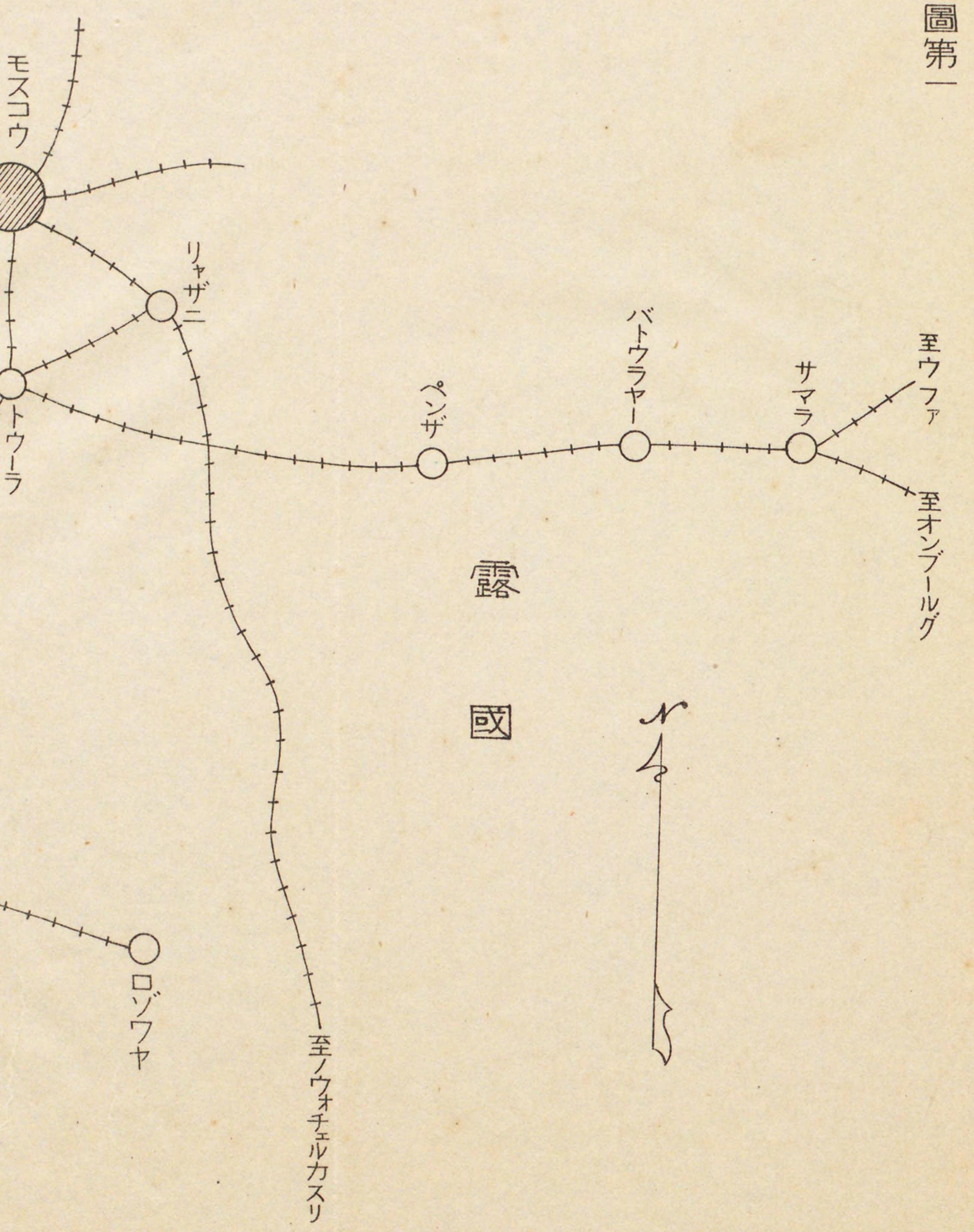
図

開戰前ニ於ケル露國鐵道增修計畫要圖



露國鐵道增修計畫要圖

插圖第一



註、「スホムリノフ」の改革とは露佛軍事協約に依り露軍は十八年間不自然なる發達をなし其結果平時に於ける露軍の配置、素質、戰鬪準備、兵力分配に不自然を來せること經濟上の都合に依り「ワルシャウ」、「ウイリナ」兩軍管區より獨逸國境に集中せる各一軍團の兵力及多數の騎兵を同地方より內部軍管區に撤退し尙國境要塞の獨立步兵守備隊を廢止して內部軍管區の基幹人員を增大せることとなり

之に關する佛國參謀本部の反對に對し露國は輸送機關の整備卽ち既設線路の擴張及新線の敷設に依り其不利を補はんとして未た完成するに至らす遂に大戰を迎ふるに至れり

第一期　割據時代

第三章　英佛聯合作戰　（附圖第一參照）

自開戰至「マルヌ」會戰

英國軍事會議

英國に於ては千九百十四年七月三十日既に「フレンチ」元帥を出征軍總司令官

に豫定し八月五日動員と共に首相「アスキス」主宰の下に軍事會議を開き出征軍の編成及渡佛後の集中地點に關し凝議せり從來英、佛兩國は協同作戰に關し何等具體的の密約を有せす單に千九百十二年十一月英「エドワード・グレー」及佛「カンボン」兩者間に交換せられたる協定書に基き英、佛兩國は速に第三國の攻擊を防止する爲採るへき軍事行動を決定すへき義務を有するに過きす而して英國既定の計畫に依れは步兵六個師團及騎兵一個師團を佛國に送遣せんとするに在りしも當日軍事會議の結果は此際國力の許す限り佛國を援助せんとするに決し唯英國の海防及國內の秩序維持の爲當分步兵二個師團を國內に留むることとし步兵四個師團及騎兵一個師團（兵數約十萬）を速かに出征せしむることに決せり又英軍の集中地に關しては從來英、佛兩國間に豫備的諒解を有し英軍は佛軍の左翼に於て「モーブージュ」(7.24)「ル・カトー」(7.23)中間の地區に集中すへく豫定せられしこと前述の如し然れとも其實施に當り當時幾多の意見を生して容易に決せす遂に佛國參謀本部より佛軍の意見を代表するに足るへき佛國は右英國の要求に基き八月十日「ユゲー」大佐を長とする佛國軍事派遣團を渡英せしめ佛軍側の希望を開陳せしめ討議の結果遂に豫定地區に集中を行ふに決せり今討議の內容を見るに新陸相「キッチナー」元帥は「アミアン」(6.21)附近に集中せんとするの意見を述へ「モーブージュ」附近を以て甚しく敵に暴露するの不利ありとせり「ヘーグ」元帥は更に極端なる意見を持し英軍の上陸を情況明白となる迄延期し以て如何なる方面に於て協同作戰を爲すへきかを決定すへしと爲せり然れとも「フレンチ」元帥は佛軍の要求に共鳴し豫定の計畫を遂行せんことを熱望せり是れ集中を變更して時機を失する如きことあらんか佛軍作戰計畫を破壞し聯合作戰の精神に戻り又今日迄に知り得たる獨軍の計畫及準備に依れは敵の集中は迅速に行はるへきか故に若し聯合軍にして最初より決勝的攻擊を行はんとせは此際最初の計畫を變更又は延期するは全然其希望を水泡に歸せしむるものなり要するに今日最も重要とする所のものは

迅速なる動員と兵力の集中是なりと

以上の如くにして英軍は八月十四日より集中を開始し英軍總司令官「フレンチ」元帥は同日乘船「ブーローニュ」(9.20)に上陸せり此英軍の協力は佛軍の爲固より緊要なり然れとも英軍は全然別個の指揮系統に在りて佛軍と對立し佛軍總司令官をして之か指導上多大の困難を嘗めしめ動もすれは英軍の自尊心を損し作戰に不利なる結果を生起せんとせり而して當時に於ける英軍の統帥を知らんと欲せは其出征に方り英國政府の「フレンチ」元帥に與へたる訓令を一讀すへし卽ち左の如し

開戰當時英政府の「フレンチ」元帥に與へたる訓令

獨逸の白耳義の中立侵害に依り此に英國政府は英、佛兩國間に存在する協商を完うせん爲佛國政府の要求に應し遠征軍を佛國に派遣し之を貴官の指揮に委することとなれり

貴官の指揮する軍の重大使命は佛軍との協心戮力に依り兩國共同の敵を擊破するに在り卽ち貴官の負へる特別任務は佛國政府に助力を與へ佛、白兩國に侵入せる獨逸軍を擊退し終に條約の保障に從ひ白國の英、佛兩國に對する訴を容れ以て中立を復舊するに在り

英國政府か宣戰に決せる理由實に此に存す隨て貴官の取るへき第一目的も亦此に在るへし軍の集中間能く佛軍總司令官と熟議し英軍の執るへき作戰を決定すへし但開戰の當初より英軍の兵數と爾後の增援には限りあることを顧慮し愼重なる考慮の下に兵員の損耗を極少ならしむることに最大の注意を拂はさる可からす

以上に依り貴官は爲し得る限り聯合軍の企圖と希望に副はんことに努むへしと雖荷も佛軍か大なる兵力を以て未た交戰せさるに方り前進運動に參加するか如き場合或は不利なる狀態の下に交戰せさる可からさるか如き場合に在りては特に嚴密なる思慮を要す若し斯の如き情況の發生に際しては直ちに其詳細を報告し且政府か該問題に關する決定を貴官に通報するに必要なる時間の餘裕を與ふへし貴官は貴官の指揮權は全然不羈獨立にして如何

なる時期と場所とを問はず斷して聯合國將帥の配下に在らさるものなることを常に銘心しあるへし

小なる作戰に方りても重大なる損害を生するの危險に陷らさること及其拂ふ損害か所期の目的に一致すへきや否やを豫め考察するの要あることを部下指揮官に了解せしむへし

出征間には必すや英軍の絶大なる勇氣及軍紀を立證すへき幾多の好機會を發生すへし然れとも將校たる者は本戰爭は歐洲に於ける戰爭の初めての經驗なること及過去の戰役に於て訓練不十分なる敵に對せしに比し大に戒心を要すへきことを忘る可からす

貴官は不斷陸軍省と連絡を保持し其知り得たる敵軍竝佛軍の行動をも報告すへし

本職は貴官か國王陛下より貴官に委せられたる最高の任務を遂行し且陛下の軍隊の傳統的偉大なる名聲を保持するに方り政府、本職竝同胞は熱心且不撓の支援を貴官に寄すへきことを絶對に期待せられんことを望む

右訓令によれは第一、佛軍を支持し且佛軍と協同して敵軍に當るへきこと第二、英軍指揮權は完全に獨立し斷して同盟軍司令官の命令を奉すへきにあらさることを明確にせること卽ち是なり

右の外英軍は極めて少數なるを以て死傷減耗を極力少數ならしむる如く最大の注意を拂ひ且佛軍の大部隊か參加せさるに獨り英軍のみ不當に敵の攻擊に暴露せしむる虞れある行動に加はらさる如く愼重臨機の處置を採り若し萬一斯の如き虞れあらは本國政府に詳細なる報告をなし政府の決定を待つへきを以てせり此方針は遂に開戰當時に於ける英、佛協同作戰上に大なる影響を與ふるに至れり

「フレンチ」將軍の佛國政府及總司令部の訪問

英軍總司令官「フレンチ」元帥は八月十四日「ブーローニュ」に上陸後十五日巴里に到りて佛國大統領「ポアンカレー」、首相「ヴィヴィアニー」及陸相「メッシニー」と會見し時局問題を議し次て陸軍省に到り圖上に就て一般の形勢を討議せし

か十六日「ヴィツトリル・フランソアー」(3.25)の佛軍總司令部に到り「ジヨッフル」將軍との初會見を遂くることとなれり

「ジヨッフル」將軍は長時間に亙り元帥と會談し總參謀長「ペルトロー」をして當時迄に受理せし諸情報に基き獨軍の作戰計畫及軍隊の配備に關し說明し聯合軍の取るへき攻勢に關し希望を開陳せしめたり而して其當時交付せる筆記通報の要旨左の如し

一、獨軍は有力なる兵數を其右翼及中央方面に使用し以て二個の攻擊卽ち一は「ジヴェー」(7.25)北方他は「セダン」(9.25)「モンメヂー」(5.26)「ダンヴィラー」(5.26)の正面に對し攻勢を取らんとし「メッツ」(4.28)以南に於ては防勢を取るものの如し

二、「ランルザック」將軍(佛第五軍司令官)は英白軍と協力し北方の獨軍に對し作戰すへき任務を受領しあり

第五軍(第一、第三、第十、第十八軍團亞弗利加師團二)、「ソルデー」騎兵集團第四豫備兵團(「ヴァラブレーグ」將軍の指揮する豫備三個師團)其他「モーブージュ」要塞は「ランルザック」將軍の隷下にあり

三、今より二十一日迄に經過すへき情況は不明なるを以て佛軍の運動に關しては明言すること能はすと雖英軍は其戰鬪員充實するや八月二十一日朝「サンブル」河北方地區「モン」(8.24)南方附近に進出し爾後「ニヴェール」(8.24)に向ひ前進を續行し且佛第五軍の左翼に於て位置すること

四、如何なる場合に於ても「ソルデー」騎兵集團は「サンブル」河以北に行動し英軍の運動を掩護する筈而して英軍騎兵師團は之と協同動作を爲す敵と接觸するに至らは騎兵集團は其正面を避け英軍の左方に位置する筈

五、白軍は「ブラッセル」(9.24)「アンヴェル」(10.24)を掩護しつつ獨軍の側方又は後方に行動するなるへし

尙此席上「フレンチ」元帥は英軍か獨軍に暴露せるを以て佛軍騎兵師團及後方豫備たる豫備一個師團を直ちに其隷下に屬せしめられんことを要求せしも「ジ

ヨッフル」將軍は之を肯せさりしものの如し

「フレンチ」元帥の佛第五軍司令部訪問

「フレンチ」元帥は翌十七日在「ルテル」(5.24)第五軍司令部に到りて「ランルザック」將軍と連絡したる後「ル・カトー」なる英軍總司令部に歸著せり因に「フレンチ」元帥と第五軍司令官との會見に方りては兩者若干の意見を交換せしか「フレンチ」元帥か英軍の前進は二十四日以前に之を起すこと能はす是れ更に一週間を豫備兵の訓練に要すれはなりと述ふるや佛第五軍司令官は斯の如き悠長なる態度の頗る危險なることを說き成るへく迅速なる英軍の參戰を希望し且英軍騎兵師團をして「ソルデー」騎兵集團と合し佛軍左側の掩護に任せしめんことを要求せしも元帥は之を拒絶し予は三軍團を使用すへきに目下二軍團を有するに過きさるか故に騎兵は之を豫備として所有せんとするの意圖なる旨を以て應酬せしか如きは注目に値す

佛左翼方面に於ける英佛軍の協同

國境會戰より「マルヌ」會戰に至る間聯合軍は左翼方面に於て聯合軍の指導に

最も苦心せる形跡歷然たるを以て以下該方面の作戰に就て若干の研究を爲さんとす

八月十七、八日頃佛軍總司令官の企圖

八月十七、八日頃に於ける佛軍總司令部の敵情判斷は獨軍は「ルクセンブルグ」及白國に於ける獨軍總兵力を十三乃至十五個軍團と算し是等は二個集團に區分せられ其北方に在るもの卽ち右翼軍は七、八個軍團及騎兵四個師團より成り其正面は「ムーズ」河の兩岸に亙り「ジヴェー」、「ブラッセル」間に擴張すへきや將又單に其一部のみを「ムーズ」河以北に進出せしむへきや未た不明なり又其南方にあるもの卽ち中央軍は六、七個軍團及騎兵二、三個師團より成り「チオンヴィル」(6.27)「バストーニュ」間の正面に在るものと判定せり從て獨軍は其兵力に比し過度に其正面を擴張し勢ひ其中央部を薄弱ならしめつつありとの結論に達せり是に於てか「ジョッフル」將軍は速かに佛軍主力卽ち第三、第四の約十個軍團を以て獨軍の中央を突破して北方に進出し以て獨右翼軍の左翼を攻擊するに決し且此行動は獨軍の薄弱部に乘すへきか故に成功の見込大にして此

際佛軍の攻撃法は最も猛烈果敢に行はさる可からすとなし佛第五軍及英軍は優に「サンブル」河方面に進出するの餘裕を有し此に白軍と連絡して獨右翼軍の行動を阻止し得へきのみならす努めて北方より獨軍右翼を包圍的に攻撃せんことを期待せり卽ち「ジヨッフル」將軍は十八日一般訓令を下すと共に佛第五軍及英白軍の協同に關し左の如く指示せり

1　獨右翼軍か「ムーズ」河の兩岸を經て前進し其正面を「ジヴェー」、「ブラッセル」間に擴張すへき場合

右の場合佛第五軍及之に屬する騎兵集團は英白軍と連繫し直接敵に對抗すへし

但白軍及騎兵集團は努めて北方より敵を包翼する如くす

此間佛第三、第四軍は先つ敵の中央軍を攻撃して之を突破し其成果を收むるや佛第四軍の主力は直ちに獨右翼軍の左翼に向ふ筈

2　獨右翼軍か單に其一部のみを「ムーズ」河左岸に行動せしめ主力を同河右岸に行動し獨中央軍を攻撃中の佛第四軍の側面を攻撃すへき場合

此場合英白軍は「ムーズ」左岸及「サンブル」河方面の敵に對し佛第五軍は方向を轉し「ジウェー」、「ナミュール」(8.25)を經て「マルシュ」(7.26)「サン・ユベル」(7.26)の方向に行動すへし

又此豫想に基き第五軍は豫め「ジヴェー」東方地區「ムーズ」河線上に一大橋頭堡を築設するを適當とす

國境會戰に於ける佛第五軍と英軍との協同

第五軍は八月十六日以來「サンブル」河畔に向ふ前進を開始し先に先遣せる第一軍團をして「ジヴェー」、「ナミュール」間に於ける「ムーズ」河の渡河點及「ナミュール」上流に於ける「サンブル」河の渡河點を守備せしめ第三、第十軍團は徒步行軍に依り又新に配屬せられたる亞弗利加師團二及第十八軍團を鐵道輸送に依り「フオッス」(8.25)「シャルロア」(8.25)「チュアン」(7.24)地方に招致し第四豫備兵團の主力を「モーブージュ」の西方地區に進出せしむ

爾後佛第五軍の運動は豫定の如く進捗し二十日其一部を以て所期の地點に達

し軍司令官は概ね次の情報を得たり

卽ち獨軍の右翼は二十日既に「ブラッセル」に到著せんとすること又敵の他の一軍主力は「ナミュール」上流に於て「ムーズ」渡河の目的を以て「マルシュ」、「ヂナン」(7.26)間に到著せり

而して第五軍司令官は未た此等敵軍の實力に關し精確なる情報を得すと雖恐らく十餘個軍團に上るへきを胸算し今や寡兵を以て孤立の地位に在りて之に對抗せさる可からさることを覺悟せり是れ第五軍の諸兵力は尙北進の途中に在りて直ちに軍司令官の使用に供し得へきもの僅かに第三、第十軍團の二軍團あるに過きされはなり

當時英軍は漸く其集中を終れるのみなるを以て翌日にあらすんは出發すること能はす從て二十三日前には其戰鬪參加を期すること能はす是に於て第五軍司令官は兵力を集結するに至る迄「サンブル」河南方高地帶を占領し敵を抗拒するに決せり

ジョッフル」將軍は二十日第三、第四軍に攻勢開始を命すると共に第五軍をして當面の敵に對し逆襲せしめ以て獨右翼軍の行動を阻止せんとし第五軍に左の要旨の訓令を下達せり

一、現役六軍團より成る佛第四軍は「ヴェルダン」(4.26)「メジエール」(6.25)の正面を離れ「ヌーシャート」(6.26)「パリズール」(6.26)「ジエヂンヌ」(6.25)の正面に於て行動を取る筈

第三軍は「ヴェルダン」より出發し第四軍の右方に於て行動する筈

二、第五軍は「サンブル」河北方に向ひ攻勢を取り其左翼を以て「シャルロア」を通過すへし

英軍は第五軍の左方を前進し「モン」より「ニヴェール」に向ふ筈なり

「ソルデー」騎兵集團は英軍の左方に於て行動すへし

右訓令には第五軍の達すへき目的及此等諸軍の運動連繫に就て何等明示する所なく單に各軍に其運動地域を指定せるのみ之に關し第五軍司令官「ランルザ

ック」將軍の公表せる所次の如し

予は右訓令に接し恰も鐵槌を加へられたる感あり是れ右訓令に從はんか第五軍を驅つて死地に導き然も之を徒死せしむるに過きす卽ち今や「ロレーヌ」に於ける攻勢の失敗せるを聞くのみならす困難なる「アルデンヌ」の地方に對する第四軍の攻勢か其不成功に終るへきは之を豫期し得へし此時に方り第五軍にして全滅せんか「オアーズ」空隙部は開放せられ巴里への進路は全く無障碍となるへし而して巴里に對する攻撃は全佛國の心臟を衝かるるに等し今や佛國の運命は第五軍の雙肩に懸れることを思はすんはある可からす乃ち自己の良心の命する所に從ひ獨斷を以て「サンブル」河を超えさらんことを決心せりと

「ジョッフル」將軍は第五軍司令官の直ちに前進するの不可能なる報告に對し貴官の欲するか如く攻撃の時機を選定すへき旨回答せり

二十一日第五軍は漸次其兵力を集結し第三、第十軍團は「フオッス」より「ナリーヌ」(7.24)附近に亙り「サンブル」河に面して陣地を占領し第十八軍團は午後一時頃其先頭を以て「チュアン」に到著し第四豫備兵團の主力は之に續行せり

而して「ソルデー」騎兵集團は依然「シャルロア」、「ブラッセル」運河の後方に停止し英軍は其下車地「ワッシュー」(6.23)「ル・カトー」、「カンブレー」(7.22)の地區を出發して北進を起し此日概して騎兵を以て「コンデー」(8.23)「モン」、「ベンシュ」(8.24)の線に各縱隊を以て「チュアン」「モン」道南方十六乃至二十吉米の線に到達せり其他「アマード」將軍の指揮する佛後備諸隊は「ヴァランシェンヌ」(7.23)「カッセル」(9.21)に亙る正面に於て微弱なる掩護幕を成形しあり

獨第二軍は此日午前十時以來「サンブル」河畔に於ける佛第五軍の前進部隊を攻撃し更に午後一時以來「ナミュール」の攻撃を開始し諸橋梁を奪取し遂に其一部を以て同河右岸に立脚地を占むるに至りしも未た大なる戰鬪を惹起するに至らす二十二日佛第五軍の一部は獨斷を以て「サンブル」河畔に攻勢を取り失敗せり

第五軍司令官は二十三日を期し攻勢を實施せんと企圖せしも決勝を得んとするの決心なく而も英軍と佛軍との間には間隙部を生するに至れり當時英軍總司令部に於ては第五軍一部の不利なる交戰特に自己當面に於ける獨軍の行動を推知し漸く不安を增大せしも佛軍との關係上明二十三日中は尙現在地に停止するに決せり

英軍總司令官「フレンチ」元帥は二十二日朝迄聯合軍の攻勢に希望を屬し英軍も亦敵を迎擊する目的を以て今後前進を續行せさるへからさるものと思考せしか此朝元帥は自ら在「フイリップヴィール」(7.25)佛第五軍司令部を訪問せんとし自動車に投し第五軍の作戰地域に入りしか佛軍の步兵及砲兵縱隊の絕えす進路を橫切りて南下しつつあるを目擊し第五軍司令部の一將校に出會し一般の情況を傳聞し獨近衞及第七軍團は昨薄暮「サンブル」河畔に前進し河岸を守備し佛第五軍第十軍團の部隊(「フオッス」附近「サンブル」河南岸に位置す)を攻擊せしも擊退せられたること第五軍司令官の計畫は時期の至る迄攻擊を戒むるに在りしも佛第十軍團は之に反して逆襲に出て却て多大の損害を受けて退却し「フオッス」附近の陣地に停止せること及第五軍司令部第二課の得たる情報に據れは白國に於ける獨軍の繞回運動は遠く西方に擴張せられ其右翼は大規模の包圍を實現する爲著々前進中に在ること目下獨軍は「サンブル」河に多數の橋梁を架設し第五軍の全正面に亙り同河を渡河することに努力しつつあること等を知るを得たり

是に於て元帥は第五軍司令部の訪問を斷念し卽時其司令部に歸還せしか英軍の得たる諸情報に依りて益〻前記の事實を明瞭にし少くも三個軍團の獨軍は英軍の正面に向ひ前進中にして其最西方の軍團は「アート」(8.23)に到著せるものと判定せり

元帥は以上の情況の判明すると共に著しく不安を增加し直ちに佛第五軍司令官に左の要旨の通報を發せり

予は既定の配備就中佛騎兵團を英軍の左翼に配置すへきことを速かに實行

せられんことを望む英軍は第五軍の攻撃前進に伴ひ課せられたる任務を遂行すへき準備に在り而して其時期の到るを待つ迄予は「コンデー」、「モン」、「エルクリンヌ」(7.24)の線を占領しあるへし

英軍の現在線は第五軍の位置に比し著しく前進し英軍として極めて前方に占位せるものと確信す一般の情況就中英軍の事情か明朝にあらすんは攻勢を決定する能はさるに顧み予は之に關し豫め貴官の諒解を得んとす

二十二日夜元帥は第五軍司令官より派遣せる連絡將校に會し該將校より概ね朝と同樣なる佛軍の情況を知り且英軍を以て佛第五軍に向へる獨軍縱隊の側面を攻撃すへき希望の傳達を受けしも元帥は之を拒絶し斯の如きは到底實行すへからさるのみならす英軍は現在の位置を二十四時間保持すへく爾後は一に第五軍の情況及英軍當面の敵情に應し要すれは「モーブージュ」に向ひ後退せさる可からさるに至るへきを以てせり

二十三日第五軍司令官は「サンブル」河畔に於て攻勢に轉せしと雖却て獨軍の

爲撃退せられ同夜第五軍司令官は此時迄に佛軍主力たる第四軍か「セモア」森林(「セダン」北方)の北方出口に於て昨二十二日危險に陷り「ムーズ」河に向ひ退却せること、獨第三軍の一部は既に「ヂナン」に於て「ムーズ」河を渡河し第五軍の側背に現出せしこと及獨第一軍は「ブラッセル」より「モン」に向ひ强行軍を續行し英軍の正面及左翼より攻撃し得る如く前進することを知り今や第五軍の地位は著しく危險となり其兩翼の一大脅威に對し到底永く現在地に停止することを許さざるを感知し退却は當に軍の死活問題なることを痛感し獨斷退却するに決し午後八時「ジヴェー」、「フイリップウィール」、「ボーモン」(7.24)「モーブージュ」の一般線に向ひ退却を命令し且總司令部に此旨を報告し爾後の退却方向を指定せられんことを要求せり然れとも退却に際し英軍を顧慮せさるものの如し

英軍は二十三日朝來「モン」附近の陣地に於て獨第一軍の攻撃を受け苦戰の後「モン」の突角部を放棄し同夜全線退却の準備を爲すに至れり此日に於ける英、

佛兩軍間の連絡の概況を見るに左の如し

「フレンチ」元帥は此日專ら當面の戰況に忙殺せられしか此夕全般の形勢を按し今や退却の餘儀なきに至れることを看取し同夜退却に關する命令を下達せり而して午後十一時三十分佛軍總司令官「ジョッフル」元帥の左記電報を受領するや益〻英軍の現在の陣地は到底維持し得へからさるものなることを確認せり

「ジョッフル」將軍電報の要旨

一、二十三日「ナミュール」は陷落せり

二、佛第五軍は全正面に於て獨第三、近衞、第十、第七軍團より攻撃せられ「ジヴェー」、「フイリップヴィール」、「モーブージュ」の線に向ひ退却を開始せり

三、「ムーズ」河は急速に減水し諸所に於て渡河を許すに至りしを以て防禦上困難を增せり

四、尙諸情報に依れは英軍は明日少くも獨第三軍團及騎兵二師團より攻撃せらるへきを豫想す

佛第五軍は二十四日朝以來退却を開始し同夕先つ所望の線に到達せしか左方英軍は「ル・カトー」、「カンブレー」の線に向ひ一擧に退却中なることを知り左翼の危險を脫する爲更に二十五日「マリアンブール」(7.25)「アヴェスヌ」(7.24)の線に向ひ退却し且此時に至る迄其退却方向に關し未た總司令官の指示を受くる能はさりしか故に明二十六日「ロクロア」(6.25)「ヒルソン」(6.24)「ラ・カペル」(6.24)「ヌーヴィーヨン」(6.23)「ル・カトー」の線に向ひ退却を續行するに決せり

英軍は二十四日退却を開始し午後以來諸情報に依り佛第三軍の敗退せること、佛第五軍の退却中なることを知り更に退却を續行せり然るに二十五日正午迄に得たる情報に依れは佛軍は全線に亙り退却の餘儀なきに至れること、獨軍三個軍團及騎兵一個師團は英軍の左翼に向ひ旋回中なることを知り自軍の危險なるを察し二十六日拂曉を以て更に「サンカンタン」方面に向ひ退却運動を繼

續するに決せり

之を要するに國境會戰の敗戰より英軍及佛第五軍の退却は何等連繫なく專ら自軍の安全を第一とし實施せしものの如し

國境會戰に於て失敗せる「ジョッフル」將軍は後退機を見て攻勢に轉せんとし又八月二十五日新に第六軍の編成を令し之を「アミアン」附近に集結せんとし同夜午後十時訓令を下し全軍の退却を規整し「ヴェルダン」、「ラ・フエール」(6.23)「アミアン」の線に於て再擧を企圖するに至れり「ジョッフル」將軍は二十六日午前自ら「サンカンタン」(6.22)に於ける英軍總司令部に到り「フレンチ」元帥、第五軍司令官「ランルザック」將軍及後備兵團長「アマード」將軍を一室に會し以て其意圖の徹底を圖れり其會議の情況次の如し

「サンカンタン」に於ける「ジョッフル」、「ランルザック」、「フレンチ」三將軍の會見

席上「ジョッフル」將軍は例の態度を以て沈默を守りしか第五軍司令官は先つ發言し昨二十五日附總司令官の訓令中現下の情況に適合せさる點あることを述へたり卽ち佛第五軍は英軍の爲其退路を「サンカンタン」に依托することを述へたり卽ち佛第五軍は英軍の爲其退路を「サンカンタン」に依托する如く退却すること不可能なるを以てせしか「ジョッフル」將軍は之に答ふるに縱令第五軍の左翼は「サンカンタン」に向ふこと能はすとするも「ラ・フエール」には行くことを得へしと述へ前計畫を修正すへきこととなれり次て「フレンチ」元帥は英軍か二十三、四日の兩日多數の騎兵を有せる獨軍少くも四個軍團の爲極めて困難なる情況に遭遇せしことを述へ第五軍の燥急なる退却の爲孤立無援の危險に陷れることを訴へしか「ジョッフル」將軍は之に對し一語をも發せす第五軍司令官亦斯の如きは戰爭に於て起るへき常態なるかの如き態度を以て何等說明を試みす是に於て元帥は更に今後の計畫の如何に關し質問する所あり乃ち「ジョッフル」將軍は是に答へて曰く『佛軍か其集中線を發して試みたる攻勢は成功せさりしを以て今や「ラオン」(5.23)「ラ・フエール」、「サンカンタン」の線に向ひ退却し此に兵力を集結し英軍の左翼に占位せる佛第六軍を合して再ひ攻勢に出てんとす閣下は未た昨二十五日に於ける予の訓令を受領せさるや』と是に於て英軍總參謀長は既に之を受領したる

旨答へたり

爾後「ジョッフル」將軍は「フレンチ」元帥と晝食を共にし長時間に亙り會議し英軍か「ソンム」河の戰線を固守すへきことを要望し元帥は之を承諾せり然るに「フレンチ」元帥は此會見後間もなく自己軍隊の實況か「ソンム」河畔に停止し廣正面に亙り陣地を占領することを許さざるを知り今や英軍の急務は此混亂せる軍隊の集結及整頓を圖るに在りとし更に「ラ・フエール」、「ノワイヨン」の線に向ひ退却を續行するに至れり

「ジョッフル」將軍の英軍に對する努力

「ジョッフル」將軍は英軍の此態度を憂慮し二十七日再ひ「フレンチ」元帥と會見し聯合軍大體の停止を「ランス」、「アミアン」の線とし少くも英軍は「オアーズ」河畔「ラ・フエール」、「ノワイヨン」(5.22)の線に停止すへき件に關し元帥の諒解を得ることを努め且英軍の實況に對し懇篤なる同情を表すると共に英軍に對する獨軍の急追を緩和する爲佛第五軍を以て適當の處置を取るへきことを約し尚佛第六軍を英軍左翼に配置すへきことを告知せり之に對し元帥は「オアーズ」河畔の地形は以て軍の給養、物資の供給及兵員の補充を得る爲時間の餘裕を得るに適當なることを認めしも尚確實なる約束を爲すことを避けたり當時元帥の抱懷せる意見は英軍は二十三日以來既に將校以下一萬五千の死傷を生し火砲約八十門、機關銃の多數及材料の巨額を敵手に委せるか故に今後是等の補充を受くるにあらすんは到底有效に陣地を保持すること能はさるものとなせり是に於て「ジョッフル」將軍は更に政府の力を藉り英軍をして協同せしめんとし二十七日使者を大統領「ポアンカレー」の許に派遣し英軍か急速なる退却を中止し敵を支持する如く努力せられんことを要請し大統領は陸相「ミルラン」と協議の結果旨を英大使「フラシス・バーテー」に通報し英國大使は之を「フレンチ」元帥に電話すへきことを約せり然るに同夜十時頃英國大使は大統領を訪問し「フレンチ」元帥の返書を示せり卽ち之に依れは英軍は「モン」退却後休養の暇なく今や人員、材料の損害多大なるか故に軍の編成を整備し戰鬪力を恢復する爲には少くも尚八日を要すと云ふに在り

斯の如く「ジョッフル」將軍は直接に英軍司令官に對し勸誘を試むるの外大統領を介し英軍の精神狀態を緩和せんことを努めしか二十七日特に佛第五軍に命し「サンカンタン」方向に向ひ大々的逆襲を決行するに至れり

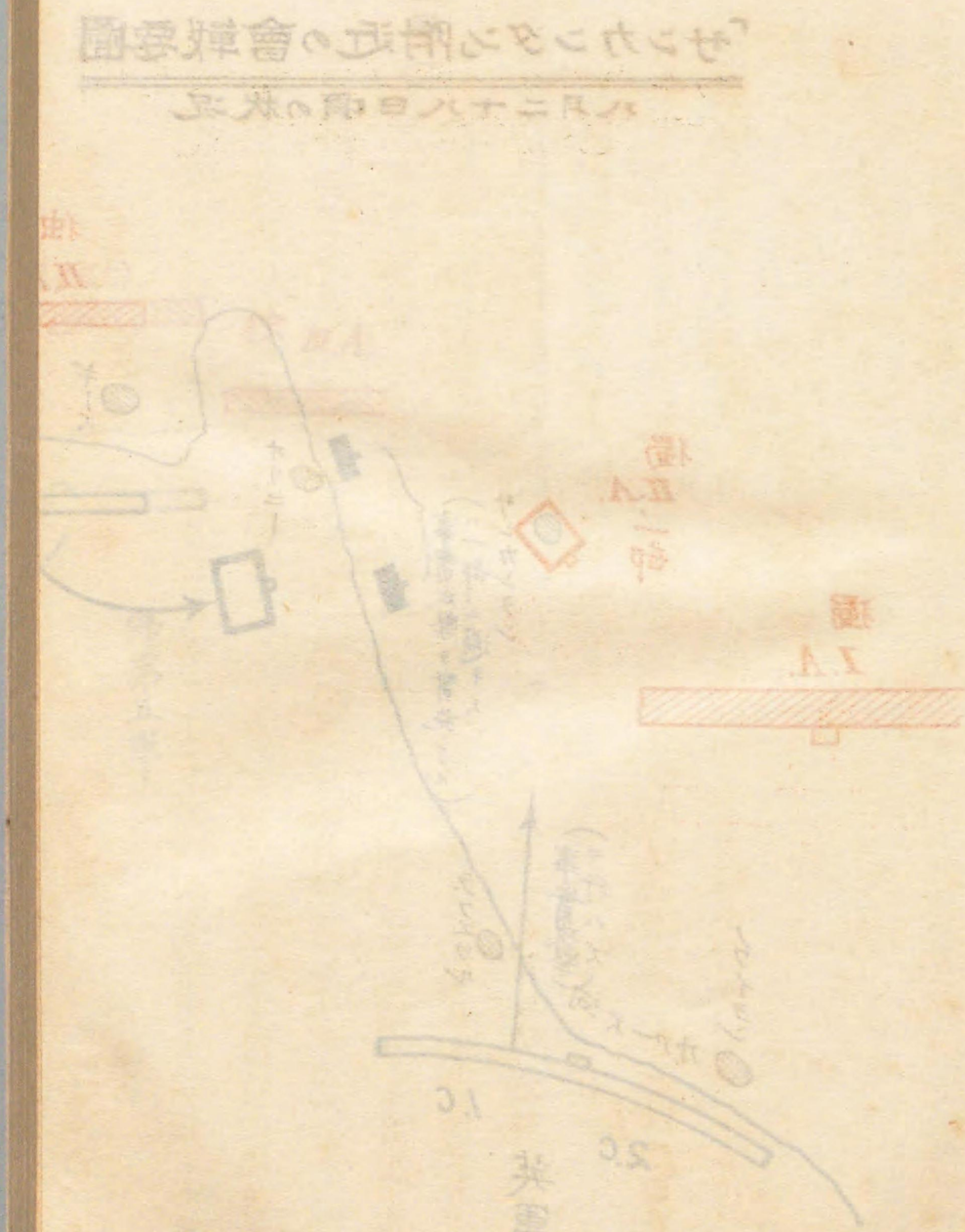
「サンカンタン」附近會戰に於ける英佛軍の協同（挿圖第二參照）

「ジョッフル」將軍は英軍方面の情況を緩和し其退却を制限する必要上佛第五軍をして大々的逆襲を決行せしむるに決し左の要旨の命令を下達せり

第五軍は「サンカンタン」に向ひ極力攻勢を取るへし其攻勢は英軍に顧慮することなく努めて速かに之を決行すへし

右命令に於ても尙「ランルザック」將軍は攻撃決行を躊躇せしを以て「ジョッフル」將軍は二十八日朝自ら第五軍司令部に到り攻撃を督促し二十九日を期し「サンカンタン」に向ひ攻撃を決行することとなれり

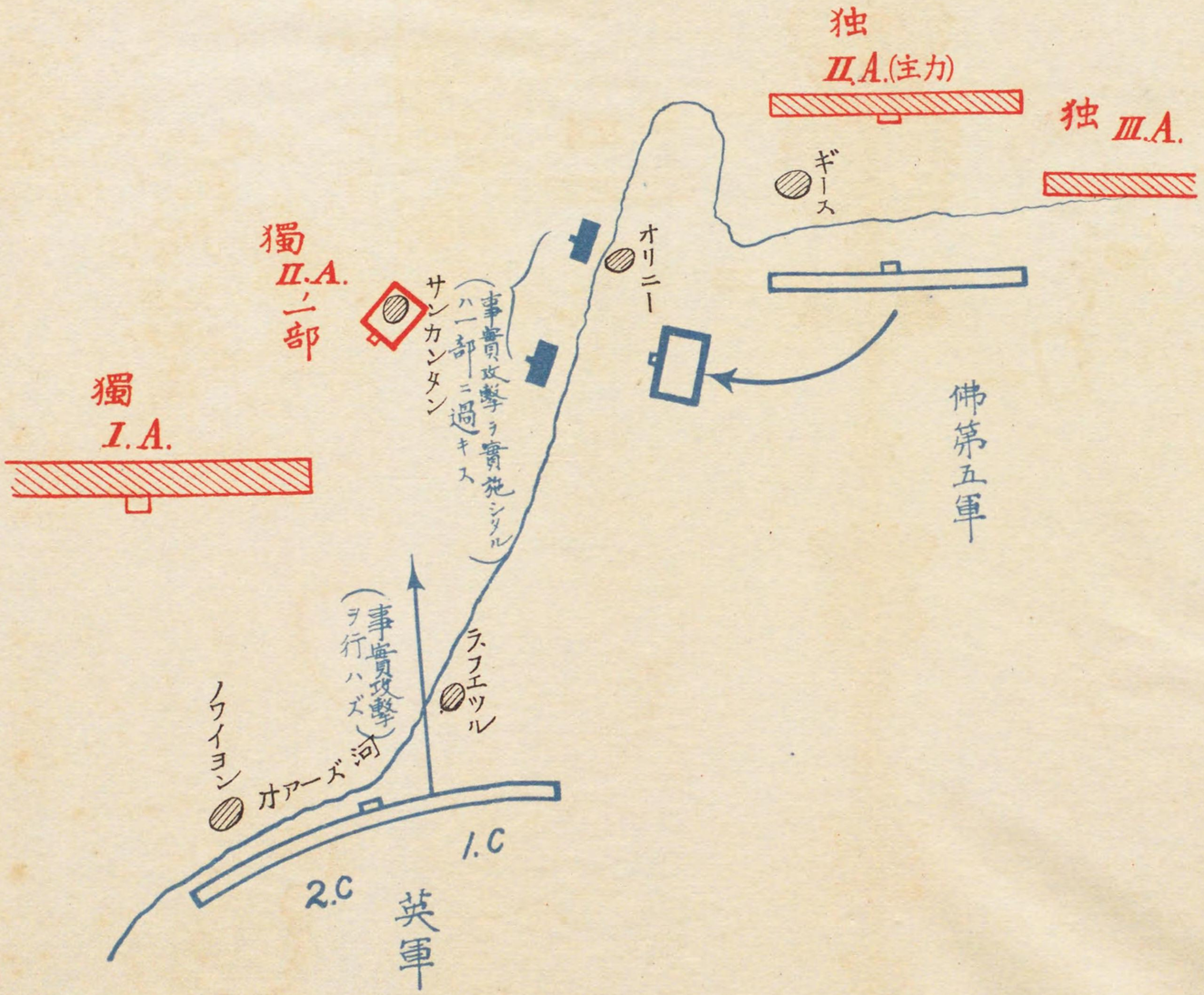
二十八日英軍は全く「オアーズ」河を通過し「ラ・フエール」―「ショーニー」(5.22)間同河南岸に停止せり偶〻英軍總司令部附佛軍武官「ユゲー」大佐は第五軍司令官に英軍の現狀を通報せり曰く英第二軍團は全然攻撃能力を失へるは勿論防禦



押圖第二

圖要戰會の近附「タンカンサ」

況狀の頃日八十二月八



二十八日英軍は全く「オアーズ」河を通過し「ラ・フエール」「ショーニー」間同河南岸に停止せり偶〻英軍總司令部附佛軍武官「ユゲー」大佐は第五軍司令官に英軍の現狀を通報せり曰く英第二軍團は全然攻撃能力を失へるは勿論防禦 (5.22)

に使用することも亦不可能なり若し強ひて之を使用せんか失敗するや必せり
英第一軍團(長「ヘーグ」將軍)は防禦に堪へ得へきも攻撃には不可能なりと一方
佛第五軍司令部より英軍總司令部へ差遣せる連絡將校の歸來せる報告に依れ
は歸途英第一軍團の宿營地を通過せしに秩序の維持良好なるを認め且軍團長
「ヘーグ」將軍は同將校に第一軍團は攻撃の能力を有し佛第五軍の攻勢と直接
連繫して協同攻撃を實施せんことを希望する旨の傳達を託せりと云ふ是に於
て第五軍司令官は直に英第一軍團との協同動作を企畫し之に要求するに英第
一軍團は明二十九日午前五時「ラ・フエール」北方陣地線を出發し「サンカンタン」
南部に向ひ前進し其右翼を以て「ラ・フエール」―「サンカンタン」道を通過すへき
ことを以てせしか更に協定の結果英第一軍は午前九時を以て運動を開始する
に決せり然るに午後十時に至り第一軍團長「ヘーグ」將軍は第五軍司令官に對
し午前九時を以ては單に「ラ・エール」北方陣地線にある若干の砲兵及騎兵を出
發せしめ得るのみにして歩兵は正午にあらすんは前進を起すこと能はさる旨
通報し同夜(二十九日)午前二時將に第五軍の運動を開始せんとするに方り再

ひ電話を以て「フレンチ」元帥の命に依り明二十九日は休息を行はさる可からさるか故に「サンカンタン」の攻撃に關する先きの協定を實施すること能はさる旨を傳達するに至れり是に於てか「ヘーグ」、「ランルザック」兩將軍の協調は破るるに至れり

二十九日第五軍は主力を以て「オリニー」(6.23)の上下流より「オアーズ」河を渡河し「サンカンタン」方面に前進し一部を以て「ギーズ」(6.23)方面に位置し主力の右側を掩護せしむることに決し拂曉以來其運動を開始せしか此間「ギーズ」方面より進出せる獨軍の攻撃を受くるに至り此方面の戰況危險となりし爲「サンカンタン」方面への攻撃を中止し三十日「セール」河南岸に退却せり

當時獨第二軍は「サンカンタン」、「ギーズ」附近に於て甚たしく其兵力を分離し且獨第三軍と離隔しあり不意に佛第五軍の攻撃を受け全然不期戰を惹起して防戰せし情況なりしか故に佛第五軍及英軍の協同成立し其攻勢を徹底的に實施せんか獨軍の追撃に一頓挫を來せしやも計り難し退却中に於ける聯合作戰の困難なるを知るへきなり

「ジョッフル」將軍は「ヴェルダン」、「アミアン」線上に於て企圖せる第二會戰の爲其主要なる努力を左翼に傾注し退却の決心と同時に第六軍を新に「アミアン」附近に集中すると共に英軍の過早なる退却を防遏せんことに腐心せること前述の如し然るに「サンカンタン」の攻勢も大なる效果を收むる能はす且「フレンチ」元帥は尙英軍は志氣甚た振はさるか故に重大なる損害を覺悟するにあらされは「ジョッフル」將軍の希望に從ひ「オアーズ」河畔の陣地を保持すること不可能なりとし更に「ソアッソン」(5.22)「コンピェーニュ」(5.22)間「エーヌ」河畔に向ひ退却すへき命令を下せり

「ジョッフル」將軍敗退せる英軍に對する再度の努力

八月二十九日午後「ジョッフル」將軍は再ひ「フレンチ」元帥を訪問し獨軍は東方戰場に其兵力を轉送し我成功の希望增大せるか故に最近攻勢に轉するを有利とする旨陳述せしか元帥は此數日間英軍は此の如き行動に參加すること能はさる旨を以てし「ジョッフル」將軍は是を抑ふるか如く否英軍には何等攻勢に參與すへき任務を課するにあらす唯其戰線に停止し以て佛第五軍、第六軍兩軍

間に生せる空隙を閉鎖するにあることを以てせしも「フレンチ」元帥は依然退却の必要を主張し爾後「マルヌ」河南方迄退却を續行するの餘儀なきことを回答し且附加して曰く『此退却に依り一般戰線に空隙を生せしむるか如き急遽なる運動を取らさるへきを保證す』と此間「フレンチ」元帥は「コンピェーニュ」に英軍軍團長會議を聞き今後の方針を合議せり席上某軍團長は失望的意見を述へ英軍は宜しく海岸根據地に向ひ退却すへきことを主張せしも元帥は之を却下し今や「ハーブル」(「セーヌ」河口)との交通は脅威せらるるに至れるか故に新に根據地を變更するの要を認め之を「サン・ナゼール」及「ナント」(「ロアール」河口)に選定し「ル・マンス」(巴里西南方)を前進根據地となせり三十日「ジョッフル」將軍は更に「フレンチ」元帥に通報し「ラ・フエール」、「コンピェーニュ」間に於ける「オアーズ」の諸橋を破壞し其間隙を守備すへきことを懇望せしも元帥は依然軍の狀態之を許さざる旨を以て拒絶せり當時元帥は出征前特に與へられたる訓令に鑑み再ひ八月二十三、二十四日の如き危地に陷らさるを以て自己の最大職責なりと思考せるものの如し

是に於て元帥は陸相「キッチナー」に書簡を送りて曰く『英軍か今後完全なる獨立的能力を有することは極めて必要なるか故に要すれは我軍を根據地に向ひ退却せしむるの權能を與へらるへきこと絶對に必要なりと信す』と

三十一日「ジョッフル」將軍は萬難を排して英軍の退却を制限せんとし在「ダンマルタン」(4.21)英軍司令部に連絡將校を差遣し英軍か其陣地を固守すへきことを熱心に勸告せしめ且是れ實に佛國大銃領、英國政府及「キッチナー」陸相の意圖なることを告知せしも「フレンチ」元帥は之に對し若し此の如き要求に應せんか恐らく聯合軍の全部は「マルヌ」に向ひ混亂を以て擊退せらるるに至り巴里も亦容易に獨軍の手中に落つへしとなし且英軍目下の狀態は累卵の危きに比すへく爾後の數日も亦各種の補充を受くへき見込なしとして之を拒絶するに至れり

八月末に於ける英軍の態度前述の如し此協調の不成立は遂に英、佛兩國政府を

動かし英國陸相「キッチナー」將軍は遂に自ら巴里に赴き九月一日「フレンチ」元帥及其參謀長を巴里英國大使館に招致し佛首相「ヴィヴィアニー」及陸相「ミルラン」と共に會見を遂くに至りしか席上「フレンチ」元帥は意見を開陳し「聯合軍は「マルヌ」河畔迄退却を續行し該線に於て第二の會戰を企圖すへし』となし佛陸相は之を筆記し直ちに「ジョッフル」將軍に移牒するの處置を取れり

英佛軍の第二次退却

八月三十日佛第四軍は其左翼を以て「ルテル」に、第五軍は「ルテル」、「ラ・フエール」間に、新に編成せられたる第六軍は「コンピェーニュ」、「クレルモン」(5.21)の線に位置せり然るに英軍は此間「ラ・フエール」、「コンピェーニュ」の正面を撤退し之に一兵をも殘置することなく一擧に「エーヌ」河後方に向ひ退却せり

八月三十一日佛第三、第四軍、第五軍は大體に於て豫定の停止線たる「ヴェルダン」附近より「ルテル」附近を經「ラオン」の高地帶に亙る線に退却せしか聯合軍左翼に對する獨軍の壓迫急にして英軍及第六軍は豫定の配置を取ること能はす「ソアッソン」、「コンピェーニュ」及其以西に亙る線に向ひ後退するの已むなきに至れるのみならす尚其危險を脫逸する能はさりき

是に於て「ジョッフル」將軍は今や豫定の企圖の實行不可能なるに至れるを見更に其決心を變更し一時「ヴェルダン」を放棄し「ツール」(3.27)より「セーヌ」河を經巴里に亙る線に全軍を後退せしめ以て新會戰を試みんとせり

九月二日「ジョッフル」將軍は尚未た全く攻勢再開の機を豫期すること能はさりしか「フレンチ」元帥の提議に關する佛陸相の移牒に對し左の回答を爲すと共に英軍總司令官にも亦左の信書を送れり

（佛陸相に宛てたるもの）

予は貴官の移牒に係る「フレンチ」元帥の提議を受領せり該提議は「マルヌ」河畔に陣地を編成し絶大なる豫備隊を配置し特に左側後に其兵力を增加せんとするものなり

然れとも第五軍の現況を以てしては「フレンチ」元帥の計畫を實行し且英軍の右翼に對し所望の時機に於て有效なる援助を與ふること不可能なり之に

反し巴里東北正面の防禦に任すへき「モーヌリー」將軍の軍(第六軍)は幸に英軍の左側を常に掩護し得るの情況に在り以上に依り英軍は「マルヌ」河の線に於ては單に一時的の停止を爲すに止め爾後「セーヌ」河左岸に後退し以て「ムラン」(2.21)より「ジュヴィジー」(3.21)間の地區を保持すへし斯の如くせは英軍は巴里要塞の戍兵に對し著大なる後援となるへく今や諸軍の運動を規整すへき諸訓令は下達を終れるか故に此等訓令を改正するの極めて有利ならさることを附言す此等の訓令は近く試むへき攻勢の再開に適當する如く諸軍を配置しあり而して攻撃運動開始の日時は「フレンチ」元帥にも通報すへく英軍にも此攻勢に參加せしむへし

(「フレンチ」元帥に宛てたるもの)

予は陸相の移牒に依り貴官か英軍の協同作戰に關し佛國政府に致されたる提議を知り茲に感謝の意を表せんとするものなり

最近二日間に惹起せる情況に依れは「マルヌ」河畔に於て我聯合軍の全兵力を整頓し總會戰を企圖することは未た不可能なるものと認むるも然れとも予は英軍か此際右陸相に宛てたる書簡の如く巴里防禦の爲に協同することは其效果最も大なるものなることを信す』と

當時「フレンチ」元帥は「マルヌ」河畔に於て攻勢に轉するを可とするの意見を有せしか二日附「ジョッフル」元帥の信書を受領するに至り「ジョッフル」將軍は未た「マルヌ」河畔に於て攻勢に轉するの時機にあらすとなせるを知り二日夜更に「クーロンミエー」(3.22)「クレシー」(3.22)「モントリ」(3.21)の線に向ひ退却を續行せんとするに至れり

巴里總督「ガリエニー」と「フレンチ」との協同

九月二日佛第六軍は巴里總督「ガリエニー」將軍の指揮下に入れり

九月三日「ガリエニー」將軍は獨第一軍か巴里に顧慮することなく佛第五軍の左翼を攻撃する爲東南方に向ひ前進し且其後方近くには後續部隊なきを察知し獨軍の側背に逆襲を決行するの有利なるを自覺せしも未た英軍第五軍の之に協力し得るや否やの情況を確かむる能はさりしも攻勢の爲準備する所あり且

二日附を以て「ジョッフル」將軍は「セーヌ」河の線に向ひ退却を區處せるを以て大に憂慮し四日總司令官に速に「マルヌ」河畔に於て攻勢に出つるを可とする旨意見具申せり然るに當時英軍は豫定の如く「セーヌ」河南岸に向ひ退却を續行するの決心を取れり而して「ガリエニー」將軍は「ジョッフル」將軍の敢て攻勢に出てさるは英軍の躊躇せるによるものと判斷し「フレンチ」元帥を說伏するの必要を生せるを以て九月四日午後一時「ガリエニー」將軍は「モーヌリー」將軍(第六軍司令官)及「クレルジュリー」少將(巴里軍參謀長)と共に在「ムラン」英軍總司令部を訪問せしか元帥は偶〻戰線に出て參謀長「ミュライ」も亦不在なり唯「ウイルソン」參謀次長のみ在りしか「ウイルソン」は因より總督の提議せる計畫に對し何等の言質をも與ふる事能はす已むを得す午後六時過き巴里に歸還せり

「フレンチ」元帥は此日「ムラン」に送れる「ジョッフル」將軍の通報を受領し「ジョッフル」將軍は目下新なる攻勢計畫に著手せることを知り且同夜「ムラン」に歸還するに及ひ其不在中巴里總督の訪問を受けたること及巴里總督は「ジョッフル」將軍の計畫を說示し第六軍と英軍と協同作戰を希望しつつありしことを知れり

「フレンチ」元帥は此夜までに「ジョッフル」將軍の新企圖に關し既に左の大要を承知することを得たり卽ち九月六日佛第六軍をして「ラニー」(4.22)「モー」(3.21)間に於て再ひ「マルヌ」河を渡河し東面して陣地を占領せしめ英軍をして第六軍の右翼(「マルヌ」河)及第五軍の左翼(「プロヴァン」(2.22)附近)間の空隙部を前進せしめ聯合軍の左翼諸軍相合して敵を東北方及北方に壓迫し之を殲滅せんとすることを是なり

然れとも「フレンチ」元帥は尙英軍の右翼と佛第五軍の左翼間には大なる空隙部を存せること及四日夜にも獨軍は「ヘーグ」軍團を攻擊すへき情況に在ることを憂慮し更に諸軍團に對し數哩南方に退却すへき命令を下達せり

四日は佛軍總司令官か攻勢開始に關する重大なる決心を取れるの日なり佛軍

總司令部に於ては巴里總督「ガリエニー」將軍の具申を動機とし總攻撃開始の能否に關し朝來大いに論議する所ありしが當時の問題は主として各軍特に英軍の攻勢の可能性、攻勢開始時日及第六軍の出撃方面なりしか如し而して佛第四軍は未た正面し得るに至らす佛第九軍の情況は不明にして第五軍司令官亦六日以前には攻勢の不可能なることを報告しありしか獨「フォン・クルック」軍は當に佛巴里軍に對し其側面を暴露しつつありしを以て巴里方面より徹底的に攻勢を取らは必すや其成功疑ひの餘地なし唯巴里軍の出撃を「マルヌ」河の北よりすへきや將た南よりすへきやに關して意見區々にして北岸よりする時は直に攻撃を行ひ得るの利あり是れ同軍の右翼は「ダンマルタン」に在れはなり然れとも南岸よりする時は其協力を必要とする英軍を誘發せしめ得るの利あり要するに之か決定には先つ英軍の意思を確めさるへからすとなせしか如し

而して「ジョッフル」將軍は獨第一軍の輕舉に乘し攻勢を再開せんとする根本的決心は之を定めたるも尚其期日及第六軍の出撃方面に關しては之を確定するに至らす

是に於て「ジョッフル」將軍は一方「ガリエニー」將軍に極力英軍と連繫すへきことを訓令すると同時に極力英軍の協同を求めんと欲し直接「フレンチ」元帥との交渉を開始し左の書信を「ムラン」英軍司令官に送附せり

九月三日付の貴翰を受領せり茲に滿腔の謝意を表す

現狀に對する予の企圖は曩に貴官に送附せる計畫を實行し全兵力を以てするにあらされは會戰を交へさることを是なり

而して獨軍か若し東南方に向ひ前進を續行し以て巴里より離るるか如き場合に於ては貴軍か「マルヌ」及「セーヌ」兩河間に於て「セーヌ」右岸に有效なる攻勢を企圖し得へきこと恐らく貴官の同意を得へきことと信す

此際貴軍の左翼は「マルヌ」河に依托し巴里要塞の支援下に於て同要塞の移動部隊に依り全く掩護せらるへし是れ該移動部隊は「マルヌ」左岸を經て東

方に向ひ攻撃前進すへけれはなり

「ランルザック」將軍の罷免

予は此に「フランシェー・デスペレー」將軍か新に佛第五軍司令官に任命せられたる件に關し昨日通報せし所を更に確實に告知す予は同將軍か會戰に當り貴軍と有效なる協力を試むへきことは之を確認して疑はす

「ジョッフル」將軍は五日午前零時五分攻撃に關する訓令を下し九月六日を以て攻撃を實施することに決せり而して英軍は「モンミライユ」(3.23)に向ひ佛第六軍を「シャトーチェリー」(4.22)を一般目標として前進せしめ「コンノー」騎兵團は第五軍と英軍間の連繫に任せしめたり卽ち以上の命令に依るも明なる如く一般攻撃目標は東方に偏したり是れ當時英軍の志氣振はさりしを以て英軍をして協同前進せしむる爲には英軍を支援せさる可からさりしか故なり

卽ち當時英軍は尙攻勢を欲せさるものの如く五日第六軍司令官「モーヌリー」將軍も「フレンチ」元帥に會して英軍か佛軍の攻勢に極力協力せんことを懇願し又同日午後「ジョッフル」將軍は「ムラン」に赴き元帥と會見せしに僅かに英軍は其兩翼を佛軍により堅固に掩護せらるる條件を以て始めて前進すへしと約せり蓋し英軍は國境會戰に於て佛第五軍の獨斷退却により敵に包圍せられ退却に次くに退却を以てし此時機に至りても尙志氣を沮喪せしこと其因をなせしか如し

「ジョッフル」將軍の赤誠「フレンチ」將軍を動かす

然れとも斯の如き英軍の決意を以てしては徹底的の攻撃を期待するを得す仍て「ジョッフル」將軍は明細に其計畫情況の重大、英軍の協同動作の絶對的必要なることを說述し最後に之に懇望するに『元帥閣下予は佛國を代表して之を貴官に請願す』と請へり是に於て「フレンチ」元帥亦感激し英軍か明日勇敢に其任務を盡し以て佛國の尊敬と感謝に酬ゆる所あるへきを肯定し之を聞ける「ジョッフル」將軍は熱狂し感謝して曰く『若し聯合軍にして各其任を全うし攻撃を斷行せは勝算既に歷然たり』と

斯の如く英、佛兩軍の協調は五日夜成立し「フレンチ」元帥亦六日以後の攻勢開始に關し左の訓令を發して部下を督勵するに至れり

聯合軍の一般戰略上の必要に基き大なる退却を行ひ且最も困難なる數次の戰鬪を經たる我軍は今や友軍と同線上に位置し敵を攻擊するの準備を了せり

巴里攻圍の企圖を放棄せる獨第一軍は主力を以て佛第五軍を攻擊せんとするものの如く東方及東南方に向ひ前進せり

此連動は敵か其右側及後方連絡線を佛第六軍及英軍に暴露するものと謂ふへし

此時に方り予は佛國戰場に在る英軍か敵に其武威を示し佛第六軍と連繫して猛烈果敢に前進せんことを希望す

予は右の希望か無效に終らす英軍か過去二週間に亙り示せる崇高なる精神を益〻發揮し全力を盡して敵の翼側に殺到し友軍と共に敵を擊破すへきことを信す

因に千九百二十年「マルヌ」會戰記念に於て佛國前大統領「ポアンカレー」の爲せる演說中英、佛兩軍當時の協同作戰に關し其實驗者として述へたる一節は其眞相を窺ふ爲多少の參考たるへきを思ひ左に之を附記す

我軍は開戰初期國境附近の會戰に於て利あらす全線退却の已むなきに至れり然れとも是れ總司令官か戰略上の必要に基き命令するに至れるものにして當時總司令官か此決心を取るに至れる所以に關しては予も當事者の一人として前後の事情に精通しあり卽ち再三研究の結果徒らに獨軍に接近して不利の形勢を挽回せんよりも一と先つ行動の自由を獲得し以て爾後の攻勢を準備するを優れりとなせしか故なり而して我軍は最初「ソンム」の線に於て抵抗せんとし又巴里東北方地區に於て決戰せんとするの案もありしか九月一日付總司令官の訓令に依り遂に「セーヌ」、「オアーズ」竝「オルネン」河の線に向ひ退却するに決せり

敵は「シャルロア」戰以來速に我に決戰を强ひんとし常に我側面に向ひ繞回せんとするの企圖を有せしものの如くなりしか故に「ジョッフル」將軍は敵の

追撃を遅滯せしめんとし英軍に希望するに其後衞を以て獨軍と接觸を保持せんことを以てせり

然れとも英軍の退却は其希望に反し常に過早なりき

此年八月二十六日陸相となれる「ミルラン」は恐らく三十日總司令官より發せし電報を記憶せらるるならん該電報は英軍は「モー」に向ひ退却し爾後南方より巴里を迂回して「セーヌ」河畔を占領すること可能なりや否やを問ひ合せ來れるものなりき其翌日「ヘヌロン」中佐(目下軍事祕書官)は總司令官の代理として予の許に來り英軍をして過早の退却を止め敵を支持せしむる如く是に交涉せんことを希望せり卽ち予は「ミルラン」と協議の結果英大使「フランシス・パーテー」に「ジョッフル」將軍の意圖を通告し氏は之を「フレンチ」元帥に電報すへきを約せり然るに其夜十時頃英大使は予を來訪し「フレンチ」元帥の返書を提示せり之に依れは英軍は「モン」退却後戰鬪に寧日なく今や人員材料の損害莫大なるか故に軍の編成を改正し戰鬪力を充實する爲今後少くも八日間を要すへしと

九月一日「フレンチ」元帥は自ら巴里に來り佛陸相「ミルラン」及英國陸相「キッチナー」元帥と會見し彼は次の條件の容れらるるに於ては英軍は「モー」を守備すへしと聲明せり其條件次の如し

英軍は巴里下流「セーヌ」河畔を防禦する爲佛軍の增援を受け且海岸に至る英軍の後方連絡を確實に掩護せらるること

「ジョッフル」將軍は此報告に接し答へて曰く

『此要求は到底不可能なり而して英軍は總攻撃に參加する爲成るへく速かに巴里を軸として旋回すへきを希望す』と

同日巴里總督「ガリエニー」將軍は「フレンチ」元帥と連絡を取る爲通信せしも「フレンチ」元帥ば何等答ふる所なかりしか佛英軍の協同を必要とせる先覺者の一人英「ウイルソン」將軍は佛軍と協同すへきことを回答せり

九月四日夜英軍司令部附佛國武官「ユーゲー」大佐は「ガリエニー」將軍に左の

如き電報を致せり

英軍は昨日東方に向ひ前進すべき準備に在りしか如きも愼重に動作するを要すとの見地より其決心を變更せり英軍は休息に移り且容易に退却を開始し得へき準備に在りと

英軍と協同する爲「ガリエニー」將軍も亦「ジヨッフル」將軍と同樣なる困難を嘗めたり

然れとも獨軍か巴里を攻撃することなく東南に向ひ轉進するに及ひ「ガリエニー」將軍は今や英軍と悠々商議するを欲せす彼は時期を失せす「モーヌリー」將軍（佛第六軍司令官）に對し獨軍の側面を攻撃すへき命令を發せり此命令は「ガリエニー」將軍の追想錄に公開せられあるか如く九月四日朝九時に發せられ既に政府には電報せられありしものなり故に之を以てするも巴里總督か最初より企圖せる攻撃なるや明なり

四日午後「ガリエニー」將軍は「モーヌリー」將軍と共に英軍總司令部に赴きし

も恰かも「フレンチ」元帥は第一線巡視中なりしか故に派遣武官「ユゲー」大佐及英國將官に獨軍の一翼に向ひ奇襲するの緊要なることを說明したるのみにて滿足せさるを得さりき

然れとも「マルヌ」の會戰の開始せられたる當時に於ては大體に於て英軍との協調成立し英軍は大いに勇戰し遂に名譽ある戰捷を獲得せり然れとも上述の如く最後の時期に至る迄兩軍指揮の間に或は意見の背馳を見或は協同の適切ならさりし點多し「フレンチ」元帥は此不和に就て其所見を自由に吾人に知らしめ「ガリエニー」將軍は暗に其原因の數種を示し互に好意を以て其眞相を發表せしと雖尙事實の吻合せさるものありと

九月六日以後巴里に於ける英佛軍の攻勢及爾後の追擊

佛第六軍は九月六日朝來攻擊を起し午前九時大體に於て「シャンチイー」(4.21)「オアセリー」(4.21)の線に進出することを得たりしも爾後強烈なる敵軍の抵抗に會し攻擊進捗せす當面の獨軍は豫備第四軍團の全部のみならす情報に依れは各一師團より成る敵の二縱隊は南方より北上し午前九時「ヴアレット」(4.22)及「リ

ジー」(4.22)方面「マルヌ」河の線に到達せり

是に於て第六軍司令官は獨軍か英軍正面の兵力を轉用するに至れることを察し「ガリエニー」將軍亦之を危惧し正午「フレンチ」元帥に左の信書を與へ英軍の前進を懇望する所あり卽ち

予は本攻勢の進展の爲今より予の使用し得へき全兵力を第六軍に增遣せんとす思ふに第六軍をして孤立に陷らしめさること及獨軍をして英軍正面の兵力を當面に轉用する能はさらしむることは極めて緊要なり卽ち予は特に貴官に眞に總攻勢たるの實を擧け且成功唯一の條件たる協同の效果を擧くる爲英軍も亦「ジョッフル」將軍の指示を體し當面の前進を遂行せられんことを

此時に方り「ジョッフル」將軍亦英軍の前進を督促するの必要を認め「ガリエニー」將軍を經て第六軍司令官に左の要求を傳達せり

貴官か英軍總司令官「フレンチ」元帥との連繫を確保し及協同作戰に關する同官の要望を滿足せしむへき處置を講しつつあることは大なる價値を有するものと信す予は今後更に英軍の左翼に對し有效なる支援を與ふることを熱望す

而して之に對する「ガリエニー」將軍及第六軍司令官の報告左の如し

「ガリエニー」將軍の報告

予は既に英軍の心理を察し貴電と同一意味の命令を第六軍司令官に下達せり第六軍司令官は英軍の左翼と密接なる協同を維持する爲第八師團の全部を「マルヌ」河南方地區に使用せり但予の所感を以てするに「フレンチ」元帥は尙英軍と第五軍間に存在する空隙に對し憂慮しつつあるものの如しと

第六軍司令官の報告(九月六日夜後半)

予は六日朝以來攻擊を再興し拂曉「サン・スープレー」(4.21)附近を奪取し捕虜數百及彈藥の多量を獲得せり而して此日夕軍は概して「シャンブリー」(4.21)「マルシリー」(4.21)「アシーアン・ミュルチアン」(4.22)の線に到達せり

昨日以來軍に對抗せし敵は獨豫備第四軍團にして今六日午前十時以來更に現役一軍團の增援を受くるに至れり新軍團は恐らく「クーロンミエー」より來援せる獨第二軍團にして本夕「エタヴィニー」方面に於て我軍左翼を包圍するに至れり軍は明七日早朝攻撃を再興すると共に鐵道に依り輸送せられたる豫備第六十一師團及騎兵集團の全部を以て敵の右翼を包圍せんとす

予は第八師團を速に夜行軍に依り「モー」南方に派し以て「グラン・モラン」河を經て英軍と共に密接なる協同動作を爲さしむることとせり

此間英軍總司令部は「ガリエニー」將軍の要望に對し左の要旨の通報を送るに至れり

「フレンチ」元帥は尙不在なるか故に予（參謀長「ウイルソン」將軍）は英軍か前進を繼續しあること及英軍は本夜「クーロンミエー」東南より其西北に亙る線に進出すへきことを通報す

予は英軍如上の行動か恐らく貴官の希望に合すへきものと思考す予は只今

佛第五軍より同軍か全線に於て成功しつつあるの通報を受領せり

英軍の情況

英軍は五日夕「ラ・シャペル・イーゼル」附近より「バイイー」附近に至る線にあり佛第五、第六軍と遠隔せるのみならす六日「ジョッフル」將軍の指定卽ち「クーロンミエー」、「シャンジー」(4.22)の線に到著することは不可能にして獨軍と相距ること遠く爲に獨第二軍をして何等の危險なく北方に轉進するの自由を得しむるに至れり

他方佛第五軍竝其他の佛軍は六日朝來各當面の敵と大會戰を惹起せり

若し英軍及第五軍の攻撃前進猛烈なりしならんには獨軍をして佛第六軍の包圍運動に對し兵力を轉用せしむるか如きことなかりしならん

爾後英佛軍は相協力して獨軍を「エーヌ」河の線に向ひ追撃せり

開戰より「マルヌ」會戰に至る間は英佛軍の爲實に危機たりしなり此危難を救ふ唯一の途は東方に於ける露軍の協力により東方戰場に獨軍兵力を牽制するにあり此點に關し英、佛兩國か如何に露國を督勵し露軍か如何に協同せしやに

就ては後章に於て述ふる所あるへし

獨、佛國境會戰より「マルヌ」會戰に至る間英、佛兩軍の行動を觀察するに開戰前に於て何等具體的軍事協定を締結せす開戰倉皇の機に臨み聯合協同を處理せると英國政府か「フレンチ」將軍に與へたる開戰當時の訓令とによれは到底其行動を統一する能はさるを了知し得へし

元來作戰は神速を尊ひ臨機果斷の處置を必要とす然るに實戰場裏に於て作戰上の統帥權を指揮官に一任すること無く其裁決を一々本國政府に仰かさるへからさること英軍の如くならんか聯合作戰の協調適切を缺くは蓋し已むを得さる所なり英國は民主的國家として政略は常に戰略の上位にあり爲に政府は遂に戰場に於て當然なすへき軍司令官の權限に干涉し聯合作戰を不調ならしめたり加之佛軍總司令官「ジョッフル」將軍は開戰當時獨軍は白國の中立を侵犯して遠く「ムーズ」左岸より繞回するものと判斷せさるに佛左翼第五軍司令官「ランルザック」將軍は之に全然反對の判斷をなせり卽ち同將軍は攻勢防禦

を以て對獨作戰の根本となし獨軍主力は遠く「ムーズ」左岸白國方面より侵入するものと判斷せり

是に於て「ジョッフル」、「ランルザック」兩將軍は事毎に意見の衝突を來し遂に左翼方面に於ける聯合作戰を困難ならしめしこと既述の如し

佛軍總司令官「ジョッフル」將軍は西方戰場に於ける主力軍の最高指揮官として英佛軍の協調を圖り進んて之か指導に任せさる可からさるは勿論佛最左翼軍司令官「ランルザック」將軍及英軍司令官「フレンチ」將軍も聯合軍協同の精神に基き進んて相互の協調をなすへきは隣接軍の指揮官として當然實行せさる可からさる所なり

然るに「ランルザック」、「フレンチ」兩將軍は初對面より互に愉からす殊に八月二十四日國境會戰に於て不利の戰鬪を行ひたる佛第五軍か英軍を顧慮する所なく先つ獨斷退却行動を開始し英軍をして一時甚しく不安の念を起さしめ爲に英軍亦國境より「マルヌ」河に至る退却行動間佛軍を顧慮することなく退却

を實行し英軍及佛第五軍間の協同は實に皆無なりき「ランルザック」の言に依れは英軍に小援助を與へたりと稱言し「フレンチ」將軍の言によれは何等の援助を受けたることなしと又「フレンチ」將軍は其備忘錄中に佛第五軍の『意外なる退却』、『狼狽せる退却』と記載しあるを以てしても如何に兩將軍間の感情を阻害したるやを推知し得へし

兩將軍の感情斯の如きを以て此間に處し「ジョッフル」將軍の苦心又察するに餘ありと謂ふへし是に於てか將軍の人格か聯合作戰に如何に偉大なる影響を及ほすものなるやを知るを得へし

第四章　自開戰至「マルヌ」會戰　英、佛、白軍協同作戰の概況

本歐洲大戰の勃發直前に於て獨國か白國の中立を侵犯せる場合に於て白國か英、佛側に立つて參戰すへきことの密約ありたるや否やは正確ならす又佛、白兩國間に於て軍事上の提携は行はれさる如し何となれは佛國政府は專ら國際的批難を避けんか爲英國か開戰直前白國の中立を尊重するや否やに關し獨、佛兩國に質問書を發せしに對し八月四日夕に至る迄佛軍の白國侵入を禁せしかり然るに獨軍は白國中立尊重に對する英國の抗議を拒否し八月三日夜既に國境を超えて白國に侵入し四日午後には「リエージュ」に對する攻撃を開始せり同日白國政府は獨軍の侵入に對し其救援を英、佛兩國に嘆願せり又八月八日午前七時「ジョッフル」將軍は一般訓令第一號を下し佛諸軍の任務を確定せり然るに該訓令にも白軍に關し何等指示する所なし

而して八月十六日「ジョッフル」將軍の覺書（前章參照）により始めて佛軍か白軍との接觸に著手せるを知るへし之を要するに佛、白軍の開戰當時に於ける連絡

は甚た不十分なるものの如し英、白軍間亦然り而して白國軍作戰計畫は一部を以て「ムーズ」河の諸要塞を占領し主力を後方に集結して獨軍の前進を遲滯せしめんとせしものの如し卽ち斯の如くして獨軍の侵入を防止し英佛軍の集中を掩護し爾後獨軍の右側背を脅威し英、佛軍の作戰を容易ならしめんとせり然れとも白軍の兵力を以てしては到底精銳にして優勢なる獨軍に對し如何ともする能はさりき而して白軍は「リエージュ」要塞の陷落後「エーアショット」―「ナムール」の線を占領し獨軍を拒止せんとせしも獨軍の爲擊破せられ二十日「ブルッセル」を放棄し「アンヴェル」要塞に向ひ退却し八月二十三日「アンヴェル」要塞より出擊を企て英佛軍に協力せんとせしも成功を見るに至らす八月二十五日「ナムール」要塞、十月九日「アンヴェル」要塞陷落し其全土を獨軍の爲蹂躙せられ英佛軍により西方戰場の左翼海岸方面に收容せらるるに至れり

第五章　自「エーヌ」會戰至「イープル」會戰　英、佛、白聯合作戰（附圖第二參照）

「マルヌ」會戰に於て勝利を博したる英佛軍は長驅獨軍を國土内より驅逐せんとし九月十二日より追擊を實施せしも直ちに「エーヌ」附近の獨軍陣地に遭遇し九月十四日より會戰を惹起せり佛軍は當初之を後衞陣地ならんと判斷し攻擊せしも偵察の結果本陣地なる事を知り更に愼重に攻擊を實施し陣地の奪取に努めしも獨軍の抵抗頑强にして奏效せす遂に其左翼なる「コムピェーニュ」方面より之を包圍攻擊せんと企圖するに至れり是に於て獨軍も亦之に應し其右翼を延伸せんとし「アルサス」、「ロレーヌ」方面より兵力を轉送し佛軍は更に其延伸翼を包圍せんとして「ヴェルダン」以南より兵力を移動し玆に兩者期せすして延翼の競爭を實現するに至り十月上旬「リーユ」附近に達し遂に北海迄戰線を擴張するに至れり

延翼競爭

此延翼競爭の進展を左の三期に區分し此間に於ける英、佛、白聯合作戰に就て研究せんとす

一、海に向ふ競爭　第一期（九月下旬迄）

二、海に向ふ競爭　第二期(十月十五日「イープル」會戰前迄)

三、同　第三期(十月十五日以後「イープル」會戰を含む)

海に向ふ競爭　第一期

此期は九月十八日「ローレーヌ」とり招致せられたる佛第二軍か獨軍右翼を包圍せんか爲「オアーズ」河と「アミアン」東北地區との中間「アルベール」附近に展開せる時期なり之に對し獨「ビュロー」軍(第二軍)も亦「エーヌ」河畔に於て獨第七軍(「ヘーリンゲン」軍)と交代し佛軍左翼を包圍せんとせり

九月二十六日佛第二軍は該線に於て獨軍と戰鬪を開始し獨軍の攻勢を挫折せり

海に向ふ競爭　第二期

第一期は單に戰術上の包圍を企圖したるに第二期に於ては英本國と英軍とを連絡すへき根據地、換言せは英佛海峽を英軍の領有に置かんことを欲したり

元來英佛海峽を保有すると否とは英國の死活問題に關する所なるを以て英本國政府は「アンヴェール」要塞の陷落せさるに先たち白國の哀願により該要塞を救援せんと欲し「フレンチ」元帥は白國の事情に精通せる「ブリッチ」大佐を十月五日白國軍司令部に派遣し「アンヴェル」要塞を固守すへきことを說得し且英軍は速に之に增援すへき事を告けしめたり又英本國政府は「ローリングソン」將軍の指揮する部隊(增援せる歩兵第七師團及騎兵第三師團)を直轄として「アンヴェル」要塞を救援せんと欲したり

されは佛國戰場に於ける英軍は全部「フレンチ」元帥の統一指揮下に屬せさりしなり是れ「フレンチ」元帥の甚た不滿となす所にして將軍は其戰鬪報告に記して曰く

『若し予か在佛國英軍總司令官として十分其職責を委任せられ居らは必すや「ローリングソン」將軍の指揮する部隊に關して異りたる配置を爲したるならん予は「キッチナー」卿か本國政府と佛國に駐在する英軍司令官との間に

介在し英軍の進退を一括して彼自身に掌握せんとせし爲此機に際して其最上の策を爲すこと能はさるに至らしめしことを記せさる可からさるは千載の痛恨事なり』と

十月五日白軍に派遣せし「ブリッチ」大佐の報告によれは「アンヴェル」要塞は白軍之を保持する能はすと云ふ悲觀的報告たりしなり又佛軍總司令官「ジョッフル」將軍は「フレンチ」元帥の意見に同意せるものの如く十月八日左記「フレンチ」元帥宛「ジョッフル」將軍の電報に依り明かなり

『予は英國「ローリングソン」增援隊の指揮に關し貴官と意見全然一致す「アンヴェル」要塞は實際の情況上英第七師團を以て守備兵を增援するも該地の運命を挽回するに何等の效果を齎らさざるへきを信す故に「ローリングソン」の部隊は速に北方地帶なる英軍本隊と合一するを至當とす貴官は予の意見を「キッチナー」卿に通牒せさるや

予は佛大統領に乞ひて此の意見を英國陸軍大臣に通知せん』と

佛國大統領「ポアンカレー」も亦戰場に「フレンチ」元帥を訪問し英「ローリングソン」の部隊を以て「アンヴェル」要塞救援に使用するの不可なる所以を力說せり

右の如き意見の不一致は十月十日（「アンヴェル」陷落の翌日）迄繼續せしか十日歩兵第七師團及騎兵第三師團は「フレンチ」元帥の指揮下に屬するに至れり十月六日佛軍總司令官は白英軍、佛軍左翼部隊、「ダンケルク」要塞との協同動作を企畫せり

右計畫の根本思想は左記「ジョッフル」將軍の訓令の要旨により明かなり

一、獨軍に先んして北海と「リー」河との中間に於ける白耳義領土を領有せんか爲英軍を「オステンド」海岸に上陸せしめ且「アンヴェル」要塞より來れる白耳義軍をも同海岸に到著せしむること

二、英軍と白耳義軍とを「ガン」西方地區に於て連絡せしめ聯合軍正面か「リール」を經て「クルトレー」に於ける「リー」河まて延伸するを待たしむる

こと

「ダンケルク」要塞より若干小支隊を自動車或は鐵道を以て直ちに「ガン」に向ひ前進せしめ以て白軍と連絡せしむる事

此諸支隊竝既に上陸を終れる英國軍隊をして「リー」河南方に於ける獨軍交通線を脅威せしむること

三、之と共に聯合軍正面を「リー」河正面迄延伸せんか爲「アラー」―「リーユ」地區内に招致せる佛新軍隊及「エーヌ」河畔より「リー」河畔まで輸送せる英軍主力を使用すること

此直角形的配置か一旦成立する時は敵の右翼を求むる事或は少くも海峽の方に向はんとする敵の前進を阻止すること

（千九百十四年十月六日諸軍に與へたる訓令）

是より先き「ジョッフル」將軍は九月二十九日第二軍左翼に一軍を創設し十月四日之を第十軍と改稱し此軍は「アラー」、「リー」河間に亙り行動せり次て第九軍を解散し同軍司令官「フオッシュ」將軍をして第二軍、第十軍後備師團群及「ダンケルク」要塞部隊の諸運動を統一せしめたり（十月四日）

九月下旬白軍は敵に攻圍せられたる「アンヴェル」要塞内にありき白耳義政府は獨軍攻圍に對して軍事的援助を受けん事を佛國政府に矢の如く督促せしも佛軍司令官「ジョッフル」將軍は之を拒絶すると同時に白國野戰軍を要塞外に出てしむるを絶對に必要なりと唱導せり且附言して曰く

『白耳義軍の要塞より脱出して東方より西方に向つて運動する間其側面及背面を掩護せんか爲英、佛兩軍は既に出發せり』と

卽ち英國海兵八千は「アンヴェル」に到著し佛國海兵六千は「ダンケルク」より「ガン」に輸送せられ英國歩兵第七師團及騎兵一個師團は「オステンド」附近に上陸せり而して此諸兵力は悉く「ローリングソン」將軍の指揮下に置かれたり

白耳義政府は佛總指揮官の意見に同意し「アンヴェル」要塞陷落後二日を經たる十月十一日白軍は萬難を排して「オステンド」、「ニューポール」、「ディックスミ

ュード」、「トルート」地帶内に到著し其後衞は敵の爲退路を遮斷せられ已むを得す和蘭國内に逃入せり然れとも「ローリングソン」將軍の諸隊は適時に「ガン地區内に到著して白軍の退却を援護するを得たり

此時以後英、佛、白三軍は相連合して密接なる協同動作に出てんとし白國王は白國軍隊の指揮に關して喜んで佛軍總指揮官の諸訓令を受くるに至れり白耳義軍の戰場到著は英佛軍の爲大なる影響なしと雖精神上には大なる威力を添へたるものの如く白耳義本國は倫敦條約(註)に依り一層結合せる聯合國の實力に信賴し相共に最終勝利を得るまて戰はんとする意志を表示するに至れり

註、倫敦協約の内容次の如し

千九百十四年九月六日付公報

倫敦協約

今朝外務省に於て次の如き宣言に各聯合國は署名せり曰く

各本國政府の正式代表者は次の宣言を爲さんとす卽ち英國、佛國及露國政府は現戰爭間單獨講和を爲さんとすることを相約す講和條件を討議する時には三國政府は各同盟國と豫め打合せを爲したる後にあらされは此條件を決定せさる事を約す

外務大臣　「エドワード・グレー」

佛國大使　「ポール・カンボン」

露國大使　「ベケン・ドルフ」伯

此間聯合軍は「アンクル」川より「リー」河まて其正面を延伸せんか爲十月の前半箇月を費したり十月初旬佛軍九個師團、騎兵二軍團は「アラー」、「ランス」及「ラバッセエ」附近に赴き十月七日佛軍騎兵及後備軍隊は漸次「リール」、「エステール」、「メルヴィーユ」、「ハーゼブルック」、「カッセル」線上に一の掩護陣地を設置し其保護下に於て英軍諸師團(「エーヌ」正面より招致せる)を下車せしめ得へしと信したり英軍主力の「ソアッソン」より「アルトア」及「フランドル」方面への輸送は十

月五日より十月十八日まで繼續し戰線後方に於ける鐵道は英軍の爲專用せられ佛軍の輸送は一時中止するの已むなきに至れり

而して英軍總司令官「フレンチ」元帥は一先つ移送せられたる英軍を集結したる後參戰せんことを欲したるも佛「フオッシュ」將軍は英諸團隊を下車するに從ひ直ちに參戰することを督促し其承任を經るに至れり

英佛軍は斯の如くして兵力を轉送し其主力を「リー」河南方に集中せんとせしに獨軍は「リー」河と北海との中間に於て決戰を求めんとせり

第三期

「イープル」會戰

海に向ふ競爭　第三期

此期は十月十五日「イープル」會戰までにして當時獨逸大本營は翌千九百十五年春季東方戰場に於て一大攻勢を企圖し之に優勢なる兵力を使用せさる可からさるを以て西方に於ては領有せる地歩を確保するを以て滿足せさる可からさりしも情況之を許せは佛國北方及白耳義國內に成るへく廣く地歩を領有し「カレー」に突進せんとし先つ白軍を擊破したる後英、佛兩軍を分斷せんと企圖せり之か爲獨軍の作戰計畫左の如し

第六軍（十個師團）は「ムナン」以南の線に在りて守勢に立ち新第四軍（二十個師團）の來著を待ち豫備隊第三軍團は概して第四軍の右前方に位置して軍の集中を掩護す

第四軍は豫備第三軍團の掩護下に集中を終り第六軍と策應し進んて敵を攻擊す

十月十四日豫備第三軍團の海岸に沿ふ前進を以て戰鬪を開始し十一月十五日に至る間所謂「イープル」會戰を惹起せしも聯合軍も善戰之を拒止し遂に獨軍の失敗を以て終り千九百十四年末戰線は瑞西より白國海岸に亙り連續せる一線を構成するに至れり

此間白軍は「ディックスミュード」、「ニューポール」間を、英軍は「ラバッセー」以北の地區にありて防戰し佛軍は白耳義支隊を派遣して英軍を增援せり本會戰は英軍を主體とする戰鬪にして英軍司令官「フレンチ」と佛軍左翼指揮官「フオッ

シュ」將軍との連絡は極めて圓滿に進捗することを得たり

「フレンチ」將軍は其戰爭報告に記述して曰く

「フオッシュ」將軍は古今の名將なり體軀倭小なれとも筋骨逞ましく其炯々たる眼光と温情掬すへき表情は誠に人をして一目彼の力を想倒せしむ彼の戰機を窺ふ實に電光の如く兵を用ふる鬼神の如くにして變通耳目を覆ふの暇なし彼の標語は攻擊にして彼の氣宇に感鳴し全軍の意氣衝天す彼は「ナポレオン」に私淑し人をして轉た大奈翁再來の感を起さしむ

個人としても予は彼の助力を仰きしこと少なからす又其協同を受けたること多し彼は大膽にして勇敢活達にして機略縱橫なりと

卽ち「フオッシュ」將軍の英國に對する好感は既に開戰の當時よりありたるものにして千九百十八年三月彼を聯合軍總司令官に推戴せるに至る故なきに非さるなり

「マルヌ」會戰以後「イープル」會戰に至る英佛軍の聯合作戰を觀察するに英軍は「マルヌ」會戰以後獨逸軍を追擊して志氣大に振張し且東方方面に於ては露軍の戰勝ありて獨軍は早晩兵力を東方に移送すへき運命に迫れることを豫知すると「カレー」附近を領有すると否とは英本國の死活問題たるを以て戰鬪を眞面目に實施せさる可からす加之「イープル」會戰に對する佛軍の指揮官「フオッシュ」將軍と英「フレンチ」將軍との意見は全然一致せり是れ本會戰に於て英、佛兩軍の協同を良好ならしめし原因たり之を國境會戰より「マルヌ」會戰間に於ける英佛聯合作戰に對比せは其進歩の著しきこと霄壤の差あり而して「アンヴェル」要塞救援問題に關し英政府と英軍總司令官「フレンチ」將軍との意見相一致せさるに反し佛國政府及佛軍司令官と英「フレンチ」將軍との意見相圓融せる所に奇異の現象を呈せり

第六章　自開戰至千九百十四年末　露對英佛軍聯合作戰（附圖第三參照）

開戰より千九百十四年末に至る間主作戰は西方戰場に於て施行せられ英佛軍

は國境會戰に於て不利の戰鬪を交へたりしか九月初旬「マルヌ」會戰に於て戰勝を獲得し獨軍の突破を免れ「エーヌ」河の線に向ひ獨軍を追擊し十月、十一月の頃「イープル」(「フランドル」ニ)會戰を惹起し千九百十四年末に至り戰線は瑞西國境より北海まで連續するに至れること前章記述の如し此間東方戰場に於て露軍か聯合作戰の見地上如何に英佛軍の作戰に策應協同せしやに付き說述する所あらんとす

開戰當時に於ける露軍作戰計畫及集中

露軍は最初獨軍か其主力を東方に使用すへきことを顧慮し其集中地を「コヴノ」、「グロドノ」、「ブレストリトウスク」、「ロヴノ」の線に豫定して戰略的持久戰を爲すの方針なりしか獨軍か其主力を西方に集中するを知るや波蘭方面に其集中地を躍進し獨軍主力の東方に反轉し來らさるに先たち墺匈軍主力を各個に擊破し以て「ガリチェン」を席捲し且有力なる一部を以て東普方面の獨軍に大打擊を與へ先つ兩側の煩累を除去して他日「シュレジェン」に進入せんか爲約二十四個軍團の兵力を六個軍に別ち東普方面の獨軍に對して第一(約四個軍團)、第二軍(約五個軍團)を「ウイルナ」及「ナレウ」兩方面に集中し以て第十軍(約四個軍團)を更に該方面に輸送し之を西北正面軍司令官の隷下に屬し又「ガリチェン」方面の墺軍主力に對し露軍の主力計十五師團卽ち第四(約三個軍團)、第五(約四個軍團)、第三(四個軍團)、第八軍(四個軍團)を西南正面軍とし「ルブリン」、「ホルム」、「ロヴノ」、「プロスクロウ」附近に集中し次て第九軍(約三個軍團)を「イワンゴロード」附近に集中して自餘の諸軍と相俟て墺國軍を「サン」河以東の地區に包圍せんとす

而して高加索方面に於ては土耳古の嚮背を顧慮し一個軍團と一騎兵師團を配置せり

開戰の當初露、佛兩軍司令部は豫め協定せる作戰計畫に基き確定せる各任務を遂行せるに止まり單に敵の兵力配備及其行動に關する情報を交換し沈默の裡に作戰を實行せり

千九百十 千九百十四年八月二十四日英軍及佛第五軍の退却開始當日佛國駐在露國武官

「イグナテイエフ」將軍は當日迄の西方戰場一般の情況特に獨軍主力の白國中立を侵犯して佛國内に侵入する情況を電報したる後其結論に述へて曰く

一般の情況竝戰鬪の性質より推斷し近き將來に於て佛軍か攻勢に轉し得へしとは思はれす漸次退却するものと豫期せらる此際戰爭の成果は一に此近き週間に於ける露軍の積極的行動に依り獨軍兵力を露戰場に牽制移送せしめ得るや否やに關するものと思考せらる

英軍は依然最後の勝利を確信せるものの如く同時に露軍の協同を期待しつつあり

右報告の要點は既に佛軍の積極的行動を期待し得さるへく戰鬪の勝敗は一に露軍か能く獨軍兵力を佛軍正面より牽制轉用せしめ得るや否やにありと云ふ彼の判斷なりしなり

是に於て露軍は西方英佛軍の作戰に策應する爲速に攻擊前進を開始し第一軍は「スワルキー」地方より八月十七日東普に進入し第二軍は八月十九日「ナレウ」河谷を前進せり而して墺軍に對しては主力を以て攻勢を實施し先つ墺軍を擊破したる後軍主力を獨逸正面に指向し以て獨軍兵力を東方に牽制し西方英佛軍に協力せんことを企圖せり

露軍の東普進入は著しく獨軍を脅威し之か爲獨軍は巴里攻擊の眞最中其右翼方面より東方戰場に二個軍團以上の兵力を割かさる可からさるに至らしめ又墺軍に對する露軍の戰勝は對塞方面に使用せる墺軍兵力中二個軍團を「ガリチエン」方面に轉用せさる可からさるに至らしめたり

獨軍か「マルヌ」會戰に使用すへき兵力中二個軍團を東方に轉用したることか作戰全般に如何なる影響を與へたるやは明確ならさるも決戰時機に於ける獨軍か二個軍團の兵力を抽出したるは獨軍の爲一大苦痛たりしは明瞭なり

九月六日「マルヌ」の決戰に先たち露「ダニロフ」將軍(大本營幕僚)は露國駐佛武官「イグナティエフ」將軍に打電して曰く

『吾人は露軍正面に獨軍兵力を移送せしめたる事項を確報することを喜ふものなり之に依り佛軍の情況は輕減せられ適當なる積極行動に出つることを

得るならん右の要旨を「ジョッフル」將軍の總軍司令部へ傳達せられ度し』

右電報は實に佛軍の危機に際する露軍の救援及「マルヌ」の戰捷と露軍の作戰行動との間に緊密なる連繫ありしことを最も明瞭に證明するものなり然るに露第二軍は八月下旬「タンネンベルヒ」附近に於て大敗し東普を撤退せさるへからさるに至り露軍の佛軍に對する協同は十分に實施せられす又西方戰場「マルヌ」會戰に於て佛軍は赫々たる戰勝を得たるも獨軍は整然たる秩序を維持しつつ退却し依然戰鬪を繼續するの能力を有し英佛軍は尙西方戰場に於て脅威を感しつつあり卽ち「ジョッフル」將軍か九月中旬に露國大本營に對し速に露軍の攻擊前進を起さん事を希望し來りしに徵しても明かなり

在巴里露國大使「イズウォリスキー」は露佛兩軍の協同問題に關し露國大本營に電報して曰く

露佛聯合軍は目下次の如き狀態に在り卽ち佛軍は獨軍兵力の六分の五に對して攻擊し露軍は最近の公電に明かなるか如く獨軍の六分の一と對抗せるに過ぎさるも露軍は獨、墺の二敵に對抗するものにして特に墺軍の如きは殆と其有する兵力全部を露軍正面に傾注しある情況なり然るに墺軍に對する露軍の勝利は佛國民を歡喜せしめたり而して彼等は之に依り將來必す獨墺匈國に對してのみならす獨逸帝國に對しても露軍の大捷を豫期しあり一般民衆及軍事當局も露國は墺軍方面の作戰とは全然關係なく僅々六分の一の獨軍兵力に對し其不利なる形勢を容易に挽回し得る能力を十分に有するものの如く確信しつつあり之か爲獨軍方面に露軍の兵力を增加すること必要なり特に戰爭の初期なるを以て然りとす然るに露國は目下羅馬尼、土耳古の中立と日本の聯合軍加入に依り甚た有利なる情況に在るにも拘らす其兵力を獨軍正面に傾注せさるものの如し

尙露、佛間に誤解の發生すへき危險あることを最後に指摘して曰く

以上述へたる外尙玆に一大警告を敢てする所以のものは漸次增大しつつある露、佛間の隔意に就き默視する能はさるを以てなり今日佛國民は獨逸の大

軍を殆と佛軍獨力を以て支持せるものと確信せるを以て自然露國の態度を誤解し易し此際速に此誤解を一掃し佛國民をして必す露軍は鋭意其兵力を獨軍の正面に増大しつつあるものと確信せしめさる可からす然るに露、佛兩軍總司令官相互意志の疏通は是迄遺憾なから缺除せりと

右の電報に依れは佛軍は「マルヌ」會戰後依然として作戰上最も困難なる情況に在り故に專ら露軍の攻勢に依り救援せられんことを期待し努めて露軍統帥部を刺戟せんことを企圖せる事明瞭なると同時に露國大本營も佛軍の懇請に對し全幅の注意を加へ英佛軍の苦境を輕減する爲成し得る限りの努力を致せるものの如く九月十八日露軍總參謀長「ヤヌウシュケウキッチ」は「ジヨッフル」將軍に打電して曰く

露軍は近く墺軍正面に集中したる兵力の大部を獨逸正面特に獨軍の痛痒を感する方面に指向せしめ得へし但之か爲豫め墺軍を擊滅して我か左翼及背後を安全ならしむる必要ありと

「ヤヌウシュケウキッチ」は更に附言して曰く

獨軍正面に對する露軍の兵力を増大することに極力努力しつつあり現に亞細亞方面より成し得る限りの兵力を此正面に招致しつつあり高加索軍團二、「トルキスタン」軍團一、西伯利軍團二は既に戰場に到著せり更に西伯利軍團二を増加せんとするも西伯利鐵道の輸送力に制限あるを以て迅速に進捗せすと

露軍總參謀長の與へたる右電報は佛國に對し最も良好なる印象を與へたるものの如し九月二十一日駐露佛國大使「パレエログ」は佛國外務大臣「デルカッセ」の電報を露國大本營に傳達せり之に依り佛國政府か如何に露國との軍事協同に重きを置きたるかを察知し得へし卽ち

佛國政府は「ニコライ」大公殿下の案卽ち墺匈軍の敗滅を見たる曉に於て露軍は躊躇することなく爲し得る限りの兵力を以て伯林を衝く計畫なるを知り無上の滿足を表するものなり佛軍も亦決して其追擊を國境及「アルサス・

ローレヌ」に制限することなく貴軍と相呼應して前進を繼續せんとす聯合國政府か永久の平和を保證するに足る新制を歐洲に布き得るまては其進擊を中止せさるへしと

獨軍の開戰と同時に一擧佛軍を屠らんとする放膽なる計畫も「マルヌ」の一戰に於て失敗し作戰豫期の如く進捗せすして「エーヌ」河の線に後退し西方戰場は漸く沈靜ならんとし且墺軍は「ガリチニン」に於て敗退せしを以て獨軍は墺軍の志氣を鼓舞する爲露軍に一擊を與ふるの必要を生せり是に於て獨軍は國内及西方戰場より約二個軍團と東普方面より三個軍團を「シュレジェン」に集中し「ガリチェン」方面の墺匈軍と共に攻勢に轉せんことを企圖せり

此情報を察知せる露軍總司令官は墺軍を擊破したる後伯林を衝かんとせる計畫を變更するの已むなきに至り先つ獨軍の企圖に對抗する爲其配備の改變を必要とするに至れり是に於て露軍總參謀長「ヤヌウシュケウヰチ」は「ジヨッフル」及「キッチナー」兩將軍に電報して曰く

「ガリチェン」方面に於て墺匈軍を擊破し一部を以て之か追擊に移りたる當時露軍は「ブレスラウ」及「ポーゼン」中間地區より獨逸國境を越えて進入し獨軍に一大打擊を加へんか爲我兵力を專ら「ウヰスラ」左岸地區に集中せしめんことを企圖せり然るに此時獨軍か「ガーリッシュ」―「チェンストホフ」―「オリクウシュ」の正面に大兵力を集結せんとする情報に接したり該情報は獨軍か八月二十八日西方より東方へ向け盛んに軍隊輸送を實施せられたる事實と符合す諸情報を綜合するに獨軍の大兵團か「シュレジェン」方面より攻勢に轉し來ること確實となりたるを以て我軍は此正面に於て獨軍を擊破し進んて伯林に向ひ追擊を試みんか爲新なる正面に集中を開始せりと

而して「ヤヌウシュケウヰチ」將軍は更に佛軍の疑懼を一掃するの必要あることを感し述へて曰く

一般に我軍正面の情況は將來獨逸國内に進入すへき任務を遂行するに便利なり然れとも該任務遂行は極めて困難を伴ふを以て時日と忍耐とを要する

ものなりと

「ワイクゼル」河左岸露、獨國境附近に集結せし獨墺軍約八個軍團半（獨第九軍）は九月下旬其攻撃準備を完結し二十八、九日頃より運動を起し「ピリッツア」河以南の地區に於て露軍を突破せんとし墺軍亦十月四日頃に至り「ワイクゼル」河上流右岸の地區に於て前進を開始せり

露軍は波蘭方面の獨軍に對し攻勢を採るに決せしも當時東普方面に於ては作戰更に進捗せず「サン」河左岸地區に於ては追撃後に於ける隊伍の整頓中なりしを以て軍の配置に一大變更を爲すを必要と認め「ガリチェン」方面の諸軍を「サン」河右岸に後退せしめ「プルゼミル」要塞の攻圍を解き第五軍を先つ「ルブリン」附近に集結して「ワルシャウ」方面より獨軍の左翼に向つて攻勢に轉せしか爲獨墺軍は其最左翼を包圍せられ國境線に向つて退却を開始し露軍之を追撃せり

附圖第三其三參照

獨軍は十月下旬「シュレジェン」の國境線に向ふ退却間其兵力精鋭なる現役三個軍團半及東普方面より二個軍團を「トルン」附近に集結し尚西方戰場よりも約五個師團の兵力を此方面に移動し追撃前進中なる露軍の右翼に對し攻勢を取らんとす是に於て「ロッヅ」附近の會戰を惹起し中央方面に於ては露軍の配備薄弱となれるに乘し西方戰場及「チェンストホーフ」方面より「ガーリッシュ」附近に集結したる約六個師團を以て又西方戰場より「トルン」附近に輸送せられたる約九個師團を加へ十一月下旬各其當面の露軍を攻撃し露軍をして其陣地を後退せしめたり此間西方戰場に於て十月十四日より十一月十六日に亙る間「イープル」「フランドル」附近の會戰實施せらる

是等事件の繼續せる十月及十一月間英佛軍と露軍司令部との間に東西兩戰線に於ける獨軍兵力の配置問題に關し盛んに交渉行はれたり千九百十四年十月十一月頃に至るや露軍正面に於ても亦大なる戰鬪連續實行せられ獨軍は兵力を漸次該方面に轉送せしめたり之か爲露軍の情況は益〻苦境を呈せしを以て露軍司令部は單に駐佛露國大使「イズウォリスキー」及大使館武官「イグナティエ

フ」將軍をして巴里に於て直接英佛軍と接衝に當らしめたる外在「ペトログラード」佛國大使及大本營附佛軍代表武官「ラギーシュ」將軍を介して佛軍は西方戰場に於て攻勢を取り露軍の危急を救濟すへく協力を求めたり卽ち「ラギーシュ」將軍は十二月佛軍總司令部に打電して曰く

露軍は「ロッヅ」地區に於て極めて猛烈なる戰鬪を交へ多大の損害を蒙むれり西方戰場より獨軍增援隊到著せるものの如し目下此以上露軍の努力を要求する事は困難なり蓋地形は開闊し而も地方の交通機關は悉く獨軍に依り破壞せられたるを以て總ての補給、補充容易ならさるを以てなり此際若しも佛軍にして速に攻擊に轉することを得は露軍として最も幸福なるへしと

是に對し佛「ジョッフル」將軍は十二月初旬駐佛露國武官「イグナティエフ」及露國大使を介して佛軍の正面にある獨軍兵力は依然五十個軍團にして東方に移動せられたる獨軍兵力は僅少なることを指摘し且之にも拘らす佛軍は全正面に於て攻勢を實施すへく計畫中なることを以てせり

開戰後露、佛兩軍間の協同連繫に苦き經驗を嘗めたる兩國は其連絡を更に緊密ならしむる目的を以て露軍司令部と他の聯合軍司令部間に特別將校を交換するに決し露軍參謀本部內に特別課を創設し佛軍將校を勤務せしめ彼我の情報を交換し連絡を圓滑ならしめたり

右の如き千九百十四年末に於ける露、佛兩高等統帥部間の連絡は遂に千九百十五年「シャンパーニュ」、「アラー」等の英佛軍の攻勢として現はれ英佛軍は東方露軍の急を救はんとせり

第七章　千九百十五年に於ける露對英佛軍聯合作戰

（附圖第四、第五參照）

千九百十五年に於ける獨軍の作戰方針

千九百十五年に至り獨軍は西方戰場に於ては其戰鬪力聯合軍と略〻相均衡を保ち陣地は日に堅固の度を增せしを以て之に對し決戰を求めんとするは頗る

不利なりとなし東方戰場に於て一大攻勢を執り露軍に大打撃を與へたる後巴爾幹を席捲して自給自足の途を安全ならしめんとし西方戰場に對しては成るへく兵力を節約して持久戰を行ひ此間東方露軍に對し主作戰を向くることとせり

露軍と聯合軍との武器補充問題

千九百十四年末作戰上の問題と併行して聯合軍間の交涉は露軍軍需品補給問題に指向せらるるに至れり

該交涉は千九百十五年一月露國大藏大臣「バルク」か巴里に駐在せる際主として佛國大統領との間に行はれたり

「カルパーテン」方面の戰鬪

露軍は昨秋敗戰の創痍恢復と兵器其他資材の整備に全力を注き其占領せる陣地を益〻堅固にして他日積極的行動に出つるの機會を待ち此間一部を以て「ブコヴィナ」方面より「トランシルヴァニエン」に進入せしめ羅國をして協商側に立たしむる動機を與へんとせり卽ち約三個師團と騎兵二個師團とを以て一月上旬「ブコヴィナ」方面に侵入せしも却つて墺第七軍(約九個師團、騎兵三個師團)の爲擊退せられ其後若干の增援を得て三月中旬に至り「ブコヴィナ」北境に於て相對峙するに至る又「カルパーテン」方面に於ても露第八軍左翼「ストリー」支隊(步兵五個聯隊、騎兵四個聯隊を基幹とす)は一月十六日匈牙利內に侵入せしも獨南方軍(「リンシンゲン」軍にして十個師團)の爲に擊破せらる又「カルパーテン」方面墺諸軍は露軍を正面より攻擊したるも三月中旬に至る迄大なる成功を見す

千九百十五年「マツール」冬季作戰

東普東國境方面に於ては昨冬來露約十一個師團は獨約八師團と相對峙し在りしも獨軍は國內及西方戰場より約八個師團を增加して第八、第十の二軍に分ち總兵力約十四個師團を以て一月八日より露第十軍(約十一個師團)を兩翼より攻擊して之を東南方に壓迫し二月二十日露第二十軍團(三個師團)を「アウグスト」森林に於て殲滅し殘餘を「ボーブル」左岸に擊退せり爾後此方面の露軍振はす獨軍は四月下旬「ベロー」軍(騎兵六個師團、步兵三個師團)を以て突如「クールランド」に進入し露軍の大なる抵抗を受くることなく「リガ」方面に前進せり

右の如く東方戰線に於ける露軍一般の情況は獨軍の攻勢に依り極めて困難となれり二月二十一日露「ダニロー」將軍より「ジョッフル」、「キッチナー」兩元帥に此變化せる情況を通告する爲巴里及倫敦の露軍事特派員に宛て發したる電報に曰く

一月下旬獨軍は露軍正面に其兵力を著しく增加せり其一部は新編成部隊にして一部は西方戰場より鐵道を利用し東普魯西及東部「ガリチェン」正面に集結することを得せしめたり尙東部「ガリチエン」戰場には「セルビヤ」戰線より移送し來れる墺軍の大部隊到著せり此等新集中部隊は露正面の兩翼に向ひ眞面目なる攻擊を實施せんことを目的とするものにして尙其主攻擊は東普魯西方面より實施せられたり

此方面に於て露軍は遺憾なから失敗せり而して新情況は露軍をして兩翼を强固ならしむる目的を以て兵方の移動集結を實施せさる可からさるに至りこれと同時に又「ウヰスラ」河左岸の露軍兵力を薄弱ならしめさるを得さるに至れり

佛軍の「シャンパーニュ」附近の攻勢

之と同樣の意味を露軍總司令官は在露聯合軍代表武官にも發表せり

東方戰場に於ける露軍は一月下旬以降「ブコヴイナ」地方に「ワルシヤウ」地方に又「マヅール」地方に到る所獨、墺軍の爲壓倒せられつつあり玆に於て聯合軍は「シヤンパーニュ」地方に攻勢を採り以て獨軍を牽制せんとし佛軍は二月十六日より同地方に約十個師團を集め合計二十三個師團を以て一擧に獨軍第一陣地帶を占領せしも第二陣地に會して攻擊進捗せす三月上旬兩軍の兵力略〻相匹敵するに至り戰鬪は自然中止するに至れり此攻擊は實に露、佛兩國間に於て千九百十四年末以來協同作戰の目的を以て互に通報を重ね佛軍か露軍の急を救はんとする精神に出てたる結果なるも其協同たるや全く申譯的のものにして東方露軍の急を救ふ能はさりき

英、佛連絡將校の露國到著

英國「バヂット」將軍は二月中旬佛國「ポー」將軍は三月上旬露國大本營に到著し露軍對自國軍間の連絡に任せり右兩將軍は共に其本國に報告せる處を見るに

露軍の狀況は決して樂觀を許さず英、佛軍の攻勢により露軍正面の獨墺軍を他戰場に牽制することは刻下の急務なる旨を以てせり

英軍の「アラー」附近の攻撃（附圖第五參照）

英軍も佛軍の「シャンパーニュ」地方に於ける攻勢の爲白軍正面の獨軍減少せるに乘し三月九日約四個師團を以て「アラー」北方「ニューブ・シャペル」附近の獨軍陣地を攻撃したるも獨軍第二線陣地の爲拒止せられ大なる成果なし爾後三月二十六日佛軍は「ヴオゲーゼン」山中に四月上旬「ヴェルダン」東方より「サンミエール」を經て「ポント・ア・ムーソン」に亙る正面に小なる攻撃を加へたるも情況遂に發展するに至らず四月後半期獨軍は却て「イープル」、「アラー」兩方面及「ヴオゲーゼン」方面に攻勢を採り聯合軍は常に逆襲を以て之に反撃を加へ一般の形勢には何等變化なし

露、佛、塞國軍の連絡

四月十日露大公は新に「ジョッフル」將軍の東方へ兵力移送の中止せさるを訴へ且墺軍に徹底的に一大打撃を與ふるの計畫を指示しこれか爲佛軍正面に敵兵力を抑留されたき旨懇請せりこれに對し四月十二日露大本營は「ジョッフル」將軍の左記回答に接せり卽ち

第一、開戰初期より西部戰線より東部戰場へ十四個師團の移送せられたることは確實なり同樣に近衞騎兵師團及三個騎兵師團の三月下旬西部戰場を去りたることも亦事實なり尙「ババリヤ」騎兵師團も之に續ひて最近出發したるか如し第四十一軍團は三月八日より西部戰場を撤退せり諸種の情報を綜合するに該軍團は「ミュールハウゼン」を通過したるものの如し但第五軍團は其大部分「ヴェルダン」南方に現存すること疑ひなし其內移送せられたるものありとするも多くも一個師團（三個聯隊）を超へさるへし

第二、露軍と協同する目的を以て我軍は每回其餘裕ある兵力を擧けて攻撃を實施し爲し得る限り獨軍を西方正面に抑留することに努力せり獨軍陣地は頗る强固に編成せられたるを以て之を攻撃する爲に吾人は有ゆる手段方法を講せり（卽ち火砲彈藥の補充をなして）四個軍團を以て開始せら

れたる「シャムパーニュ」方面の攻撃は一個月半餘に亙り敵の兵力約五個軍團を該方面に抑留せり同樣の攻勢運動は目下「ヴェルダン」方面に於て實施せられつつあり而して之か爲使用し得る兵力全部を擧けて之に參加せしめたり

第三、千九百十五年の召集兵竝必要なる彈藥の製造に依り吾人は約五個師團に等しき兵力の增加を見たるを以て英軍と協同して一層大規模の作戰を企圖し得るに至れり「フレンチ」元帥は增援隊の到著に依り更に英軍負擔正面を延長し得るを以て之に依り新たに佛軍二個軍團の餘裕を得たり「フレンチ」元帥との合意の上三週間後に於て强大なる攻擊を開始する爲諸準備に著手せり

第四、此攻勢は更に露軍の南方正面に於ける新攻擊のみならす尙「セルビヤ」軍の攻勢移轉を見は益〻其結果顯著ならんと推測せらる「ニコライ」大公殿下は隨時「セルビヤ」軍に對し攻勢移轉を勸誘し得るものと愚考す

第五、我軍側としては若伊國か參戰に決する曙に於ては夫れと協力すへし

第六、若しも豫期の如く各戰場の攻勢を統一し得るに至らは(斯る協同は困難ならさるものと思考す)其結果各戰線一齊に攻勢に轉し得へく其效果は蓋し甚た偉大なるものならん予は此總攻擊に依り先に露軍及其將帥の勇敢なる行動に依り獲得せる「カルパーテン」方面の成功をして一層完成せしめ得るものなることを期望して止まさるものなり

「ニコライ」大公は「ジョッフル」將軍より右の通告を得たるを以て更に塞國皇子「アレキサンドル」に宛て打電し塞國軍をして他の一般の攻勢移轉に參加することを懇願せり卽ち四月十七日露大本營發塞軍宛電報次の如し

『今日の一般戰略狀況に顧み予は其統率する軍隊をして漸次「カルパーテン」方面の攻勢を擴大し以て墺軍を徹底的に擊破せんとす

是れ他日露國のみならす全聯合國にとり重要なる意味を有す本計畫をして成功せしむる爲には敵をして他戰場より東方戰場に其兵力を移送せしめさ

ること肝要なり換言せは露軍の攻勢と同時に他の聯合軍は一齊に攻勢に出つることを必要とす予は此意味に於ての協同を英、佛軍總司令官に懇請せるに早速必要なる積極的作戰を約束し來れり若しも露軍及英佛聯合軍と同時に「セルビヤ」軍の攻勢を見は敵を震駭すること蓋し疑を容れす而して「セルビヤ」軍の此攻勢移轉は極めて困難なることは能く承知せるも三戰場同時に攻撃を開始することは最も速に戰勝を獲得する上に甚た重要なる意義を有するものなるを考へ玆に貴官に對して積極的行動に出てられんことを切望して止まさるものなり而して是迄壜軍か「セルビヤ」正面より大部の兵力を「カルパーテン」戰場に移送したる事實に鑑みる時は右「セルビヤ」軍の攻勢移轉も又從來に比し容易なるものの如く信せらる』

前記の交涉を綜合觀察するに露軍司令部は當時聯合軍側の援助に對し尙飽き足らさるものの如く卽ち獨軍の主攻撃を東方に指向せしめし所以は英、佛軍の負擔を輕減したるものなるを以て之に依り露軍は戰略的任務を達成せるものなり開戰より「マルヌ」會戰前後獨軍主力の西方に向ふや英佛軍は露軍に協同の目的を以て攻勢に出てんことを哀願し露軍又獨軍の重點東轉して露軍自身の苦境に瀕するや聯合軍の協同攻撃を英佛軍に哀願すこれ各國自己の利害關係より出發するものにして自己國軍を犧牲として他國軍に協同する如き作戰の到底行はれさるを敎うるものなり然れとも尙自己正面の戰況有利にして餘裕の存する間は多少協同作戰の成果を擧け得ることあり

獨軍は千九百十五年初頭以來東方戰場に主作戰を導き露軍に打擊を加へつつありしか更に西部「ガリチエン」、「ノイサンデック」附近に新銳なる十個師團、重輕砲四百五十門を集中し五月一日より露國第三軍正面の一部「ゴルリッツ」附近露軍四個師團砲百二十門の正面(三十五吉米)に向つて攻撃を開始し四日第三線陣地帶を突破したるを以て「カルパーテン」方面の露第八軍は其側背に危險を感し第三軍と共に「サン」河の線に向ひ退却し獨墺軍は之を急追して露軍に大損害を與へ十四日概して「サン」河左岸の線に達し十九日迄に「プルセミス

獨墺軍の「ゴルリッツ」突破間に於ける露對英佛軍の交涉

ル」以北「ラジムノ」、「シーニヤワ」間約三十吉米の正面に於て「サン」河右岸に地歩を占め露軍は他方面より約十七個師團の増援を得て「サン」河下流地區より墺第四軍に向つて攻勢に轉せしも奏功せす獨墺軍は一時其攻撃を中止して次回の攻撃を準備するに至れり

右の戰況により五月五日「ニコライ」大公は「ジョッフル」將軍に通報して曰く敵は新に西方戰場より東方戰場に少くも四個師團を移送せり又「ガリチエン」方面の「ドウナエツ」―「ゴルリッツ」正面に於て此外に尚多數の軍隊を集結し得たるを以て兵力上の優勢を占め且敵は其砲兵及彈藥に於ても亦遙かに露軍を凌駕せるを以て勢ひ戰術上有利の地位にあり之か爲露軍は其正面を短縮し到著せる豫備隊と合一する爲若干東方に向ひ退却し豫定の陣地線を占領せり廣大なる露軍正面の一部に於ける敵の一時的成功は貴官の約束せる西方戰場に於ける決然たる攻勢實施竝佛國政府の約束せる必要彈藥を早速送付せらるに於ては作戰一般の進捗に大なる影響を及ほさざるへし敵の

成功を局限する爲必要なる手段は悉く講せられたり

但其實施を見る迄には尚時日を要するなるへし

右と同樣の電報は又「キッチナー」元帥にも送付せられたり聯合軍は五月上旬露軍の形勢日に非にして加ふるに久しく協商側に立て參戰せんとする伊國の態度尚逡巡たるものあるを見西方戰場に一攻勢を開始し以て露軍の急を救ふと共に伊國の參戰を速かならしめんとせり之か爲英佛軍の攻勢準備は益〻整備せらるるに至れり

佛軍の「アラー」附近の攻勢

五月九日佛軍は東方の戰況を緩和する目的を以て佛第十軍(當初六個師團後十個師團を增加し計十六師團)をして「アラー」北方地區に斷然たる攻撃を實施せしめ數個の獨軍據點を占領したるも堅固なる陣地に對する攻撃としては其規模小なりしと獨軍の適切なる逐次の兵力移動と相俟つて戰線突破の目的を達するを得すして再ひ相對峙するに至れり

五月十日附「ジョッフル」將軍の電報に曰く

曩に通報せる佛軍の攻勢は昨五月九日「アラー」北方地區に於て開始せり
只今迄に佛軍は七吉米の正面に亙る敵の第一、第二防禦線を占領せり佛軍の
獲得したる俘虜二千以上に達し砲六門及機關銃多數をも鹵獲せり
西方戰場に於て聯合軍の攻勢移轉を見たるに拘らず露軍正面に於ける獨軍の
壓迫は依然繼續せられ露軍正面の情況は聯合軍司令部に大なる恐怖の念を惹
起せしめたり五月中「キッチナー」元帥は在「ペトログラード」英國大使館を經て
露軍司令部に通報して曰く
予は「カルパーテン」及西部「ガリチエン」の作戰を特別の注意を以て觀察しつ
つあり獨軍は伊太利の參戰を顧慮し外交目的を達成せんか爲該方面に於て
最後の努力を試むるものの如し予は殿下竝露國軍隊に協力する爲何を爲す
へきやを伺ふものなりと
其餘白に露「ダニロフ」將軍は手記して曰く
『小銃彈藥を懇請することは極めて希望する處なりと思惟せらる』と

露「ニコライ」大公は此質問に答ふる爲一般情況を說明し更に獨軍の露軍正面
へ軍隊移送をなすことに就き聯合軍の注意を喚起する必要ありと信し五月十
三日附「キッチナー」及「ジョッフル」元帥に宛て左記電報を發せり
四月及五月中に獨軍は更に露軍正面へ少くも步兵七個師團(正確に數ふれは
寧ろ十一個師團)騎兵三、四個師團を移送せり敵は「ドウナエノッツ」及「ゴルリ
ッツ」方面に多數の軍隊殊に砲兵を集中し我第三軍に對して攻勢を採り成功
を收めたり第三軍の損害は甚大なるも吾人は「サン」河の線を保有せんこと
を期す西方戰場に於ける獨軍兵力の減少せるに依り英佛軍の協同は最も猛
烈且不斷の攻擊を實施し得へし
戰爭の當初より露軍正面に於ける敵の野砲及豫備步兵師團の數は九個師團
より三十八乃至四十二個師團に增加し騎兵師團數又一個師團より九乃至十
個師團に增加せり
此兵力增加は少くも步兵聯隊八十乃至九十及騎兵聯隊四十八乃至五十四に

達せり而して是等は悉く西方戰場より轉用せるものなり

之に反し一度露軍正面に現出せる獨軍は露軍の活動に依りて一部たりとも之を西方戰場へ移送すること能はさりき從つて將來獨軍の露軍正面に對する兵力轉用を不可能ならしむることは最も希望して已まさる所なり之と同時に又伊太利をして其行動開始を迅速ならしむることは吾人の大に希望する所なり吾人に必要缺くへからさる問題は成るへく速に銃砲彈小銃の補給を受くるにあり我第三軍失敗の主要なる原因は實に此砲彈の不足に原因す露軍他正面の陣地は悉く堅固なり

之に對し「キッチナー」元帥は電報を以て答へて曰く

英佛軍は目下攻擊繼續中にして既に若干の進出を見たり大公より依賴せられたる彈藥は速かに送附するため熱心に其方法を講しつつあり

「ジョッフル」將軍も又別に露軍に對し深き同情の意を表し露軍の爲出來るだけの支援をなすへき旨を述へて曰く

最近數週間に於ける南方露軍の偉大なる努力は深く吾人の賞讃措く能はさる處なり露軍の勇敢にして靱強なる行動に依り遂に敵の突破を防止し優勢なる敵に對抗して之に多大の損害を與へ以て戰爭一般事業に偉大なる貢獻をなせり之れ實に露軍の名譽にして光輝ある歷史の一頁たらすんはあらず……此奮鬪と伊太利軍の活躍とに依り吾人は赫々たる結果を期待し得るに至れり予は又英、白軍との協力に依り最善の努力を期するものなりと

此電報最後の餘白に露「ダニロフ」將軍は『古き歌』なる文句を手記せり

當時「ジョッフル」將軍も又「キッチナー」元帥と同しく軍需品の送付を迅速ならしむへき處置をなすことを約せり

「ゴルリッツ」突破以後八月に至る間東方獨軍の攻勢

獨墺軍は伊國か五月二十三日協商側に起ちたる結果時機を遷延せは挽回すへからさる情況に至るへきを察し「ガリチエン」方面の戰勝に乘し露軍を擊破して作戰初期の目的たる一大打擊を與ふるを緊要とし伊太利參加の翌日未た攻城砲全部到著せさりしも「ガリチエン」方面の諸軍を以て攻擊を開始す

獨軍は六月二日「プレスミル」要塞を奪取し露軍は逐次其戰線を後退し「ガリチエン」方面の第三、第八軍中より「オルロフ」兵團(約八個師團)を集成して「レンベルグ」北方地區に於て獨墺軍の前進を阻止せんとせしも獨墺軍は六月十九日之を突破し北方及東方の二方面に分斷し益〻猛烈に之を追撃せり

獨墺軍は今や「ガルチエン」方面に於ける戰勝に依り一方露軍の實力大に衰耗せるを認めしと他方西方戰場に於ける英佛軍の攻勢又挫折し更に後顧の憂なきに至りたるとに依り益〻露軍を窮追し兩翼より之を包圍して「ナレウ」、「ワイクズル」河線の諸要塞を奪取し露軍を玆に殲滅するか若くは不幸之を逸するも之に大打撃を與へんとせり

七月十三日「ナレウ」正面獨軍約十四個師團は略〻同等の露軍を攻撃して「プルツスク」、「ロザン」二橋頭要塞を奪取し將に南方「マッケンゼン」軍と相俟て「ワルシヤウ」の背後に迫らんとし波蘭方面の獨軍亦正面より殺到するあり爲に露軍統帥部は八月一日斷然全線を「コウノ」、「グロドノ」、「ブレストリトウスク」の要塞線に退却するに決す斯くして「ワルシヤウ」、「イワンゴロード」の二要塞は五日遂に獨軍の爲に占領せらる

「クールランド」方面に於ては獨「ベロー」軍の攻撃著々進捗し露軍を「ドユナ」河の線に壓迫せんとし又東普東國境方面に於ては八月十七日「コウノ」要塞陷落して露軍は右翼の據點を失ひたるか爲第二線要塞は續々獨軍の爲に占領せらる

九月上旬露帝親征して總司令官「ニコラス」大公と交代せしも頽勢を挽回するを得す同月十八日遂に「ウイルナ」を失ひ兩軍の戰線は附圖第四の如き線となりて東方戰地の作戰は玆に一段落を告くるに至れり

獨軍は玆に其鋭鋒を巴爾幹方面に導く爲九月七日頃より「マッケンゼン」將軍に五個軍團(九個師團)を指揮せしめ塞國方面に向つて輸送を開始し次て巴爾幹を席捲せり又別に西方戰場「シヤンパニユ」會戰の爲九月下旬より十一月上旬の間に約十三個師團を西方戰場に移動せり

「ゴルリッツ」突破後東方戰場に於ける獨軍の突破間露「ニコライ」大公「キッチナー」、「ジョッフル」兩將軍間に數度の交涉行はれ露軍は東方に續々獨軍兵力の轉送することと露軍の苦境を陳述して英佛軍の攻勢を希望し英佛軍殊に佛軍は西方正面に却つて獨軍の兵力增加せる事實を揭けて必すしも東方にのみ獨軍の兵力增加せるものならさるを立證せり當時英佛軍側より立論せは未た再攻擊の準備完成せさるを以て單に「シヤンパーニュ」、「アラー」等に申譯的攻勢を爲すより手段なかりしならん

茲に於てか危險に瀕しつつある露軍は西部戰場に於ける英佛軍の作戰進捗甚た緩漫なるの報に接し露軍大本營の不滿を倍加せり

第八章　「ダーダネルス」作戰に關する英佛露軍の交涉

「ダーダネルス」作戰問題と英國の主張

千九百十五年東西兩戰場に於ける作戰は豫期に反し戰鬪漸次持久的色彩を帶ふるに至りしを以て各交戰國は茲に長期作戰の準備に移らんとするの傾向を示せり之か爲從來閑却せられたりし巴爾幹殊に土耳古方面は戰略、政略上列國虎視垂涎の的となれり卽ち獨逸は土耳古に至る確實なる通路を求め協商國の勢力を二分し且印度及露國を脅威して以て協商國に對し戰略竝政略上打擊を與へんと欲し協商國は「ダーダネルス」を攻略し以て英、露直接の提携に依り露國の經濟的孤立を救援し又獨逸の宿望を挫折して印度の安全を圖らんとせり是を以て兩交戰國の政略及戰略上の目的は「ダーダネルス」海峽に於て交叉衝突するに至れり

千九百十四年十一月土耳古の參戰するや英國海相「チヤーチル」は外相「グレー」と共に海軍軍司令部長「フイフシヤー」の反對意見ありしにも拘はらす「ダーダネルス」海峽の西口を獲得するは政略上に於ては巴爾幹諸邦及伊國を聯合側に起たしめて其參戰を促進すると共に獨逸の近東政策を根絕し得へく戰略上に於ては君府を攻略し高架索「メソポタミヤ」及埃及方面に於ける土軍の行動を掣肘し露國と確實に相提携し得へき利益大なりと主張し遂に該作戰の發展を

見るに至れり

英國は千九百十五年初以來獨軍の爲巴爾幹を席捲せられんことを恐れ西方戰場は主として佛軍に讓り政略上の目的を以て「ガリポリ」方面に遠征軍を派遣せんとするの企圖を有せしものの如く之に對し佛軍總司令官「ジョッフル」將軍の意見は『露國を救援する最良策は西方戰場に於て攻勢を取るにあり』となし「ガリポリ」半島に對する單なる示威運動すら反對せり然るに英國の「ガリポリ」攻撃に關する熱心なる主張は遂に聯合軍側の承認する處となり千九百十四年十月三日約十隻の船艦を以て「ガリポリ」半島南端及對岸砲臺を砲撃せるを端緒とし爾來千九百十五年三月中旬に至る間十數回に亙り英佛聯合艦隊は攻撃を反覆せしも徒に多大の損害を蒙りしのみにして毫も土軍の勢力を挫折するを得す茲に於て該半島攻撃軍を編成して之を攻略するに決せり

本問題に關する露國の態度を觀察するに千九百十五年初以來露軍は獨の爲大打撃を蒙りたるを以て「セルビヤ」を救援し巴爾幹諸邦を協商側に立たしむる

は露軍當面の苦境を輕減すへき重要なる一手段たるのみならす獨、土の中間を突破し聯合軍主力と露國との經濟的連繫を爲すは其利益更に大なりと信せり而して當時露國か「ダーダネルス」作戰に關し如何なる見解を有せしやは千九百十五年四月二日「ヤヌシュケウヰチ」將軍の露外務大臣宛第一八六〇號海峽問題に關する文書に明記しあり卽ち次の如し

「ガリポリ」作戰に關する露國の主張

「ダーダネルス」海峽作戰の成功せる場合聯合軍該半島作戰參加兵力比率により領土分割の標準とするは斷して許す可からす戰勝の結果獲得せらるる利益の分配は實に戰爭一般目的の爲全戰線に於て各聯合軍か齎らせる處の努力と犧牲との綜合を標準とせさる可からす同時に又此等利益の分配は同盟に參加せる各國存立上の利害問題にも適合せさる可からさるものなりとす戰爭間露國は聯合國一般の利益の爲多大の犧牲を拂ひ又佛國の情況を輕減する爲東方戰場に於て少なからさる犧牲を拂へり而して戰爭開始當時我正面にある獨軍兵力は步兵九個師團及騎兵一個師團なりしも既に八月中には

西部戰線より露軍正面へ歩兵四個師團騎兵一個師團を移送せしめたり尙其後西部戰線に在る聯合軍の情況を輕減せしめんか爲其聯合國の懇請に依り露軍の行動を更に「ウキスラ」左岸に擴張するや獨軍は十一月中に西部戰線より更に歩兵八個師團及騎兵五個師團を露軍正面に移送し最近の一箇月間獨軍は新たに西方戰場より同しく我正面に野戰師團二を轉送せり從て此期間中に西部戰線より東方戰場に移送せられたる獨軍兵力は歩兵十四個師團及騎兵六個師團に達せり其他尙國內に於て新たに編成られたる獨軍歩兵師團八も亦露軍正面に使用せられたり而して今日に至る間我軍正面に使用せられたる獨軍野戰及豫備師團數は開戰の當初と比較する時は殆んと歩兵九個師團、騎兵一個師團か歩兵二十一個師團及騎兵七個師團に增加せり此間西部戰線に於ける歩兵師團數は毫も增加する處なく開戰當初と等しく七十二個師團に止まるのみならす騎兵師團數の如きは十個師團より四個師團に減したり斯くの如く露軍は獨軍兵力を東方に牽制し英佛軍をして兵力上の優

越を獲得せしめたり此際特に注意すへきは右の如く獨軍か常に其兵力を西部戰線より我正面に移送したるも未た曾て一度も我正面に現れたる獨軍の一部たりとも西部戰線に移送せられたる事實なきこと是なり露軍は其正面に使用せられたる敵を常に我正面に抑留しつつあり

開戰初期に於ける獨軍配備を考究せは今日も尙聯合軍の爲に盡せる露國の功績を明瞭に證明することを得へく從て露國は戰勝の場合に於ては露國の死活問題たるへき海峽問題に關し露國にとり有利なる解決を期待する特權を有するものなり

若しも露國か墺匈軍現役四十六個師團を露國正面に牽制し以て伊太利及羅馬尼との外交を容易ならしめ且露軍か高架索方面に於て土軍に大打擊を加へ土軍二百個大隊以上を抑留し以て獨り「ダーダネルス」方面の聯合軍の行動を容易ならしめたるのみならす埃及及「メソポタミヤ」に於ける聯合軍作戰をも容易ならしめたる露軍の功績を想起せは聯合軍一般作戰に於ける露

軍の價値は一層明瞭なるへし』と

以て聯合作戰は自己本位の議論のみ多きことを知るへし而して「ダーダネルス」遠征の眞相は實に戰爭間に於ける英、露兩國の利益獲得の爭たりしなり

「ガリポリ」半島英佛軍作戰

英佛軍（約六個師團半）は「リムノス」島を根據地として此處に上陸作戰を準備し四月十五日拂曉を期し艦隊掩護射擊の下に敵前上陸を決行せり七月二十七日に至る間「クリミヤ」附近の土軍陣地に對し四回の攻擊を實行せしも毎回若干の地步を得たるのみにして多大の損害を受け本陣地を攻略するに至らす八月初旬英佛聯合軍司令官「ハミルトン」大將は更に五個師團の增援を得たるを以て玆に總攻擊を開始したるも土軍又防戰に努め八月二十一日戰爭は多少の進展を見たるも全く持久に陷り大なる發展を見す

「ガリポリ」に於ける頑強なる土軍防禦戰鬪は「マッケンゼン」將軍の「セルビヤ」軍攻擊と關聯し聯合國側をして遂に此方面の作戰を放棄せさる可からさらしめ該撤兵問題は千九百十五年十一月「シヤンチイー」聯合軍軍事會議に於て決

定せられたり此問題に關し當時軍事會議に參列せる露國軍事代表「ヂリンスキー」將軍の左記電報に依れは該會議の內容と露國の眞意を知るを得へし

會議最終日に「ガリポリ」撤兵問題の上程を見たり本問題は既に以前より決せられたるものにして半島の兩軍は多大の損害と惡疫との爲に惱まされ然も何等の效果を齎さす英佛軍の狀況は殆んと危險に瀕するに至りたるを以て其際全部撤兵に決するか或は半島の南端に尙一部の英軍を殘置せしむへきやにあり小官は全部撤兵の意見を述へたり蓋し地中海の一角に英軍を殘置するは地中海の出口に更に第二の「ヂブラルタル」を建設することとなるを以てなり後全代表者の同意を以て全部撤兵案を採用することに決したり此間巴爾幹に於て獨墺軍は勃軍と協同して「ドナウ」河を渡り將に塞軍を席卷せんとするに至りたるを以て遂に本作戰を中止し十月より翌千九百十六年一月初旬に亙り半島上の聯合軍は全部撤退するに至り次て「サロニカ」の戰線に增加せられたり

第九章　千九百十五年に於ける英佛軍聯合作戰

（附圖第五參照）

千九百十五年初に於ける英佛軍作戰方針

千九百十四年末西方戰場は瑞西國境より北海に亙り戰線膠著して持久戰を呈するに至れり千九百十五年の爲英、佛兩國の政略上の目的は更に變することなく依然獨國の膺懲に在りしも作戰上に於ては先つ兵力及兵器、彈藥の充實を計り機を見て攻勢に轉せんとせり

而して戰爭第一年間に於て英、佛兩軍は人員、兵器及彈藥の消耗甚しきを以て先つこれか充實を企圖し次期の攻勢を準備せり

英佛軍兵器の充實

佛軍に在りては新設師團を編成する爲既設師團より兵員を抽出し之に千九百十五年兵の一部及亞弗利加植民地より招致せるものを充て千九百十五年兵の大部は第一線の補充に充當せり而して兵器、彈藥の製造就中機關銃、火砲特に重砲の增加には大に努力し優勢を占めんと期せり

英軍に在りては先つ第一に兵員の募集に苦心し廣告に勸誘に只管宣傳に努め千九百十四年十一月迄に約二百萬を召集し千九百十五年二月迄に新設三十三個師團を編成せり此間英領加奈陀、印度、濠洲及其他の植民地より正規軍隊及新募の軍隊を英本國に移送し其正規軍隊のみを以て三集成師團を作れり而して此軍備大擴張に伴ふ軍需品特に兵器、彈藥の供給には多大の困難を感したるものの如く外國より購買する外に國內の諸工場に向ひ之か製造を强要し當初は之か補給意の如くならさりしも時日の經過と共に其製作能力は驚くへき率を以て累加し爲に千九百十五年夏季以後に於ては其景況漸次良好に向へり

英佛軍の東方露軍

英佛軍の千九百十五年初期に於ける兵器充實の狀況右の如きを以て當時露軍か兵器の補給援助を聯合軍に仰かんとせしも英佛軍自身すら補充難に苦しみつつある狀況なるを以て他國の援助の如き爲し能はさるは蓋し已むを得さることなり

英佛軍は右の如く次期の攻勢を著々準備せる間獨軍は千九百十五年初頭以來

に協力する爲の攻勢

東方に其主決戰を指向し露軍は東普に「ガリチエン」に到る處獨軍の爲突破せられ戰況極めて苦境を呈し西方英佛軍の攻勢を督促すること甚た急なり玆に於て英佛軍は東方露軍に協力する爲佛軍は二月「シヤンパーニユ」に英軍は三月「アラー」北方「ニューブシヤペル」附近に又佛軍は五月「アラー」附近に攻撃を實施したること既述の如し然れとも此等諸攻勢は何れも陣地突破戰としては規模小にして單に申譯的に實施せるに過きす英、佛兩軍は依然次期の大攻勢を著々準備せり此間「ガリポリ」半島上陸作戰の發展を見該上陸作戰の失敗は遂に「サロニカ」戰線の構成を見るに至れり

千九百十五年「シヤンパーニユ」秋季戰と英佛軍の交涉

千九百十五年初以來英佛軍は次期の攻勢を著々準備中なりしか六月初旬西方戰場に於て獨軍千百十三個大隊に對し佛軍は千三百八十四個大隊、英軍三百三十個大隊、白軍八十個大隊を算し兵器、彈藥の準備も漸次進捗するに至れり一方露、伊軍より西方に攻勢を取らんことを督促せられたるを以て佛軍は此機を以て攻勢を採らんことを決心せり

千九百十五年七月十三日「ジョッフル」將軍は訓令を發し北部軍集團は英、白軍と連繫し一の次等攻撃を「アルトアー」に中央軍集團たる第二、第四軍をして「シヤンパーニユ」方面に主攻撃を實施すへく準備を命せり

六月末聯合軍「カレー」會議に於ても英國は西方戰場に守勢を採るの態度を維持せり然るに英「フレンチ」將軍は本國より輸送せる第一回增援隊を受領せしを以て「ジョッフル」將軍は此機會に乘し英軍四吉米の正面を南方「エー」―「ヌーレット」―「アングル」街道まて擴張すること及就中「ベルル」―「オー」―「ヴオア」―「コルノア」に亙る三十吉米の一線を占領しある佛軍第十一師團及第五十六師團と交代せんことを「フレンチ」將軍に請願せり（此請求は不調に終れるものの如し）

七月十一日「ジョッフル」將軍は「サン・オメール」に於て「フレンチ」及「フォッシユ」兩將軍と面談せり同將軍は英「フレンチ」將軍に十個師團を以て北方より「ランス」及「リーグアン」町を迂回しつつ「ロア」及「ハリユック」に向ひ攻撃せんことを

要求せり然るに「フレンチ」將軍は「イープル」に向ひ攻勢を取らんことを欲せしか遂に佛軍總司令官の意見に同意するに至り八月十日始めて「ジヨッフル」將軍に承諾の旨回答せり

此の如くして九月中旬に至り英、佛は重砲彈藥多數を貯蓄することを得るに至りたるを以て九月二十二日より「アルトア」及「シャンパーニュ」兩地方に一大攻勢を採り此兩地方に於ける中央突破の成功に乘して全線の攻勢移轉を行はんとせり之か爲「アルトア」地方二十八個師團、騎兵六個師團（英軍九個師團、騎兵四個師團、佛軍十九個師團、騎兵二個師團）の英佛軍を使用し「シヤンパーニュ」地方には從來の佛第四軍の右半部に第二軍を挿入し約四十五吉米の正面に約二十六個師團（第一線師團騎兵八個師團を充當し猛烈なる砲擊の後歩兵の攻擊を實施せり然れとも攻擊奏功するに至らす「アルトア」方面は九月二十八日「シヤンパーニュ」方面は十月八日其攻擊を中止するに至れり然れとも本攻擊により東方正面より獨軍約十三個師團を西方に牽制せり

千九百十五年初より「シヤンパーニュ」秋季戰に至る聯合軍の作戰を觀察するに英國は軍備の大擴張を行ひ次期の攻勢を準備すると雖西方戰場の作戰は主として佛國に讓りて自國將來の爲「ガリポリ」作戰を企圖するは英國の爲有利なりとの方針を採用し佛軍は依然として其國土を獨軍の爲占領せられ獨軍を擊攘するに非されは佛國參戰の目的を達成し得す佛軍の主要戰場は常に西方戰場にあり從つて次期攻勢に對する佛軍の準備と決心とは願る眞面目なるものあり故に「ガリポリ」作戰及救露協同の爲準備不十分なる過早の攻勢の如きは佛國の採らさる處なり

露國は千九百十五年初以來獨軍の爲擊破せられ自國の立場より英佛軍の協同を求むること切なり然れと英佛兩國の國家利己心と當時に於ける兵器彈藥の補充難と西方戰場の陣地化とを觀察する時は攻勢準備の完成するまて救露の目的を以て過早の攻勢をなすは極めて不利とする處なり從て佛軍は「シヤシパーニュ」秋季攻勢準備に向ひ全力を傾注し救露協同の如きは重要視する能はさ

る處なり

千九百十五年五月に至る間佛軍の「シャンパーニュ」冬季戰英佛軍の「アラー」攻勢の如きは救露協同の精神により實施せられたるもこれ悉く申譯的のものなり唯「シャンパーニュ」秋季戰に至りてはこれと其主義を異にし佛軍の獨軍突破を企圖せる作戰にして救露の如きは其結果より生する副目的に過きす以て聯合各國か其作戰に統一と連繫なく各其國軍の立場と國家利己心より出發して行動し聯合各國軍か外線より相策應して同盟軍を擊破する策に出てす依然として各軍割據の狀況を呈せり之に反し獨墺軍は此聯合軍不統一の好機を利用し東方に巴爾幹に猛威を逞くせり

此間伊軍又「イソンゾ」正面に二回の攻勢を實施せしと雖聯合軍に大なる影響を與ふる能はさりき玆に於てか聯合軍行動統一の問題は當然惹起せさる可からさる結論たりしなり

第二期　合議時代

第十章　千九百十五年末に於ける聯合軍指揮統一問題

聯合軍の行動を統一する必要あるの議論は開戰後間もなく有力者間に論議せられたる處なるか千九百十五年に於ける聯合軍の作戰不統一の結果本問題は愈〻具體化するに至れり

佛軍に於ては千九百十五年「シャンパーニュ」秋季戰の準備間六月二十三日「シャンチイー」に於て佛大統領の許に佛首相「ヴイヴイアニ」陸相「ミルラン」、「ジョッフル」、「フオッシユ」、「カステルノー」、「ヂンバイユ」四將軍の會合を見るに至り其席上聯合軍行動の統一に就き論議せり卽ち

『獨軍は聯合軍間の統一なきを見て獨軍勝利の擔保なりと信しあり故に萬難を排して聯合軍は總指揮官を新設せさる可からす之か爲「ジョッフル」將軍を首腦とする一の合議機關を設置し以て連絡を圓滑ならしむる原則を是認することに決せり』と

千九百十五年六月末「カレー」に於て七月一日「シャンチイー」に於て聯合軍軍事會議開催せられ席上「ジヨッフル」將軍は東方露軍に協力する爲英佛軍正面及伊、塞正面上に於て聯合軍は成るへく速に一大攻勢を取らさる可からさることを主張せしことあり

右の如く千九百十五年六月末以後聯合軍は軍事會議を開催し其行動を統一して最後の戰勝を獲得せんとする氣運漸く熟するに至れり偶〻千九百十五年末に至る聯合軍は東西兩戰場は勿論巴爾幹伊、墺各方面其行動に何等の統一なく常に內線にある獨墺軍の爲先制の利を收められたるを以て茲に更に聯合軍行動の統一の必要を痛感するに至れり然れとも未た單一指揮權を以て聯合軍を指揮せんとするの氣運には至らさりき「ジヨッフル」將軍の千九百十六年に於ける作戰方針は聯合軍は各方面相呼應して內線にある獨墺軍に對し集中攻勢を敢行し獨軍の攻勢權を奪取せんとするにあり之か爲千九百十五年十二月六、七、八日の三日間「シャンチイー」に於て聯合軍軍事會議の開催を見開戰以

千九百十五年十二月「シャンチイー」聯合軍軍事會議

來の聯合作戰計畫は漸次協調の域に達し千九百十六年度の作戰は前年度に比し統一の氣運に向ひたり

該會議に於て左の如き聯合軍規約書を作爲せり

第一、主要戰場

聯合軍は主要戰場上(露、英、佛、伊太利)に於て各方面同時に協同攻擊を必要とす之か爲聯合軍は十分なる兵器及材料を準備し以て攻勢に威力あらしむること而して聯合攻擊を同時に實施し能はさるも十分接近して行ひ敵の豫備隊を一正面より他正面に移動する能はさらしむ

攻擊開始は迅速なるを要す明年三月以降に之を實施し得は大に可なり(露國は明年六月以前に開始し能はさる旨主張せり)

攻擊開始時期は左の諸件を顧慮し決定するを要す

(1) 氣候上の關係

(2) 敵軍の狀況竝聯合軍の政治及軍事的形勢

敵か機先を制し聯合軍計畫攻撃前我に對し攻勢を取りたる時聯合軍は左の準備を必要とす

(1) 聯合各國軍は其擔任正面に於て常に敵の攻勢を阻止するの準備を爲しあること

(2) 敵か聯合軍の一に對して攻撃に出てたる時は他の諸聯合軍は出來得る限りの援助を與ふること

聯合軍は自今絶えす局部的攻撃を實施し敵の兵力を損傷せしむることを努めさる可からす就中多くの兵力を有する國軍に於て然りとす

第二、次等戰場

各次等戰場には最小限度の兵力を供するを以て滿足すること現下近東に派遣しある諸軍隊を以て十分其要求に應し得へし

右の如き規約書の制定を見るに至りしも該會議の内容を觀察する時は種々意見の衝突を來せしを以て以下會議の狀況に就て略述せんとす

「サロニカ」戰線に對する意見衝突

英國は「サロニカ」戰場より撤兵して埃及掩護の目的に其兵力を使用せんことを主張せしものの如く之に對し伊、露兩軍か「サロニカ」戰線を維持することは兩國に大なる影響を有するを以てなり

駐佛露國大使「イズウオリスキー」は佛國政府に對し「サロニカ」戰線の價値大なることに就き主張せしにこれに對し佛首相「ブリアン」は言明して曰く

『目下の處サロニカ正面に於て攻勢を採ることは全々不可能なるも佛國は百方手段を盡し將來該方面の攻勢をなすに必要なる準備を整へつつあり現に佛國は「サライユ」將軍の要求に基き二個師團の增援隊を「サロニカ」に向け出發せしめつつあり最初六萬を數へたる「サロニカ」の佛軍は目下殆んと十萬に達し重砲三十個中隊を有せり』と

「サロニカ」戰線問題に對する英、露意見の衝突は千九百十六年一月まて繼續せられ佛國はこれか調停に任したるものの如し而して遂に「サロニカ」戰線を保

持することに決せり

聯合軍指揮統一機關設置に關する英、佛、露の意見

佛國は聯合軍指揮統一機關を佛軍總司令部内に設置せんと欲し十二月二日附大統領令を以て聯合作戰の統轄に必要なる諸機關を佛軍總司令部内に設置することを認められ諸聯合國政府は其代表武官を其許に派遣常設することに決せり十二月十二日「ジョッフル」將軍は大統領令を以て全佛軍總司令官に任命せられたりこれ佛軍統帥官の地位を他聯合軍總司令官に比し向上せしめ以て聯合軍の統一を便ならしめんか爲なり

英軍は千九百十五年以來「ガリポリ」方面の失敗に鑑み千九百十六年に於ける作戰は英、佛、露等の聯合軍相提携して各方面一齊に攻勢を採るを緊要なりとなし全力を西方戰場に傾注するに決せり而して英國内にも聯合諸軍をして更に密接に連繫せしむるを必要とするの運動起り首相「アスキス」の如きは參謀部の勢力を增進し英、佛、露の聯合基礎を堅固ならしむる旨聲明し「ヘーグ」將軍（千九百十五年十二月十九日「フレンチ」將軍と交代す）亦攻勢作戰の基礎を英、佛、露三國陸軍の提携にありと

なし聯合軍指揮統一機關を佛軍總司令部内に設置することを承認せるものの如し然れとも千九百十五年十二月英政府の「ヘーグ」將軍に與へたる訓令は開戰當時「フレンチ」將軍に與へたる訓令と其綱領を等しくす卽ち佛、白軍と協同せんとする方針は其濃度を加へたりと雖「ヘーグ」將軍の統帥權は依然として獨立せり聯合軍と協同作戰するに必要とする程度範圍を超越して「ヘーグ」將軍は佛軍總司令官の命令に服するの義務は斷して負はさりしなり

指揮統一問題に關する露國の意見は聯合軍全體を統轄する統帥機關を設置するを必要なりとなし且戰爭に於ける露國の特別地位に鑑み露軍總司令官をして聯合軍統一の任に當らしむへしと云ふに在り

尙露軍の主張する處は露軍は最も「ウキイン」及伯林を衝き易き地位にあり且露軍は廣正面なる戰線に於て其行動は機動的ならさる可からす狹少なる正面を以て巴里を掩護する狀況にある英佛軍の行動は自然の情勢上陣地戰的なりと斯の如き陣地戰を指導する處の佛軍總司令官「ジョッフル」將軍か專ら運動戰

をなすへき露軍と其行動を一致せしむるは不可能なるへし蓋し機動戦に任する軍の兵力配置の如きは極めて變化に富み且緊張せる注意及不斷の判斷を要求するものなれはなり

然るに「ジョッフル」將軍は聯合軍全般の指導權を其掌中に握らんとす之に反し若英、佛、伊軍か露國の指導に從ふ時は陣地戦に任する軍か機動戦に從事する軍に從屬することとなり一般的行動を容易ならしめ且獨軍をして內線作戦をなし得る利益を失はしむるに至るへきこと明瞭なりと

然れとも此露國の主張は戦略上の見地上よりのみ立脚せるものにして西方戦場にある英、佛兩國をして承認せしむる能はさりき

會議の狀況右の如く多少の內爭を惹起せしと雖前揭の如き聯合軍規約書なるものの成立を見開戦以來各國割據の作戦を實施しつつありし聯合軍は其協同を調節すへき合議機關組織せられ聯合軍全般の作戦方針(主要戦場集中主義)確立し翌年に於ける作戦をして過去に比し面目を一新せしむるに至らしめたりこれ「シャンチイー」軍事會議の齎らせる顯著なる功績と云はさる可からす

第十一章　自千九百十五年末至「ヴェルダン」戦　英、佛、露聯合作戦（附圖第六參照）

千九百十六年に於ける聯合軍の攻勢準備と佛「ジョッフル」將軍の努力

聯合軍は千九百十五年十二月「シャンチイー」軍事會議に於て決定したる作戦方針に基き千九百十六年に於ては各方面相呼應して攻勢を實施し獨軍より先制權を奪取せんとせり

千九百十六年一月以來新任英國參謀總長「ロバートソン」將軍は其作戦方針(西方戦場兵力集中主義)につき「ジョッフル」將軍と同一意見なりしも尙英本國防備を不安とする英國內輿論及「キッチナー」卿の英國植民地發展策とを顧慮外に置く能はさりきされは英軍は其編成せられたる七十個師團中十二月二日には其半數(三十四個師團)を佛國正面に輸送し其他の師團は英國內に殘置し海外就中埃及戦場に使用せんことを企圖せり然れとも當時の實況は埃及は毫も敵の攻撃を受くる危險なかりしなり

茲に於て「ジョッフル」將軍は絶えず英軍總司令部に兵力を西方戰場に輸送せんことを督促し英軍亦戰爭に眞面目となり十六年三月七日在佛國英軍は四十二個師團に達するを得たり

露軍の編成整備問題を解決することは更に困難なる問題なりしなり「ジョッフル」將軍は千九百十五年に於て長期の退却後材料缺乏せる露軍の狀況を佛國政府に通告し露軍を卽時援助すべきことを要求せり殊に露軍が現に缺乏せる材料(銃砲、飛行機)を先つ送付せんとせしも輸送機關の不良就中凍結と海上閉塞とは佛、英國の試みたる努力も無效なるのみならず日本及加奈陀よりする輸送も外交上及西比利亞鐵道の混雜は如何ともする能はさりき

伊國に對しては「ジョッフル」將軍は伊國新重砲中隊創設の爲必要なる材料を供給せり

國土の全部を失ひたる塞軍を救濟することも急遽解決するを必要とせり卽ち十五年十二月初旬「アドリアチック」地方に敗退解散せる塞軍は瀕死の狀態にありこれに對し「ジョッフル」將軍は「ピエロンド・モンテジル」將軍をして伊軍總司令部と交涉し伊軍の掩護下に塞軍を「バロナ」港に乘船せしめ二月十九日約十六萬人に減したる塞軍全部を「コルフ」島に集結せしめて一軍を編成し「サロニカ」方面に使用せんことを企圖せり

近東軍の組織に關しては軍事及政治上聯合軍間に種々の問題を惹起せり卽ち近東に多大の兵力を派遣するは協定せる一般原則に反するも政治上希臘か首鼠兩端の說を持し動もすれは聯合側に敵意を有せること羅馬尼をして聯合側に立たしむるの必要あり然るに英佛間に近東に維持すべき兵力に就て何等具體的協定の存せさりしことは本問題を益〻紛糾せしめ其結果「サロニカ」戰線を保持するに決せしこと前述の如し佛國は總參謀長「カステルノー」を「サロニカ」戰線に派遣し實地視察を行はしめ佛本國軍隊及「ガリポリ」半島撤退部隊を增加するに決し十六年二月十二日佛軍四個師團、英軍六個師團を算し尙編成整頓中に在る塞軍六個師團を速に「サロニカ」戰線に送ることを協定せり茲に於

て「サロニカ」に於ける聯合軍の兵力は三十二萬人を算するに至れり

「ヴェルダン」戰に對する聯合軍の對策

「ジョッフル」將軍は二月十八日英佛軍の「ソンム」攻勢に對する祕密訓令を「ヘーグ」將軍に與へたり然るに聯合軍の統一的攻勢の準備また整はさるに先ち獨逸皇太子軍は機先を制し二月二十一日「ヴェルダン」に對し急襲を開始し其攻撃益〻猛烈なりこれに對し「ジョッフル」將軍は英軍に乞ふて其負擔戰線を延伸し其交代により生したる兵力を以て萬一に備へ三月十二日新情況に對する計畫を策立せんか爲聯合軍司令部代表者を「シャンチイー」に集合せしめ伊軍及露軍に對しては獨軍の攻勢を緩和せしむる爲局部的牽制攻撃を實施せんことを求め英佛軍は依然最大攻勢の爲最大準備に努力せんとする既定方針を變更せさりきこれ「ジョッフル」將軍か「ヴェルダン」正面は獨軍の攻勢を必す拒止し得へしとの確乎たる自信を有せしを以てなり

千九百十六年三月十二日「シャンチイー」聯合軍軍事會議

該會議に於て聯合軍總司令部代表者は全員一致を以て左の諸件を決定せり

(1) 露軍は五月十五日頃攻撃を企圖すへきこと

(2) 英佛軍は六月一日頃攻勢を實施すへきこと

(3) 露、伊兩軍は佛軍か獨軍と危險なる戰鬪を交へつつある間敵の豫備隊を抑留せしむるに足るへき牽制攻撃を行ふへきこと

(4) 近東方面は整備を主として現狀維持とす

三月十二日聯合軍軍事會議に於て決定せる右方針は三月二十七日各聯合國政府の承認を經るに至れり

佛軍總司令官「ジョッフル」將軍は右の方針に基き左記諸件の達成に努力せり

(1) 佛軍は諸聯合軍の主體たるへきこと但之か爲餘り過大なる損害を招くことは之を避けさる可からす

(2) 英軍は各種の手段を盡し佛國に其兵力を集中すへきこと

是「ソンム」攻勢を目的とせる佛軍諸準備は「ヴェルダン」戰の爲吸收せられたるを以て英軍は佛軍に代り攻勢の主體たらんか爲なり

(3) 成るへく速に總攻撃を開始し得る如く之を準備すること

然れとも氣候上の諸條件を顧慮するを要す露軍の攻撃準備を完成する爲には多くの時日を要することをも顧慮せさる可からす

(4) 成し得れは近東軍の攻勢を以て英佛軍攻撃伊軍攻撃及露軍攻撃を補助せんか爲近東作戰に關しては諸聯合軍をして佛軍の意見に同意せしむることに努力すること

(5) 巴爾幹に於ける形勢に絶えす注意しつつ有ゆる好機に乘すること

然るに「ヴェルダン」に對する獨軍の攻勢は益〻眞面目となりし爲「ソンム」會戰に使用すへき「フオッシュ」將軍の作軍師團數は漸次減少し「ヴェルダン」正面に增援せさる可からさるに至れり卽ち四月下旬佛軍「ソンム」會戰に使用すへき兵力四十個師團は三十個師團に減少し六月下旬に於ては佛軍六十五師團は「ヴェルダン」戰に參戰し(當初四十二師團)「ソンム」攻勢に使用すへき佛軍師團は二十六個師團なるへしと報せられたり從つて「ソンム」攻勢を實施せんと欲せは勢ひ英軍は佛軍に代りて其努力を倍加せさる可からさりき

「ジョッフル」將軍及佛國政府は英軍を督勵し其奮鬪を強要せり六月下旬に至り佛國に於ける英「ヘーグ」軍は六箇月間に埃及英本國より招致せられたる十八個師團の增援を得英軍全部合計五十四個師團を算し其內二十六個師團は「ソンム」戰に參加せしめんとせり而して千九百十六年九月に至り英國は遂に徵兵制度の採用を見るに至れり

千九百十六年二月以來佛軍は「ヴェルダン」要塞附近に於て獨軍の猛攻を受くるや佛國人士中には「ヴェルダン」戰を緩和する目的を以て英軍の攻勢準備を待つことなく卽時「ソンム」の豫定攻勢を開始すへしと佛軍總司令部に强迫するものあり又佛諸新聞紙には「獨軍は三箇月間其全力を以て我を攻撃し佛軍は諸豫備隊を消耗したるに拘はらす英軍か之を傍觀するは何事そや」と英軍攻撃の論文を散見するに至り加之佛第二軍司令官は他正面に於て陽攻を敢行し以て「ヴェルダン」の苦境を緩和すへしとの意見を具申せり狀況此の如きに拘らす「ジョッフル」將軍は『攻撃開始後直に停止する如き陽攻』は何等の效果なし寧

ろ英軍の準備完結したる後效果大なる攻勢を實施するに決心し專ら英軍と交涉を重ねたり

露軍の整頓は多大の日子を要すると氣候殊に融雪の關係は攻擊準備に齟齬を惹起せり玆に於て「ジヨッフル」將軍は三月初旬露軍に向ひ過早の參戰を要求することを斷念し一牽制攻擊を要求せりこれに對し露軍は總兵力六十六個師團、騎兵九個師團半を以て三月以降「リガ」、「ヤコブスタット」、「ナロチ」湖方面に於て攻勢を實施したるも大なる成功を見さりき

五月初旬「ジヨッフル」將軍は更に露軍豫定攻勢開始を六月十五日まて延期することを承認せりこれ露軍の攻勢準備整はさるを以てなり之か爲に英佛軍の攻擊開始は七月一日に延期せさる可からさりき而して佛軍は「ヴェルダン」戰に於て益〻其兵力を消耗せり以上英佛軍の攻勢を延期することは佛軍の忍ふ能はさる處なるを以て「ジヨッフル」將軍英「ロバートソン」及「ヘーグ」兩將軍は「ボークスヌ」に於て會議を開催し意見の交換をなせり

然るに伊軍は「トレンチノ」正面に於て五月十五日以降墺軍十七個師團の爲奇襲せられ六十吉米の正面に於て退却し伊軍の後方連絡線一時危險となりたる爲伊「カドルナ」將軍は佛「ジヨッフル」將軍を介して露軍の攻勢を開始せんことを嘆願せり

佛「ジヨッフル」將軍は一方伊軍の急を救ふを要し他方聯合軍の既定計畫を變更して不準備の露軍をして過早に攻勢をとらしむる能はす其中間に立ちて頗る苦心せり而して露軍總參謀長「アレキシエフ」將軍に對しては露軍の準備之を許すに於ては六月十五日の豫定攻擊開始日を其以前に繰上るも差支なきことを說示すると同時に伊軍總司令官「カドルナ」將軍に對して伊軍の優勢と地形の險に信賴し極力墺軍に抵抗し以て露軍の集中及其彈藥輸送に必要なる時日を與へんことを說諭せり

其間伊軍も力戰し露西南方面軍は六月四日「ガリシヤ」に於て露西方正面軍は六月十八日「ピンスク」北方地區に於て一大攻勢を實施し墺軍の攻勢を一時牽

制し伊軍の危急を救援するを得たり此露軍の攻勢と聯合諸國との努力は遂に羅國をして聯合側に立ちて參戰するに至らしめたり

第十二章　自千九百十六年七月 至同年十二月　聯合軍總會戰指導　（附圖第六參照）

千九百十六年六月以降露西南方正面軍及西方正面軍か攻勢を開始するや聯合各軍は前協定に基き英佛軍は七月一日より「ソンム」兩岸地區に於て攻勢を實施し會戰は全夏期間猛烈に持續せられ秋季「ヴェルダン」に於ける攻勢移轉の成功を以て終を遂け伊太利軍は墺軍を六月二十五日「トレンチノ」方向に擊退したる後八月五日以降「イソンゾ」正面に於て攻勢を實施せり

羅馬尼軍は八月二十七日勝戰せる露軍の左翼に於て參戰し九月中旬攻勢に轉したり

此間聯合各國軍か「シヤンチイー」軍事會議の協定に基き各方面如何に協同努力せしやを說述せん

一、英佛軍の「ソンム」攻勢

「ソンム」に於ける七月初旬の英佛軍攻勢は六月に於ける露西方及西南方正面軍の攻勢と最も密接なる連繫を取れり又「ソンム」會戰は八月下旬に至り羅馬尼の參戰せるとき及伊太利軍か「イソンゾ」河畔に攻擊前進せる時これと連繫して攻擊を實施せり

此間佛軍總司令官「ジヨッフル」將軍は絶えず英軍司令官と連絡し他の諸戰場に於ける攻擊と策應し聯合軍の一般目的を達成せんとせり

二、伊太利正面

六月露西方及西南方正面軍の攻勢は墺軍の伊國「トレンチノ」に對する攻勢に脅威を與へたるを以て墺軍は「トレンチノ」に於ける伊軍攻擊を中止し露軍正面に對し兵力を集結せり

此狀況に於て伊軍は「トレンチノ」方面に逆襲を行ふへきや或は「イソンゾ」正面に於て前攻擊計畫を更に再興すへきやにつき苦慮せり而して「ト

レンチノ」方面に攻撃を迅速に行ふ時は墺軍の其兵力を伊、露兩方面に分離しあるに乘し伊、露兩軍は墺軍に對し最も有利なる協同攻勢を實施し得ることとなるなり

佛「ジョッフル」將軍は右伊、露兩軍の協同攻撃を敢行するを有利なりと信し露軍總參謀長「アレキシエフ」將軍も又同一意見たりしを以て「アレキシエフ」將軍は露西南方正面軍の前面に「トレンチノ」方面より轉用せられたる墺軍部隊の現出するを見るや屢〻「ジョッフル」將軍に嘆願して曰く

『貴下は伊軍か猛烈なる攻勢を取りて墺軍兵力を抑留し以て露軍の成功を可能ならしめんことを伊「カドルナ」將軍に力說せんことを望む』と

佛「ジョッフル」將軍も同意見にして伊軍の攻勢を速かに實施せんことを希望せり

伊軍總司令官「カドルナ」將軍は六月二十五日「トレンチノ」正面地區に於て逆襲を實施し先きに墺軍の爲奪取せられたる土地を奪還せり然れとも墺軍の一大抵抗に際會し且該方面より攻撃を敢行せんか爲には國境線にある墺軍要塞を突破せさる可からす故に七月初旬「トレンチノ」方面の前進を斷念せり而して「ガドルナ」將軍は「ジョッフル」將軍に通知して曰く

『伊軍は今後再ひ「イソンゾ」河畔に於て其最初の攻撃計畫を再興せんとす同河畔に於ては從來既に完全なる攻撃準備を爲しあるを以て八月以後には攻撃を開始するを得ん』と

然れとも「ジョッフル」將軍は先に露「アレキシエフ」將軍の通牒あり假令「イソンゾ」正面に既に攻撃準備をなしありと雖攻勢を再興せんか爲には相當の時日を要すへきを以て其機の遲れんことを恐れ伊軍に督促する所あり

然るに伊軍は「イソンゾ」正面に攻勢を再興するに決し八月五日に至り「ゴルチア」「モンフワルコーネ」兩地區に於て攻勢に轉するを得たるも伊、露兩軍は協同作戰をなすこと能はす其間墺軍は獨軍の增援を得て露軍の壓迫

より脱却するを得たり

三、露軍正面

佛「ジヨッフル」將軍は露軍の攻勢か其規模小なるに於ては聯合作戰上大なる不利あるへきを以て六月中更に「アレキシエーフ」將軍に對し

『成るへく速に波蘭に於て中央突破を開始せんことを』

督促せり然れとも當時露軍は戰敗の恢復未た十分ならすして材料に缺乏し容易に攻勢に出つる能はす六月中旬以後西方正面軍は中央突破を七月中旬北方正面軍は「リガ」方面に攻勢を實施せるも獨軍を突破する能はす獨軍をして墺軍を救援せしむることを可能ならしめたり若し露軍にして大規模の攻勢を實施せしならんには聯合作戰上の效果更に偉大なりしならんも當時の露軍の狀況を一考する時は蓋し已むを得さりしならん

四、羅軍の敗退と聯合軍の處置

千九百十六年九、十月の頃羅軍は「トランシルバニエン」に於て獨「ファルッケンハイン」軍の爲大敗を受くるや英、佛政府は露軍か更に羅軍を援助するならんには其報酬として英、佛兩國政府は戰爭材料を露軍に供給し且近東軍を增加すへしと又佛國政府は露、羅兩國に對し極力該方向の戰線維持に努力せんことを勸吾せしも又如何ともする能はさりき

五、近東軍の正面

本期間に「サロニカ」正面に於ける聯合軍の努力は羅軍をして勃軍に顧慮することなく參戰せしむることと希臘に對し必要なる警戒をなすにあり之か爲該方面に於ても攻勢方針を採用し英佛間に於て交涉を重ねたり然れとも全般の戰況を考る時は聯合軍の負擔正面は極めて廣大にして主力戰場に於ける聯合協同作戰を徹底せしむる爲餘りに力を分散するの虞ありしか故に八月下旬佛、露、伊軍三個旅團を近東軍に增加せるのみ

千九百十六年戰に關する觀察

千九百十六年に於ける聯合軍の作戰を觀察するに千九百十五年十二月に於ける「シヤンチイー」軍事會議に於て聯合軍の作戰方針を決定し且聯合作戰を一

の合議機關に依り指導するに至りてより各方面相呼應し獨軍を包圍攻撃し獨軍をして内線に於ける先制の利を放棄せしめたりこれを千九百十五年の作戰に對比するに聯合作戰として顯著なる進歩をなしたることを確認し得へし殊に英國は千九百十五年に於ては戰略は政略の爲甚たしく掣肘せられ政治家の意見により「サロニカ」戰線を構成することに重點を置き西方戰場を輕視したるに反し千九百十六年に於ては英佛軍共に其主作戰を西方戰場に傾注し以て獨軍に當ることに努力せり佛軍か二月「ヴェルダン」要塞に對する獨軍の攻撃を受くるや英軍は善く佛軍に協同して佛軍の力を「ヴェルダン」戰に傾注するを得せしめ佛軍か「ヴェルダン」正面を防止するや英軍は佛軍と相協力して自ら攻勢の主體となりて「ソンム」會戰を實施したる如きは英、佛兩軍の協同前年度に比し著しき進歩の跡を認めさるを得す然れともこれを至細に觀察する時は合議機關の不利とする處多多あり卽ち「ソンム」會戰を觀察するに「ジョッフル」將軍の指導の下に英「ヘーグ」將軍と佛「フオッシュ」將軍の併列協同作戰にして一戰場の指揮權は二途に出て互に協同するに止まれり爲に兩軍接際部の攻撃進捗意の如くならさりき

飜つて同盟軍の作戰を觀察するに千九百十五年まて先制の權を獲得し到る處聯合軍の不統一に乘してこれを突破せしか千九百十六年聯合軍の攻勢企圖を察知し依然其先制權を保有せんと欲し聯合軍の攻撃準備未た成らさるに乘し獨軍は二月二十一日「ヴェルダン」に向ひ墺軍は五月十五日伊國「トレンチノ」地方に於て伊軍に對し攻勢を企圖せり然るに六月に至り露軍は西方英佛軍の攻勢に協同する爲東方に攻勢を實施したるを以て獨墺軍は東方に危險を感し西方戰場より約五個師團、獨國内の新編合部隊三個師團、東方「プリペット」河以北より約五個師團、伊太利方面より約三個師團合計約十六個師團を東方戰場に移送せり然るに西方英佛軍は七月より十月中旬に至り「ソンム」附近に一大攻勢を實施し羅軍亦八月二十八日聯合軍に參戰して墺國「トランシルヴアニエン」に進入し伊軍は八月以後十一月まて「イソンゾ」方面に四回の攻勢を實施せり

此の如く聯合軍は各方面相呼應したるを以て嘗て先制の利を保持しありし同盟軍も「ヴエルダン」戰の失敗と共に受動の立場に變化して戰線防止に專念するに至れり

之を要するに千九百十六年の作戰間に於て聯合軍は聯合作戰上に於て左の目的を達成することを得たり

(1) 各聯合國政府及聯合各軍司令官は作戰上に於て相協同せんとする精神を湧起せしめたること

(2) 各聯合軍總司令官は相知り相助け其努力を一致せしむることを學ひたること

而して戰爭終局の勝利は一に聯合各國軍の協同統一により達成し得へしとの信念を得るに至れり

第十三章　佛軍司令部に於ける聯合作戰指導機關

開戰後佛軍は聯合軍の主體となり聯合軍指導の任に當らさるへからさりき殊に千九百十五年十二月「シヤンチイー」の軍事會議開催後聯合軍の合議機關たる佛軍司令部の下に設置せらるるに至りたるを以つて「ジヨッフル」將軍は同司令部に屬する新聞課及外國戰場課をして外交竝聯合作戰の指導に任せしめたり以下是等機關の活動と其效果とに付き概說せんとす

(一)　新聞課

佛軍總司令部には新聞課なる一課あり其任務は新聞に戰況を報導する以外、外交政策殊に諸聯合國及諸中立國間に宣傳事業を企圖せり將官「ペレ」は此目的を達成せしむる爲中尉「ペルノウ」を選任せり

司中尉は曾て佛國外に生活すること十五年間諸外國の外交俱樂部と交際し歐羅巴外交政策に精通せるは勿論諸外國に數多の新聞記者及政治家の知己を有せり

これか爲諸外國の新聞記者及政治家は佛國に來るや大本營に同中尉を訪問し

彼等はここに又總參謀長を訪問するを常とす彼等は總參謀長「カステルノー」將軍と面談するや同將軍の時勢に精通せるを見て驚ろきたり又怜悧にして辯舌に長せる將官「ペレ」は諸外國記者及政治家に向ひ佛國の戰鬪方針を說述し『若しも聯合國か必要なる犧牲を（損失）承認するに於ては聯合軍の勝利は確實なり』と云へり就中英國人「ノースクリフ」（新聞記者）は屢〻司令部に出入し參謀長との對談中に於て英國に徵兵制度を施行するの必要を確信するに至り決斷力に富める同氏は英國に歸還後新聞紙上に於て頻りに徵兵制度の必要を唱へ某々政黨の反對ありしに拘らす之を採用せしむる事に成功せり

「デリテレグラフ」新聞社長にして英國諸新聞社組合長たる「バルシハム」卿か亦佛大本營に來り中尉「ベルノウ」と一の協約を結ひ佛新聞紙の報道を英本國及其植民地の諸新聞紙上に轉載することを約束せり是れ佛國戰鬪方針宣傳上に於て一大便益なりしなり

殊に「ペレ」將軍の淡白眞面目なる語調は訪問者の人氣を引き同將軍か佛國兵卒の剛勇を語り訪問者をして落涙せしめたる事屢〻なりき將軍の言を聞きたる外國人は忽ち熱心なる佛國贔負の人と爲り殊に多數の米人をして反獨的氣分を養はしむるに效果ありしと云ふ

又佛軍總司令部は各國公使館附武官をして戰況の眞相を諸外國に報道せしめたり是れか爲外交上公使館內に文武兩機關の活動を見政策上の齟齬を生せり

是等「ヨジッフル」將軍の直接行動は遂に佛國外務省及新聞局の嫉妬する所となり政治家の反感を買ふに至り是か爲外國記者の戰線訪問には必らす政治記者を附隨せさるへからさるに至れり

而して「ジョッフル」將軍佛軍總司令官を罷免せられ「ニヴエール」將軍これと交代せる時代に於ては司令部の權限を縮小する目的を以て新聞課の廢止を見るに至れり

「ペタン」將軍の佛軍司令官となるや新聞課は復活し在巴里陸軍省軍事新聞局との兩勤務を中佐「プレヴオ」をして統一せしめ以て兩者の爭鬪を防止せんと

せしも效果を收むる能はさりき

（二）外國戰場課

外國戰場課

千九百十六年初「ジョッフル」將軍は其司令部に於ける新聞課を擴張すると同時に更に外國戰場課なるものを設置せり同課は戰場に於ける聯合各國軍の行動統一主義より指揮統一問題の進捗に盡力せり其他該課は獨逸を糧食封鎖する事を企圖せり就中英國政府か時々獨逸に糧秣軍需品等を補給せんとする諸中立國と通商をなす自國民を默認しあること及佛國內にも封鎖規則違反者のあること等を英、佛兩政府に提言せり

其他「サロニカ」戰線問題及羅馬尼の參戰問題等外務省の當然なすへき職責に干涉し主として戰爭政策を實施せんとせり爲に佛國內閣殊に外務省、大藏省封鎖省等の反感を買ふに至り千九百十六年の作戰殊に「ヴェルダン」及「ソンム」戰に於ける「ジョッフル」將軍の失敗は政治家の反對する處となり「ニヴエール」將軍の總司令官任命と共に總司令官の權限を縮小し以て武權は文權に屬せさる可からさるの主義を實現するに至れり要するに「ジョッフル」將軍の佛軍總司令官在任間は外國に對する戰爭政策を軍部か掌握し所謂二重外交を實施したる處に注意するを要す而して「ニヴエール」將軍との交代は二重外交の一掃と共に軍部の實力は甚た其影を薄らくるに至りしなり

第十四章　千九百十七年に於ける英、佛、露聯合作戰　（附圖第七參照）

千九百十六年十一月十六日「シャンチー」軍事會議

千九百十六年に於ける各方面の戰況沈靜となり千九百十六年「ソンム」會戰終了後十一月十六日英佛兩軍司令官露、伊兩國其他諸小聯合國軍事代表者は「シャンチイー」に會し千九百十七年に實施すへき作戰を協議し聯合軍攻擊の基礎を左の如く決定せり

一、戰爭の終局は十七年春季聯合軍の全力を以てする協同攻擊に依り之を決定す

二、決戰を目的とする主攻勢は佛國戰場、露國戰場に於て之を實施す（伊國